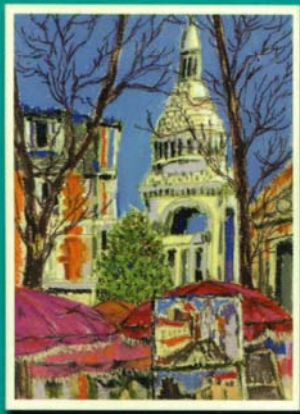


ロータリークラブに入ってよかった！

素晴らしい出逢い  
よき師、よき友は人生の宝

2



戸田 孝



ローターリークラブに入ってよかった！

素晴らしい出逢い

よき師、よき友は人生の宝

②

戸田 孝

# 目次

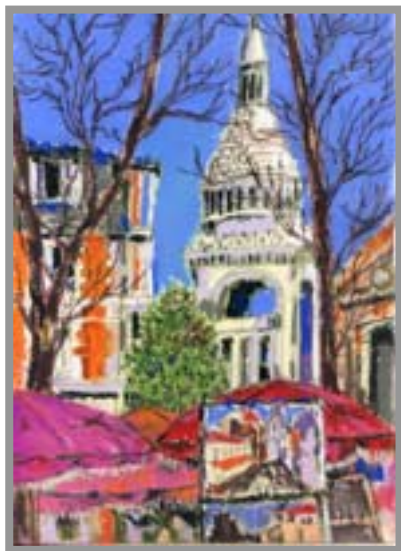
1.お読みいただきました皆様への感謝 .....	1
2.ロータリーとユーモア .....	6
3.「二本の手」オードリー・ヘップバーンの話 .....	12
4.感動がよきロータリアンを育てる.....	18
5.ロータリアンの鑑 抄録 .....	24
6.メーキャップの思い出 赤いたすきを掛けた学長さん .....	30
7.リーダーシップを高めるために .....	35
8.真如堂の鐘の音 .....	41
9.RI 副会長、ジャック・デービスさんがクラブへやってきた .....	47
10.「空を見上げて」生きてくても生きられなかった少年の話 .....	57
11.旧制中学の一年先輩に司馬遼太郎さんがいた .....	67
12.2500地区大会“友情の出愛”利尻島の感激の一夜 .....	78
13.ものづくり名人が人づくりに完敗か .....	89
14.母の言葉は心に沁みて .....	96
15.人間らしさを求めて .....	103
16.仰げば尊しわが師の恩 .....	111
17.無償の行為は100倍にも1000倍にもなって世の中を潤す .....	121
18.「サンガイ・ジュネ・コラギ」共に生きる 一生きるとは分かち合うこと .....	131
19. “Kindle The Spark Within” 「内部に火を燃やせ」 .....	141
20.中高年を過ぎて知能は最高になる .....	147

21.会員へのメッセージ .....	154
22.「我が自叙伝」「四つのテスト」の創作と有用性について .....	163
23.ベンジャミン・フランクリンとロータリークラブ .....	173
24.身体障害児、孤児など白浜招待旅行 .....	179
25.自然な気持ちで生きることが健康の秘訣 .....	187
26.ロータリー日韓親善会議 一元RI理事竹田恒徳さんの思い出など .....	197
27.一隅を照らすもので私はありたい .....	208
28.クラブを活性化する5分、10分間卓話 .....	215
29.毎週の例会は一期一会の心で .....	225
30.日野原重明先生の「豊かに老いを生きる」を読んで .....	230
31.「変えたいロータリー」ーロータリークラブ活性化のために .....	241
32.パストガバナー佐藤千寿先生の「選ばれたる人」を読んで .....	254
あとがき .....	262
筆者プロフィール .....	265
電子文庫について .....	267



# 1

お読みいただきました  
皆様への感謝



「ロータリーに入ってよかった！素晴らしい出逢いよき師、よき友は人生の宝」の続編を出すにあたり、温かい励ましをいただきました多くの方々に心から感謝申し上げます。また多くの先輩や友人から身に余る激励や感想をいただきましたこと、身に余る光栄でございます。特に、ご大役をお努めの RI 理事重田政信様、RI 理事渡辺好政様、元 RI 理事菅生浩三様、平沢先生とご一緒にグループリーダーをお努めになりました島津久厚パストガバナー。親しくご指導いただきました辻兵吉パストガバナー、私と同期の秋山博パストガバナー、永年にわたってご親交いただいています道下俊一パストガバナー、中島治一郎パストガバナー、斎藤博パストガバナー、秋永智徳パストガバナー、岡崎全宏パストガバナー、深川純一パストガバナー、濱田勝彌パストガバナー、空地啓一パストガバナー、大沢徳平パストガバナー、亀岡弘パストガバナー、成川守彦パストガバナー、広畑富雄パストガバナー、宮田宏章パストガバナー、三軒久義ガバナー、橋本長平ガバナー、第 2 6 6 0 地区のガバナー、パストがバナーの皆さんより激励いただき、村上有司ガバナー補佐、台湾より米山学友黄盛陽様をはじめ多くの皆様様に心から厚く御礼申しあげます。

また、日ごろから親しくしていただいています平岡



英信様、小山隆三様、橋本憲之様、中井義尚様、前島淳様、吉本憲司様、宮田久嘉様、近江榮美子様、飯田順雅様、小倉郁夫様、吉本昭様、坂本一民様、松本龍一様、大橋梯子様、中川政照様、をはじめ多くのロータリアン、各ロータリークラブのみなさんから、また遠く東京武蔵村山ロータリークラブの波多野稔様をはじめ多くの方々から温かい感想と励ましをお寄せいただきました。また、出合ったときは言葉で、遠くは電話でお礼の言葉をいただきましたこと、真に嬉しく厚くお礼申しあげます。

終わりにになりましたが本書出版にあたりまして、お力添えをいただきました神崎パストガバナーのご厚情に心から感謝申し上げます。

私が永年にわたって親交をいただきました同期の故山ローパストガバナーの奥様に本書をお送りしましたところ、ご子息、一紘様から連絡をいただき「ロータリーの友」の風紋に登場された同じクラブの松永祥甫先生（95歳）が「ロータリークラブは人生の道場」「会員がもっと勉強して真のロータリアンにならないとロータリーの魅力はなくなり会員増強もおぼつかない、ロータリークラブは只のボランティアグループになってしまう」と心配されています。私たちは松永先生から人生やロータリーを教えていただ

こうと有志が集まって勉強会を開くことにしました。それで戸田さんの書かれた「ロータリークラブに入ってよかった…」を学ぶ資料としてお願いいたしましたところ、7冊の著書をお送りいただき有難うございました」と丁寧なお礼の手紙をいただきました。

私は、ご息子もお父様と同じ医師として、ロータリアンとして若いグループがよき師を得て、真剣にロータリーを学ぼうとしている人々がいることに喜びと頼もしさを感じました。多くのロータリークラブで自発的にこのような学びの集いが生まれることは素晴らしいことであり、ロータリーの前途に明るさが甦る思いがしました。ロータリアンみんなが力を併せて学び、体験を語りあってロータリーの素晴らしさを知ることが、ロータリー100年の歴史を変質させることなく着実に進展させる道なのではないかと思っています。

私ごとで恐縮ですが、医学研究会に出席していた次男から手紙が来ました。「今チェコからの帰り、アムステルダムで乗り継ぎに2時間あったので、オヤジの本を読んだ。まだ途中だが、ここまでの感動を伝えたい。第4章、平沢先生の話の中にある「人からしてほしいと思うことは、すべての人にそのように行え」はその通りですね。ベートーベンの「まず命をかけて、やるだけのことをやってみるべきだ」には同感です。

5～9章の福井での黒川さんの話に涙するオヤジ世代のロータリーの方々は偉いと思います。10～14章、宇野さんの話にある障害者を兄にもつ弟の話には読みながら涙しました。ダイハツの伊瀬さんの赤壁の名文は繰り返し聞かされた話ですが、自分が勉強するとその意味がよくわかります。…時間がきました、ではまた」とあった。

小さい頃はやんちゃで仕方のない息子であったが、オヤジの本に感想を寄せてくれたことを嬉しく思った。

多くお寄せいただきました励ましや感想のお手紙を繰り返し読みながら、皆さんの温かい気持ちが伝わって、続編を書くエネルギーになったことをお伝えいたします。

拙い文章をお読みいただきました皆さまに心から感謝申し上げます。

# 2

## ロータリーとユーモアー



私の所属する八尾ロータリークラブにユーモアの達人がいる、たいへん信頼厚い名医、正田先生である。私は先生のユーモアに負けまいと一生懸命にユーモアで対抗するがぜんぜん歯が立たない。先生はユーモアの天才に属する人物だと確信する。

私は先生と同じコーラス部に属しているが、笑い半分、歌半分で一向に上達しないが実に楽しいクラブで、この楽しさは正田先生に負うところ大である。

先生のユーモアの効用かどうか知らないが16～7人のメンバーを擁し、分不相応の春、夏、冬のロータリーマーク付きブレザーを誂え、機会があればいつでも出演し、機会がなければ機会をつくって歌う。何時も同じ歌を歌うわけにもいかないので、ご苦労されるのが覚えの悪いロータリアンを指導してくださる松下先生である。不覚にも松下先生は、私がガバナーを務めた29年前から私たち不肖の弟子を教えておられたことを失念していた、それほどお若いのである。

コーラス部最初のメンバーになった私の特典は、若い頃から好きであった歌を教えていただけることと、メンバーと特に親しいお付き合いができること、日ごろ出さない大声を出して歌うことが健康によいこと、などなどあるようだが、歌った夜はよく眠れるという、願ってもない特典を発見した。ユーモアと笑い半分、

歌半分の効果は真に素晴らしいものである。

ポール・ハリスの著書「This Rotarian Age」の中に、“人は微笑に慰められてこそ人生行路を朗らかに闊歩し、友情を喚びおこすのも微笑である”と書かれている。

微笑みも大笑いも人間だけに与えられた能力であり、これがお互いの心を開く力になるのであろう。

日本の古い時代には 笑は、はしたないとさげすむ気風があった。儒教の影響があったのか「武士は三年に片頬」「武士は3年に片頬をゆるめる」、などと今から見れば信じがたいものがあった。やがて、狂言は笑いの文学となり、俳諧は諧謔を心としたユーモアの文学、川柳ははっきり笑いのある詩としての地位をえた。

加賀の千代女の有名な俳句に「起きてみつ 寝てみつ 蚊帳の 広さかな」があるが、作者不詳氏は、「お千代さん 蚊帳が広けりゃ 這入ろうか」と茶化している。けしからん返句であるが、ユーモアということで赦されるであろう。「世の中は 金と女は 敵なり」の返句に「それならば 早く敵に 出会いたい」といったとか。

先年、サラリーマン川柳の入選作に国民みんなが大

笑した。

「5歳だろう トロを頼むな 玉子食え」「昼飯は 女房セレブで おれセルフ」などなど、日本中に笑いを振りまいた。

アメリカ人が人を評価するのに、1) フェアであるか？ 2) ユーモアがあるか？ の2点を上げるそうだ。

最近の若い女性に理想の男性はと聞けば 1) 優しい人 2) ユーモアのある人 と答えるそうだ。笑いがあることは人の心を明るくする効果があるのだろう。○イギリス人のユーモアは有名で、師と弟子、上司と社員、世界の人とのコミュニケーションはユーモアの持つ力であるといわれる。

イングランドの議員が「イングランドでは馬しか食わない燕麦を、スコットランドでは人間が食べている！」と野次ったら、スコットランドの議員はすかさず「その通り、だからスコットランド人が優秀で、イングランドでは馬が優秀である！」とやり返した。さすがユーモアの国である。

○ポーランド人は脳が弱い、電球を取り替えるのに3人がかりでやっている、「1人が電球をもって、2人が脚立をまわしている！」

○中華料理店で、明日から中国人のことを“チック”

と呼ぶのをやめようとした。 “チック” の大将は「それなら、明日からコーヒに小便を入れるのをやめよう」

ユーモアは知識と違って教え込むのは難しい、日ごろから話す人も聞く人も注意しながら身につけるものである、ロータリークラブの気のおけない楽しい雰囲気の中で、ユーモアのある人からタイミングや話し方を自然に学んでいくことがコツなのではないだろうか、ロータリークラブほどそれに適した場所はないと思うがどうだろう。

南カリフォルニア大学教授 レオ・パスカリア氏は「人生へのチャレンジ」の中で、成長期に父が失業して家族が食べることもできない最低に時期に、両親は子供に「ユーモアを忘れずにしっかり自分を持ち続けることで、道は見つかる」と信じなさい」と教え続けた。

絶望感、時には逃げようがないように見えるが、ユーモアの心をもって絶望感を脇におくこと、“苦しみは何時までも続かない”と自分の心に言い聞かせることが大切だと教えている。

ロータリークラブの会員同士が楽しく、信頼感のある人との出逢いの中で自然に湧き出るユーモアは人を和ませる効果があり、それが社会生活の潤滑油となって心豊かな人生の友となるのではないかと、ユーモア

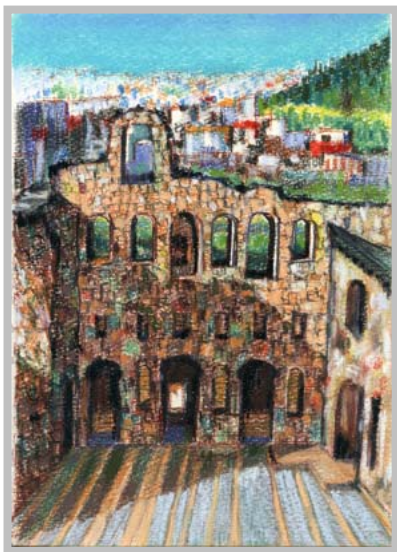


一を大切に育てたいものである。

これもロータリークラブの大切な役割のように思う。

# 3

## 「二本の手」 オードリー・ヘップバーンの話



先日、第 2840 地区大会で特別記念講演をされた中尊寺貫主・千田孝信師の講演記録を送っていただいた。ユーモアあふれ、心に残る素晴らしいお話であった。

千田貫主は 1926 年のお生まれで、私と同じ大正 15 年に生を享けられたそうである。私は、はじめて知ったのだが、千田貫主のお話では 1926 年生まれの人の中に、おどろくなかれ、マリリン・モンローとイギリスのエリザベス女王がおられるとのことである。だから、マリリン・モンローがもっと長生きしていれば、私と同じような老夫人になっているに違いない。

もうひとり有名な女優がいらっしゃって、それは、オードリー・ヘップバーンです。この方は、昭和 4 年生まれですから、私より 3～4 歳若いことになります。

アカデミー主演女優賞を獲得した「ローマの休日」や「マイ・フェア・レディ」「ティファニーで朝食を」などの素晴らしい映画の主演として活躍をされたが、私が思うに単なる女優じゃありませんね。

オードリーは、「人間には二本の手が与えられている、一本は自分の為の手である、もう一本は他人の為の手である」と言っているが、私は一瞬、ヘップバーンは仏教徒かと思いました。仏教では 2500 年も前から同じことを言っています。一本は自分のための手「自利の手」、もう一本は他人のための手「利他の手」

なのです。

ヘップバーンの、一本は自分の為の手であり、もう一本は他人のための手である。全部を自分のために使ってはいけない、もう一本は他人のために使いなさい。ということは、ヘップバーンの言いたいことは、お釈迦様も言いたいことなのですね。

人間は自分でできることは自分でやりぬく、そういう決意と勇気と努力が必要です。しかし、自分でやりぬいていると、他人のことが忘れがちになる。いかに他人様のお陰をいただき、自然から水をいただき、大地のお世話になり、太陽を燦燦と浴びて今日あることを忘れるのですね。だから、自分に与えられた二本の手を自分で使ってしまふ人が多くなった、所謂、自己中心です。

オードリー・ヘップバーンはイギリス国籍で、第2次世界大戦中は反ナチスのレジスタンスに従事し、「アンネの日記」で有名なアンネ・フランクと同じ年であったそうだ。

オードリーは1989年「オールウェイズ」を最後に映画界を引退し、その後、ユニセフの親善大使に就任して、インド、ソマリアなど世界各地でマザー・テレサのように貧しい恵まれない人たちのために幅広い活動を行っている。

私の記憶に残っているのは、アフリカの真っ黒い貧

しい子供たちに囲まれて、美しく微笑んでいる 若さの残っていたヘップバーンのテレビ画像である。

ヘップバーンは、1989年から1993年に没するまで「自分のため以外のもう一本の手」を使って輝かしい生涯を終えたという。

私は今も華やかなりし頃の「ローマの休日」でグレコリー・ペックと共演したスクリーンの妖精ヘップバーンの姿を忘れることはできない。

私たちはロータリアンである。人間として果たすべき「もう一本の手」の役割をよく知っている。それは、ロータリーのバックボーン、ロータリーの原点といわれる「決議23-34」の第1に「ロータリーは基本的には一つの人生哲学である、それは利己的な欲求と 他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである、この哲学は「超我の奉仕」の哲学である」と明言している。

これを要約すれば「ロータリーは利己と、利他の調和を目的とする人生哲学であり、サービスを第1、自己は第2に」というロータリーの原点と、ヘップバーンの志、お釈迦さんの教えである「自利の手」「利他の手」が人間としての正しい生き方を示している。ロータリアンとして親しい友人と楽しみ、互いに学び、

人のお役にたとうとする心を永年の間に身につけることで、人間としてよき人生を送るために、ロータリーはまたとない場であることに気づくであろう。

私のロータリーライフ 46 年の中で自然に自分の身についた「自分を大切にし、人の身になって考え、人のお役に立とう」とする気持ちの大切さを改めて認識することができたように思う。

1989 年、私はソウル国際大会のチーフ・アシスタント SAA として参加し、大会終了後のレセプションで日本の大学で学ばれたパストガバナーCKO 氏に聞いた詩を忘れることはできない。薄れゆく記憶を辿れば

生きているということは、  
誰かに借りをつくること  
生きているということは、  
その借りを返していくこと  
誰かに借りたら、誰かに返そう  
誰かにそうしてもらったように、  
誰かにそうしてあげよう  
生きているということは、  
誰かと手をつなぐこと  
つないだ手の温もりを忘れないでいること。

めぐり合い、愛しあい、やがて別れる日、  
そのとき悔いのないようー

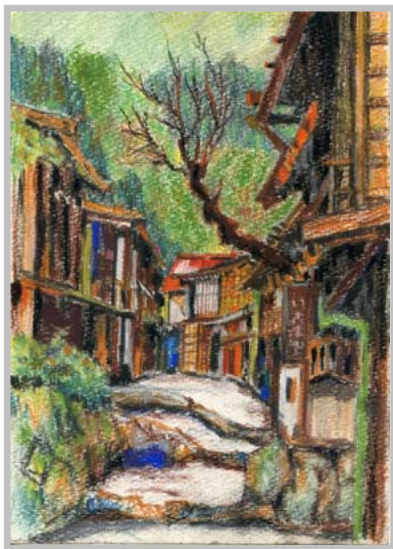
今日を明日を生きていこう。

人は誰も一人では生きていけない

人は誰も一人では歩んではいけない。

# 4

## 感動がよきロータリアンを 育てる





相田みつおさんの詩集に「一生感動 一生青春」がある。

人を根底から動かすものは難しい理屈ではなくて、全身（いのち）の感動であり、腹の底からの納得であると思う。

理屈や理論だけでは人間は本気で動かない。

理屈や理論は頭で作るものだから、頭のいい人にはかなわない。

感動はいのちの全部だから、頭のいい悪いには関係がない。

感動は他から強制されるものでも、命令されるものではなく、自分自身、つまり命そのものから出るのだから嘘はない。

感動こそ人間が人間として生きていく証（あかし）なのだ。

感動がよきロータリアンを育てる例は枚挙に暇ないが、記憶に新しい事例として次の2つがある。

1) 2002～03 度、RI 会長をつとめられたタイのビチャイ・ラタクルさんが話された「一人の男の子によって変えられたロータリー観」がある。

ラタクルさんは 31 歳でトンボリロータリークラブの創立会員になったが「私は形の上ではロータリアンでしたが、気持ちの上ではロータリアンではなかった。ロータリーは私の心に入っていなかったのです」と話しておられる。

ある日、クラブ会長の嘆願のお陰で一変することになりました。

「会長は、父親のいない子供たちをビーチ連れて行ってくれる人を探していました。来る筈であったボランティアが土壇場で辞退したので、代替りの人が必要だったのです。私は義務感で同道することにしましたが、行きたかったわけではなかったのです」。

小さい男の子がラタクルさんにまわりついたので、わずらわしいものになりました。

「はじめは困惑しましたが、時間がたつにつれて、この子が私を必要としていることに気がつき、帰路につく頃には別れるのがつらくなってきました。他の子供たちが車から降りても、この子はそばから離れようとしません。そして、この子が私に抱きつき、“僕のパパだったらいいのに”」とささやいたのです。

私は感動で目に涙を浮かべましたが、誰にも見られることはありませんでした。ラタクルさんがロータリーの強い影響を悟ったのはその瞬間でした。

「たった一人の男の子が、わがままな男の心を打っ

たのです。私はそのとき、真のロータリアンとは何であるかを悟りました」と話しておられる。

ラタクルさんは「父親のいない子供たちをビーチに連れて行く、という行動に参加したことで感動を得、真のロータリアンになったのです」と話しているが、これは、ロータリーのバックボーンといわれる決議23-34の4項にある“奉仕するものは行動しなければならない・・・”を实践されたことで感動を得、真のロータリアンになられたという生きた事例であると言えるであろう。

## 2) 1991～92年度、RI 会長ラジェンドラ・K・サブーさんの話

ある時、一人のアメリカのロータリアンがネパールのカトマンズにやってきた。

彼は道端で片足のない少年が物乞いをしているのを見たが、このロータリアンはしばらく心の中から消し去っていた。しかしその光景はいつも心に甦ってきたのである。彼はアメリカに帰国したあと、カトマンズロータリークラブに連絡してその少年を見つけてもらい、カトマンズロータリークラブを通じて少年に義足を贈り、教育を受ける資金を提供した。

現在では、この少年らメッシュ・プラサド・フマーギ君は尊厳をもって人生を生きていく青年に成長し

つつあるのです。

このアメリカのロータリアンの人生の中で、彼がロータリークラブの会員から、本当のロータリアンになった一つの転機となったのです。

ロータリアンの誰もが、同じような経験をもっておられるであろう。それは、地域社会に役立ち、職業倫理を高め、社会や他人のお役に立つ企業経営を日々実践し、国際的つながりを通じて、恵まれない異国の人々に尽くすロータリークラブの一員であり、永年にわたって行動してこられた人達だからである。

ロータリアンであるということは、一つの人生の生き方といえるでしょう。

そしてその動機は RI 会長になるとか、ガバナーになるというような動機よりもはるかに偉大なものであるといえましょう。

ロータリーは我々に、内にある善意という信条を行動に移しかえる機会を与えてくれるのです。

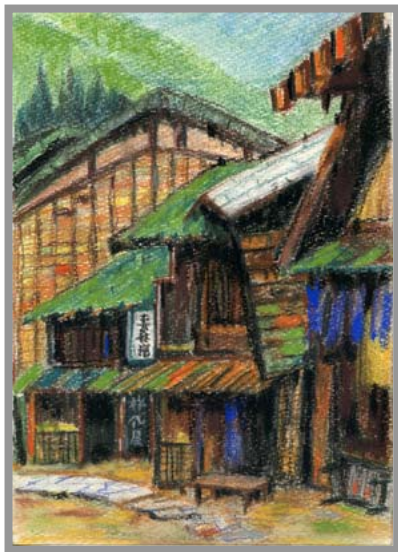
この2つの事例は行動することによって感動を得、真のロータリアンになっていくプロセスが示されていると思う。奉仕活動が義務感や惰性で、唯何となく参加するようなものよりも、人のお役に立ち、社会のために意義あることを行なおうする認識にもとづき、関心を深めることが大切であり、為し遂げた後の達成感、充実感を直接感じる行動によって「感動がよきロ

「一タリアンを育てる」ことが実感できるであろう。

感動はまた、人の心に豊かな情感を与え、生きる喜びを感じるという素晴らしい効果があるものといわれている。

# 5

## ロータリアンの鑑抄録



京都東ロータリークラブ会員満田久輝氏は平沢先生を偲ぶ言葉を次のように寄せておられる。

昭和 37 年、平沢先生は第 16 代京都大学総長として東奔西走のお忙しい生活をしておられた頃の話である。私はロンドンで開催された国際食品化学工学会議で研究発表するために、家内同伴で海外出張のために上京した。大学関係者は新橋の第一ホテルによく宿泊したものである。

偶然、平沢先生が京大本部事務局の方々と盃をかわしておられるところに行きあい、合流して楽しいひと時を過ごしたが、「翌朝出国が早いので、失礼します」と挨拶したところ、「日本のために、しっかり国際会議で活躍してくるように」と激励していただいた。

これからが平沢先生のご立派な一場面である。翌朝、荷物を整えチェックアウトして出発しようとしたところ、午前 5 時という早朝に、黒い服に襟を正し、ホテルの玄関口に平沢先生が立っておられたのである。

若い教授夫妻が海外に出張するにあたって京大総長が自ら送ってくださり、「充分、体に注意するように」と励ましの握手を私に、そして家内にもされたにのである。その温かい手のぬくもりは、今も忘れることはできない。

おそらく前夜は遅くまで事務局の労を労っておられたに違いない。本当に勿体ない話である。100日余の旅程をこなして帰国後、平沢先生に国際会議の成功を報告したところ、大変なご機嫌であった。

私はロータリークラブに入会する前から先生と席を同じくすることが多かった。京都東ロータリークラブのメンバーになってからは毎週の例会で、大学とは違うロータリアンとしての無言の教育を受けることができた。

平沢先生は奥田総長からバトンタッチされたあと、学生運動の激しかった大学の実情を案じられ、現役の私たちを励まして下さった。京都東ロータリークラブには大学関係者が多かったので互いに理解し合えて心丈夫であった。

京都東ロータリークラブの全会員は平沢先生を大黒柱としてまとめ、長期間、立派にパストガバナーとして模範を示されたと確信している。

先生は、糖尿病、直腸の疾患、白内障その他いろいろの病気をもっておられたが、闘病などと気負わずに、常に病気を可愛がって病と共に生き続けられた。

平成元年の日本学士院の授賞式に出席したいと申され、東京上野の式場に出られた。私は隣の席見守っていたが、やがて国家「君が代」が流れる中、今上陸



下が入場され、すべての行事が終了した時にはほっとしたものである。そのとき先生から最高の感謝の言葉をいただいた。

翌 13 日も先生は学士院の分科会に出席され、最前列で私の研究発表を熱心の聴かれるという精励ぶりであった。

その週の例会は、日比野丈夫次年度会長さんを励ます恒例の歴代会長の朝食会が都ホテルの佳みず園で開かれたが、先生はご挨拶のあと乾杯の発声も元気なお声でされた。

終了後、例会まで相当な時間があり、暈の上に正座しておられたのでお疲れと思い、「お宅へお帰りになってはいかがですか」と申し上げたが、いや例会に出席したいのでと言われ、浄土寺のお宅の方角の景色を眺められ一服されて、何時ものように例会に出席され帰宅された。

その夜、急に不調を訴えられ京都大学病院に入院され、翌朝、大往生された。

一病息災という次元ではなく、淡々と 88 歳 9 ヶ月の天寿を全うされたのである。

多くの人から尊敬され、誰にも優しく接し、穏やかな中に情熱をもって人生を生きられた平沢先生のお姿を私たちは忘れることはできない。私は、ロータリ

アンであったればこそ、先生の警咳に接することができ、多くのことを学ばせていただいたことを思うとき、先生と同じロータリアンである誇りと喜びを感じるのである。

先生は「生きるとは燃えること」の名句を好んで色紙に書かれたが、最後の最後までロータリアンに範を示しつつ、燃えつくされた。

まさに、京都東ロータリークラブの誇りであり、全ロータリアンの誇りである。

2008年1月7日、私は社員を前に、新年の挨拶で平沢先生の言葉を使わせていただいた。

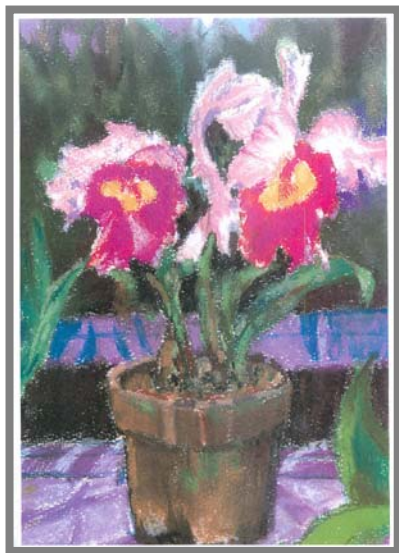
「仕事を頂くお得意様があって、会社があり、私たちの生活が成り立っているのです。私たちはお得意様に、常に、勤勉、正直、感謝の心をもって誠実にあたねばなりません。感謝といえ、お世話になった人々や、仕事を頂戴するお得意様にたいして、『有難うございます』と心から感謝の気持ちを表すことが大切ですが、その言葉や気持ちが自分や相手様にどのような影響を与えているかを、普段あまり考えることはないでしょう。私が尊敬してやまない元京都大学総長、平沢先生は、『感謝の言葉を発することによって、自分の中に感謝の心を養うことができ、またそのことが、相手に対して喜びを与えると同時に、自分の心を明る

くし、健康を保つことにもつながるのです』と教えられ、『感謝の言葉は、心を込めて言ってこそ、自分にも相手にもいい影響を与えるのです、誠意を込めてはつきりと伝えることが大切です』と語っておられる。

私は先生の教えを引用させていただき「仕事を頂く得意様に、勤勉、正直、感謝の心をもって誠実にあたることで、お得意様から信頼され、ひいては会社も繁栄し、皆さんも幸せになるというよきサイクルを力を合わせて築くようにしたいものです。」と話したが、先生の教えがいささかなりとも生かされ、効果を上げ得るのではないかと期待している。

# 6

## メーキャップの思い出 赤いたすきを掛けた学長さん



私が所属している八尾ロータリークラブが創立されたのは1961年である。大阪ロータリークラブが我がクラブ創立のスポンサーをつとめてくださった。特別代表は大阪スタジアムの社長・浅田敏章さん、補佐に塚本義隆さん、露口四郎さんというロータリーの識者にお世話をしていただいた。

クラブ創立のキーマンとして平野大太郎さん、杉本萬五郎さんの積極的な活動でチャーターメンバー20名を迎えてクラブが創立された。

特別代表の方針で、クラブの基礎をしっかりと固めるまで新会員の増強はしないという考えを貫かれ、創立10ヶ月目で始めて会員増強のお許しが出来、産婦人科の田中彰先生、設計事務所の稲葉重郎さんと私の3人が入会することになった。

新会員は、紹介者と一緒にスポンサークラブにメーキャップしてロータリークラブの雰囲気と例会の様子を学ぶことになっていた。私の紹介者杉本満五郎さんに連れられて、初めて大阪ロータリークラブの例会会場であった新大阪ホテル（リーガロイヤルホテルの前身）を訪問した。例会場には多くのメンバーとメーキャップに訪れるロータリアンでごった返していた。

受付の横に立って、メーキャップに来られたロータリアンを誘導しておられる年配の会員がおられて、肩からSAAの赤いたすきを掛けておられた。

どこかでお目にかかった人だなどと思って胸の名札を見ると今村荒夫さんとあり以前、大阪帝国大学学長をつとめられた今村さんその人であった。私が入学時、「大学生としての心構えと、真面目に学問に取り組み社会に尽くす人材たれ」というような祝辞を述べられ、卒業の際は「良き社会人たれ」と“はなむけの言葉”を頂いた紛れもない元学長さんが、なぜ赤いたすきを掛けているのだろうかと杉本さんに尋ねた。

杉本さんは「ロータリークラブは持ちまわりでいろいろな役をつとめ、会員が経験を積むことでクラブの運営をスムーズに、活力あるクラブにするような仕組みになっているのです。会員がクラブで経験したことが事業経営や社会生活に役立ち、その結果として有能な人材を育成することを目指しているのです。大学の元学長も一会員ですから与えられた役割を果たしておられるのでしょね。このような上も下もない関係がロータリーの素晴らしい特徴ですね」と教えて下さった。

当時、新大阪ホテルの例会場は長いテーブルに白いクロスをかけ、向かいあって座る形になっていて、私の向かいに倉敷紡績の社長であり、大原美術館を創設された大原宗一郎さんが座っておられた。また丸紅の市川社長がヨーロッパ経済視察団の団長として無事

任務を終えて例会に出席され、ニコニコ箱に多額寄贈されたという報告があって、新米の私も同じロータリアンの一人であることを自覚することができたように思う。

私は、46年前にお会いした恰幅ある「赤いたすきを掛けた学長さん」の姿を今も記憶の中にしっかり刻み込まれている。ロータリーにはこのような思いもよらない出会いがあるものなのだ。

話は変わるが、私が RIMZC (RI 会員問題ゾーンコーディネータ) をつとめていたとき、2004 年 11 月 26 日に開催された広島ゾーン研究会で、頼まれて「ロータリーの活力源—それは会員増強から」という演題で基調講演をしたことがある。全地区から集まった担当責任者を前に 40 分の話を終えた。そのあと、各地区の会員増強、退会防止の現状についての報告と、問題点についての発言があって、活発な意見交換が行われた。

その中で、第 2670 地区の RIMC (会員問題コーディネータ) をつとめておられた太田パストガバナーは、退会防止について体験談を話された。

「私が 20 歳代のときに、初めて新大阪ホテルで開かれていた大阪ロータリークラブの例会にメーカーズに行っていたことがあります。たくさんのロータリアンの中でドギマギしながらうろついている私に『オー

イ、お若いの！こちらにお座り』と声をかけてくださった会員さんがいました。その席に座ると、声をかけてくださったのは、早川種治さんと大林芳郎さんでした。その時の感動は今も私の心に刻みこまれています。

お互いに声を掛け合うこと、このような小さなことから感動が生まれ、退会など考えなくなるものです。会員一人ひとりがちょっとした意識を変えることが退会防止に繋がるのです。特に新しい会員、若い会員にはそのような温かい気持ちで接することが大切で、退会防止はこのような、ちょっとした心づかいが大切だと思ふのです。」

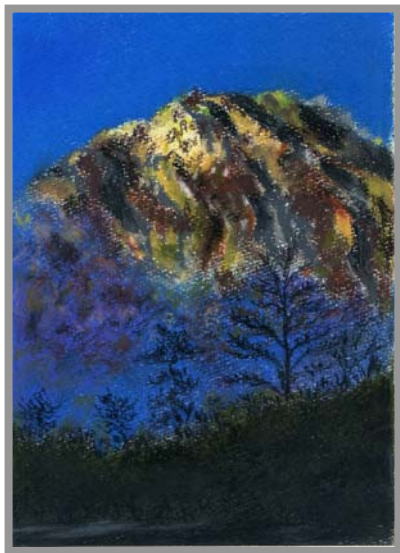
私は太田パストガバナーの話聞きながら、私と同じような体験をされたんだなと思つたが、私より遙か遠隔の地、四国から大阪ロータリークラブにメーキャップされたときの経験は、私より一層強い印象をもたれたであろうし、その後、太田パストガバナーのロータリーライフにこの経験が素晴らしい影響を与えているように思ふ。

若い日にこのような感動を与えられるような環境とチャンスを用意することが古い会員である私達のためではないかと思ふ。古い会員がロータリーの素晴らしさを伝え、感動を体験する機会を提供することが会員増強、退会防止への力になると思ふのである。



# 7

リーダーシップを高めるために



平成3年2月4日の夜9時ごろ、相川さんから電話を頂いた。

若々しい声で話され、一瞬どなたからの電話か分からずに戸迷ったが「鎌倉ロータリークラブの相川です」と自己紹介され、私の脳裏に記憶が鮮明に甦った。

神奈川県旧第2590地区が2地区に分割されて、新第2780地区の初めての地区大会が、1989年9月23日、24日に大磯プリンスホテルで開催された。

私はヒュー・M・アーチャ RI 会長の代理として家内を伴い、地区大会の会場に赴いた。濱田勝弥ガバナー、藤野大会委員長をはじめ地区内ロータリアンの温かいもてなしをいただき、生涯忘れえぬ感激と、ロータリアンとしての喜びを頂くことができた。

私が、第2660地区の1982～83年度ガバナーを務めるにあたって、国際協議会のグループ・ディスカッション・リーダーとして私たちを導いて下さった蔵並定男パストガバナー（元理事）の温情と励ましをいただいたことはロータリアンならでの喜びであった。

本大会の会長幹事懇談会で、私は本年度の RI のテーマ “Enjoy Rotary” を中心に話を進めることにした。1910年、創始者ポール・ハリスは「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に存在する」と語って80年を経たが、本年度の RI 会長ヒュー・M・アーチャー氏は

「親睦と奉仕…これは永遠不滅のコンビです！ロータリーを楽しもう」と全世界のロータリアンに呼びかけられました。私達はロータリーの原点に立ち戻って考え、行動しようではないか、と呼びかけられたのです。それを指導し推進する原動力は、各ロータリークラブの会長さんの指導力と、それを支える幹事さんの役割もまた重要なのです。

この重要なリーダーシップを高めるために大切な要点について、国際協議会の日本語のグループ・ディスカッション・リーダーとして私たちを導いてくださいました当地区の蔵並先生が最後に私達に示された言葉を皆さんにお伝えしたいと思います。

\***Leader** を分解しますと、

L・・・Listen・・・人の話をよく聞く

E・・・Energetic・・・精力的に

D・・・Dramatic・・・感動的に

E・・・Enjoyable・・・楽しみながら

R・・・Rational・・・理性的に であります。

私のスピーチが終わり、プログラムが一段落したころ、相川行雄さんが私の席にやって来られ「私は鎌倉ロータリークラブの30周年の記念卓話をする事になっていますが、会長代理のスピーチの中で、指導者の要件を**Leader**の文字を分解されて話されたとき、

A を聞き漏らしました、A はどのような意味でしょうか。私はロータリー文庫でいろんな文献を読みながら、ロータリーの素晴らしさを学び、喜びと感謝の日々を健康にも恵まれ送っています」と丁寧な質問された。

私はうかつにも、Leader 中の A を飛ばして説明していたのである。私は早速原稿を取り出して見たのだが、「書いてありません、脱落です。大変なミスです、エ・・・と A・・・Advice・・・助言するです。はっきりすればお知らせします」と冷や汗ものであった。

私は地区大会の RI 会長代理のスピーチなどは、ただ漠然と聞いておられる方が多いのではないかと思っていたが、一つの文字が脱落したのをしっかり聞いていただいている方がおられることを知って驚きを憶えた。

私は常に決められた時間どうりに収まる、できるだけ分かり易い原稿を作り、貴重な時間をさいて聞いてくださる皆さんに、より分かりやすく伝えることを心がけ、何回も何回も練習し、原稿を見ないで自然に語りかけるように伝える練習をしてきたつもりであったが、このような大切な場所で失敗は起きるものであることを痛切に感じた。

大会が終わって数日後の夜、相川さんから電話をいただいた。

「先日の地区大会には遠路お越しいただき、ロータ

リーの根幹にかかわる素晴らしいお話をいただき有難うございました。先般お話し下さった『リーダーシップを高めるために』とはまた別の『リーダーの説得力』という文章を見つけましたのでお知らせしたいと電話をいたしました。これは、行動科学者のピーゴス教授のものでして、Leader を次のように分析しています。

- L . . . Listen . . . 傾聴する
- E . . . Explain . . . 説明する
- A . . . Assist . . . 援助する
- D . . . Discuss . . . 話し合う
- E . . . Evaluate . . . 評価する
- R . . . Response . . . 答える

とあります。先日お示しいただいたものに加え、ピーゴス教授のものも参考にお示しいただいて、使いやすい方を選択していただくことがよいのではないかと思ひ、お電話をいたしました。差し出がましいことですがご参考になればうれしゅうございます」と話された。

そして、「私は以前から詩吟を勉強してしまして、新島先生の詩を吟じさせていただきます。

庭上の一寒梅 笑って風雪を おかして開く  
競わず 又 つとめず  
自から百花の 先がけを占む」

電話を通して、若々しい声で朗々と吟じられる詩は、素人の私でさえ聞きほれるほど素晴らしいものであった。わざわざ新しいピーゴス教授の説を知らせていただいた御礼を申し上げ、益々お健やかに後進のためにお尽くし下さる事、ロータリーから心に刻まれた多くのご経験を、後輩ロータリアンの為にお伝えくださることをお願いして電話を切った。

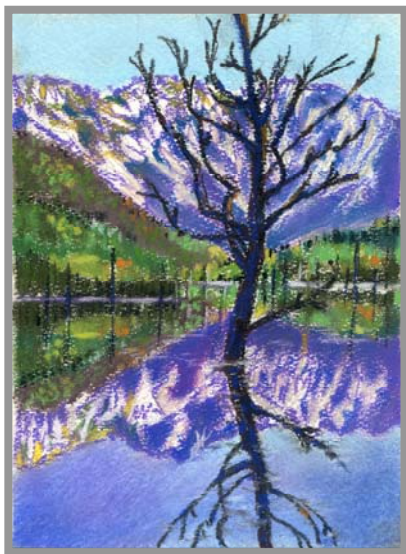
私はロータリーの地区大会に参加して親しい多くの人との出逢いを楽しみながら、このように親切なロータリアン相川さんからの電話で新しい知識をいただき、素晴らしい詩吟を聞かせていただいたのは始めてであった。ロータリーにはいろんな時や処で思わぬ喜びに出会えることをまた実感することができたのである。

私は、満田久輝氏の「ロータリアンの鑑」の小文と私の「雑感」を添えて相田さんにお送りした。

私は「リーダーシップを高めるために」の話をするときは、相川さんから教えていただいた、分り易いピーゴス教授の「リーダーの説得力」を専ら使うことにしている。

# 8

## 真如堂の鐘の音



1961年、八尾ロータリークラブが創立されて8年目に初めてIM（当時のICGF）のホストをつとめることになった。近隣12クラブ、約200人の参加ロータリアンを迎えての初めてのフォーラムであるだけに心配は大きいものであった。当年度の地区ガバナーはクラブ創立時のガバナー特別代表補佐としてご指導いただいた塚本義隆さんであった。

準備委員会が組織され委員長と私を含む5人の委員で活動することになったが、まず主催者である塚本ガバナーと時間を調整し、打ち合わせに伺った。ガバナーは「経費をかけないで実りある勉強の場にするように」と指示された。当時のICGFは参加者にみやげを用意することになっていたが、塚本ガバナーの方針で、土産など一切なくして勉強会に専念することになった。現在では当然のことであるが、当時は予算内で記念品か土産を参加者全員に配ることが慣わしになっていたのだ。

ガバナーの意向を聞いて、8月19日、委員長 委員4名でゼネラルリーダーをつとめられる京都市浄土町にお住まいの平沢パストガバナーのお宅を訪問した。

平沢先生はアメリカから帰られた直後のお忙しい中、2時間余にわたって懇切にご指導をいただいた。



先生は旅のお疲れをおいといたなく、不安な思いを抱いていた私どもを激励していただいたことを、今も脳裏に焼きついている。

お伺いした委員一同、先生のロータリアンとしてのご見識と豊富な話題に感銘をうけ、ロータリアンに接する先生の温かい言葉や態度に感動をおぼえたものである。

そのとき議題としてあげられたのは、RI 会長ジェームス・F・コンウェイ氏のテーマ **Review and Renew** (再検討し刷新しよう) を基本として、

- 1、ロータリーの拡大
- 2、会員の友好関係の増進
- 3、ロータリー情報の効果的な提供について

をあげられた。

長時間ご指導をいただいたお礼を申しあげて帰ることになったが、先生は、停めてあった車に私たちが乗り込んで発車するまで門前に立たれ「準備をよろしく」と手をふってお見送りいただいた。40年たった今もこの時の感動が脳裏に刻み込まれ、はっきり思い起こすことができる。

平沢先生の次年度にガバナーを務められた私の大学、人生の恩師である原田秀雄先生が国際協議会で学ばれた「指導者道…愛は惜しみなく」「指導的立場にある人は、人を遇するに一視同人の誠意と礼儀をわき

まえること」を学んだあと、平沢先生のお宅にお伺いして、温かいご指導をいただいた全てが、「指導的立場にある人は、人を遇するに一視同人の誠意と礼儀をわきまえる」に通じることを実感した。

ロータリーには、先輩から教えられたこのような素晴らしさを、自分の身につける最適の場であるとしみじみ思う。それには、教えを受け入れるための柔軟な心と、何事にも関心をもつことが大切で、これを会得する最適の場はロータリークラブだと思う。

私は平沢先生の話聞きながら、静かなお宅の近くにある真如堂の鐘の音を聞いた。古くから言い伝えられた真如堂の懐かしい鐘の音は忘れ得ないものであった。

平沢先生のお宅を訪れた 20 年前、私が大学時代の夏休みに泊りがけで学友と京都を散策したことがある。加茂川のほとりを散策し、丸太町で書店に立ち寄り銀閣寺、哲学の道、祇園、平安神宮などを歩き回った最後に真如堂を訪れた。

人一人いない夕暮れの境内、静寂の中で真如堂の鐘を聞いた。静かに響き流れる鐘の音は若き日の忘れえぬ思い出となっている。

私にとって平沢先生と真如堂の鐘の音は忘れ得ないものである。

そしてリーダーシップとは、一にも二にも誠意、そ

して上も下もない一視同人の親愛の情に始まることを、今もしっかり胸に刻み込んでいる。

学習院の院長をおつとめになられ、若くしてガバナーの任につかれ、財団法人米山奨学会の理事長を長くお務めになった、島津久厚さんが私に話して下さったことがある。

「平沢先生と私は 1970～71 年、レークプラシッドの国際協議会のグループ・ディスカッション・リーダーと一緒に務めましたね。先生は医学者としてドイツ、スイスへ留学されたこともあってドイツ語がお得意だったのでしょう。会話は、イッヒ、ドウ、アイネ、なんて相手かまわずドイツ語で話され皆さん何のことか分らずに苦笑していたものです。だが、あのお人柄ですからね、“興、こう、コウ”とリーダーの仲間に親しまれていましたよ」と教えていただいたことがある。

この微笑ましい平沢先生のエピソードは先生のお姿をほうふつとさせ忘れることはできない。このお話しで思いつくのは、ICGFのご相談に伺ったときアメリカから帰られたというのは、国際協議会のリーダーの大役をお務めになったときではなかったのか。それならば、私も 2 回リーダーを務め、くたくたになった経験を思い出しながら、先生は身も心も疲れ果ててお

られたのではないかと思い、申し訳なさと感謝の心を新たにす。

インターシティ・ゼネラル・フォーラムは堺筋に面した元関西銀行 5階で行われ、無事終了したあと、平沢先生から温かい労いの言葉をいただいた。

何事も、力をあわせて成し遂げた後の感動と達成感  
は格別のものである。

# 9

## RI 副会長、ジャック・デービス さんがクラブへやってきた



井関久楠ガバナーから「創立 10 周年を祝して」の祝電をいただいた。

そして、「1970 年 6 月、アメリカ、アトランタで開催されたロータリーの国際大会で、世界のロータリアン 12000 人の前で、八尾ロータリークラブが奉仕された身体障害児慰安奉仕の映像に接し、当時 366 地区代表として出席した私にとって実に感無量であり、また日本のロータリーのために万丈の誇りを感じたのであります」とある。

井関ガバナーの祝電にある「身体障害児慰安の奉仕」は、前年度、社会奉仕委員長をつとめられた山畑雅裕さんが 1970 年、千里丘陵で開催される大イベント、万国博覧会を楽しむことができない身体に障害をもつ児童とお母さんに、空から万国博を見せてあげたいとの思いから実現したものである。日本産業航空（株）の社長、藤本直会員の快諾を得て、八尾市立身体障害者学級の担当諸先生に相談し、大変喜んでいただき、クラブ理事会の承認を得て、創立 10 周年の記念事業として取り上げることになった。実行までに種々の問題について検討し、幾多の過程を経て最新鋭の飛行機と豊かな経験をもつ優秀なパイロットに搭乗していただくことになった。

計画実行の日は、天の助けもあって快晴に恵まれ、全会員が力をあわせて活動に参加し、身体障害者とお

母さんの搭乗のお世話をした。待合室から飛行機まで車椅子を押す人、タラップを抱きかかえて飛行機に乗せる人、80才を越えた田中誠三郎初代会長は障害をもつ少年を抱き抱えて飛行機に搭乗させている。この光景は今もはっきり私の脳裏に刻み込まれ忘れることはできない。

参加した会員はみんな一つになってお世話をしてしながら、会員それぞれがロータリーの素晴らしさを実感することができた活動であった。

十数人の会員が飛行機に乗ってお世話をし、説明することになっていた。飛行機が離陸するとき、会員が一行に並んで一斉に手を振って見送り、小さくなっていく機影を見ながら無事を祈った。

飛行機は、新しく造成された堺市臨海工業地帯に建設が進みつつある大工場群を見学し、千里丘陵に建設された広大な万国博覧会の上空を大きく旋回し、充分に見学することができ障害児とお母さんは大声をあげて喜んだとのことである。

計画の時間通りに飛行機が帰ってきた。タラップを降りるお母さん、障害児を抱きかかえて降りてくる会員たち。空港に残った会員は一行に並んで拍手で迎えた。お母さん達は「楽しませていただき、有難うございました。」と口々に感謝の言葉をかけていただいた。参加した会員は、計画が無事成功裏に修了したこと、

参加された皆さんから喜んでいただいた様子を見て「よかった！」と心から思った。

創立 10 周年のこの記念事業としてはあまり例のない記念事業を、ガバナー事務所から案内があった「意義ある業績賞」に応募しようとの意見が出て、会長であった私と、社会奉仕委員会の皆さんがあつまって、奉仕活動の詳細な記録と写真を添えてガバナー事務所に提出した。

ガバナーは書類一式を添えて国際ロータリーに申請してくれたのであろう。「意義ある業績賞」は、現在では各地区 1 クラブが選ばれることになっているが、1970 年当時には、USCB、SACAMA、ASIA、ANZAO、CEEMA、GB&I の 6 つのリージョン（地域）に分け、それぞれに 1～2 クラブのみに与えられる賞であったと思う。

提出したことも忘れていた頃に、大阪北ロータリークラブの古市さんからクラブに連絡があって、もう一度、「身体障害児とお母さんの慰安奉仕」の飛行プログラムを再現し、記録映画を撮る準備をするようにと連絡があった。そこで、2 度目に搭乗する新しい身体障害児とお母さんを選び、飛行機の準備も整えたある日、古市さんの車にのって、バーミューダー島出身の RI 副会長、ジャック・デービスさんが八尾ロータリー



クラブの例会にやってきたのである。

会員はみんなビックリ仰天したが、幸い牧師の田主会員がオックスフォード大学の宗教学科で永く勉強したこともあって、流暢な英語でデービスさんをもてなしてくれ、みんなホットしたことを思い出す。

例会後、車に分乗して八尾空港到着。空港2階の集会場で、飛行コース、飛行時間、帰着時間、見学の概要などの説明が行われ、この時から記録撮影が行われた。

飛行機離陸の時間が迫り、前回と同様、1階の待合室から車椅子を押す人、身体障害児を抱いてタラップを上がる人、お母さんを誘導する人、デービス副会長と何人かの会員が搭乗し、ゆるやかに滑走し始め、会員は一列に並んで手を振って見送った。

予定のコースを飛行し、着陸までの記録映像が納められた。

飛行機は予定の時間通りに八尾飛行場に帰着し、全会員がは一列になって迎える中、デービス副会長がタラップを降りてきた。大きい体に感動の仕種を表しながら「素晴らしい奉仕だ！」と激賞され、会員の献身に労いの言葉をかけてくださった。会員がお見送る中、手をふりながら古市さんの車で帰路に着かれた。

参加した会員は、2階の集会場に集まり、2回の「障害児とお母さんの慰安奉仕」を無事に終えた祝いの乾

杯をした。そしてみんなが力を併せて成し遂げた後の達成感と感動を、参加会員全員が味わうことができた。

それから数ヶ月が経って、国際ロータリーから「意義ある業績賞」が贈られてきた。会員一同大いに喜んだものである。

今も事務局の壁に「SIGNIFICANT ACHIEVEMENT AWARD」「意義ある業績賞」が懸っていて、例会毎に額を見ながら、「みんな力を合わせてよくやったな！」と当時の健闘を思い出すのである。

これには、後日談があって、驚くほどの巡り合わせである。1977～78年度のRI会長にジャック・デービスさんが就任されたのである。

八尾ロータリークラブが1969～70年に「身体障害児とお母さんの慰安奉仕」の活動を実際に体験検証するためにはるばるやって来て身障者と一緒に飛行機に乗り、感動されたあの若いハンサムな副会長がRI会長になられたことを、クラブ全会員が拍手して喜んだ。

デービス会長年度のテーマは「Serve to Unite Mankind」「全人類を結びつけるために奉仕せよ」であった。

さらに驚いたことに、デービス会長年度の国際大会は東京で開催されることに決まったのである。会員の有志がデービス会長に会いに行こうということにな

り、全国から集まるロータリアンでホテルの予約が満杯になっていたのを、ロータリアンである近鉄の役員にお願いして東京近鉄ホテルに有志の会員一同、宿泊することができた。

国際大会の第1日目の本会議、参加者全員揃って出席し、会場の舞台に近い席をとった。本会議が始まり、あの懐かしいRI会長ジャック・デービスさんが演題に立たれた。

ハンサムながら当時より少し肥り気味、白髪が見えるデービスさんの晴れ舞台である。開会の挨拶に続き、本年度のテーマと強調すべき活動などを力強く話され、午前中のプログラムが終わり、デービスさんが舞台正面の段を降りてきた。

多くのロータリアンが握手をするために押し寄せる中をぬって、私達はデービス会長の前に進み出た。

「RI会長ご就任されおめでとうございます、身体障害児慰安奉仕にお出でいただいた上、意義ある業績賞を頂き有難うございました。」と英語に堪能な増田会員に挨拶をしてもらった。

デービス会長は、「ああ、飛行機の奉仕は素晴らしかったですね。国際大会にたくさん来てくれて有難う。あのスモールボーイは元気ですか？」と混雑している会場で話すことができた。

それにしても、超多忙の中にあつて、スモールボーイ田主さんを覚えておられたことに驚いた。やはり、田主さんのキングズイングリッシュの印象が強かったのであろうか。

私は、毎週例会に来るたびに英文の“意義ある業績賞”を見ながら、37年前のあのときの光景を思い出す。みんなが力を併せて身体障害者への奉仕を成し遂げ得たことで、参加した会員に奉仕の感動を与え、ロータリーの奉仕のあり方を互いに知ることができ、それがまた、会員相互の親睦、楽しさ、語り合う喜びにつながり、信頼関係を深めるというロータリーならではのよきサイクルと、素晴らしい雰囲気をもつて満喫することができたのである。

その後も各年度、会員の衆知を集め、力を併せていろいろな奉仕活動が続けているが、これは、ロータリーのバックボーンと言われる1923年、セントルイス大会で採択された、決議23-34の、6項のgの実践であると思うのである。そこには、「クラブが一固まりで行動するだけで足りるような事業よりも、広く全てのロータリアン個々の力を動員するもののほうがロータリーの精神によりかなっていると言える。それは、ロータリークラブの社会奉仕はロータリアンに奉仕の訓練を施すために考えられた謂わば、研究室の実

験としてのみ、これを見るべきだからである」とある。広く全ての会員の個々の力を動員することが、会員個人個人に奉仕の訓練を施し、それを、あくまで個人として事業に、社会に及ぼすことで、人に信頼される事業経営、信頼と親しみのある家庭、地域社会への貢献を実現させることになり、それがロータリアンが人としての幸せを得る道であり、ロータリークラブはこのような良きサイクルを生み出す最高の場であると思うのである。

このような地道な活動を、会員が力を合わせて着実にを行うことで、よき会員が育ち、会員数の増加を続けるエネルギーとなることを、私のクラブで体験し確信を得ることができた。

2007年1月現在、第2660地区86クラブの会員数の会員数の多い順にあげると大阪、大阪北、大阪南、大阪東、大阪西、大阪西南という市内クラブに続き、市外クラブ1位、地区全体の第7位を占め、87名の会員が在籍し、出席率も高い水準を保っている。

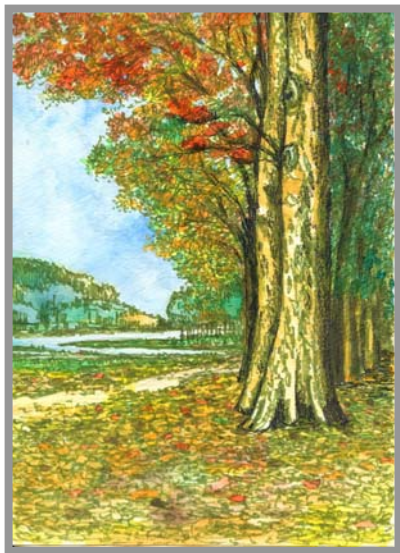
要は、楽しいクラブにすること、会員の力を合わせて共通の奉仕に参加する機会をつくること。参加した会員が奉仕をやり遂げた後の達成感、感動を体験するような、また会員相互の理解と共感を与える機会をつくることが大切だと思う。

RI副会長ジャック・デービスさんが、はるばる我が

クラブへやって来たという、嘘の様な本当の話を思い出しながら感じたままを記した。

# 10

## 「空を見上げて」 生きたくても生きられなかった少年の話



平成18年10月、旧制大阪女子高等医学専門学校(現、関西医科大学)18期生の同窓会がリーガロイヤルホテルで行われた。毎年参加する妻操は、同窓の武田倫子さんから「空を見上げて」の本を頂いた。

表紙の見開きに「命やさしく」と横山直江先生の墨書があった。

妻の話では、武田先生は学生時代から勉強熱心な方で、特に印象に残っているのは、解剖実習が終われば女子学生は早々と解剖教室から引き上げていくが、武田先生は遅くまで残って細部にわたって勉強されたという。卒業後、京都大学医学部の病理学教室に入られ、血液の研究において世界的な学者であった天野先生にも学ばれたということである。

私は家内から尾道に武田倫子先生がおられ、以前、広島で同窓会が開催された時には、竹田先生のお世話で宮島の有名な旅館に宿泊し紅葉公園の散策や壮大な厳島神社の参詣をするなど大変楽しかったと何度も聞いたことがある。

[空を見上げて]に、武田先生がJA尾道総合病院の副院長として在籍しておられた1992年11月、松葉恭平君が院内学級に入学してきたと書かれている。病名は「神経芽細胞腫」で、神経節などに転移しやすい腫瘍が次々にできる病気で、残る治療法は自家骨髄移植以外に残っていないという難病で、恭平君のご両親



はこの難しい治療に挑む決心をされたそう。ちょうどこの年、武田先生は定年を迎えられたが、先生の尽力で恭平君は日赤広島病院に転院することになった。

院内学級で恭平君は背中に太い注射針を刺し、髄液をとって検査するという恐怖を何十回も味わったそうである。体験のないお母さんは「我慢しなさい！」と言えずに「つらかったね、痛かったね、えらかったね」と、いつもそれだけだったそう。

恭平君たちに勉強の指導をしていただいた横山先生は、広島大学の教育学部を卒業され、尾道市の小学校の先生をしておられたが、当時まだ少なかった病院内学級の担任を受け持つことになり、JA 尾道総合病院の小児科病棟に長期入院している子供の学力補充の仕事に就かれた。

先生は、その実態に衝撃を受けられたそう。数ヶ月、ベッドに寝て学習ができない子に、退院するまでに全教科を、遅れないようにして送り出すことと、重い病気と闘う運命を背負わされた子供と家族の「苦悩に寄り添う」仕事であることを知られたそうである。

横山先生は、病気の子供の心を癒すことに夢中になったが、当時 JA 尾道総合病院の副院長で小児科におられた竹田倫子先生が、始終全面的にバックアップしてくださったこともあり、教師としての8年間を病院の一室で過ごすことができたと書いておられる。

「武田先生はね、あちこちの病院で、もう駄目だっ  
ていわれた病気をなおしてくれる神様でね、横山先生  
は神様の薬でもなおらないときにヘンな手作りの薬  
草茶やおしゃぶりでおしてくれる魔女だ！」と、子  
供たちの命名で、いつの間にか魔女になっていたそう  
である。

横山先生は、恭平君が日赤広島病院に転院する車を見送った直後に初めて葉書絵を描かれたそうだ。「空を見上げて」の本には 125 枚の素晴らしい絵が描かれ、先生から恭平君への温かいメッセージが書き添えられて、無菌室にいる恭平君にとって大きい励みになったという。

6 月 19 日、アジサイの花の絵に「雨の中、武田先生と二人で世羅のお寺にアジサイを見に行きました。ちょっと早くてツボミが多かったよ」

6 月 30 日、ホタルブクロの絵に「毎日、雨、雨、雨。恭平君と孝子さんもこの雨を見ているのでしょうか。あの子のベッドが入っている病室が、窓のある部屋でありますとうにと祈りながら、朝も昼も夕方も一日に何回も暗い空を見上げています。」

7 月 2 日、ウツボグサ、13 日、ヒメジョオン、15 日、ホタル、23 日には、ムクゲの花に添えて個展が開かれ忙しい日々です、と記されている。

恭平君は横山先生に宛てて大きな字でハガキに「先

生お元気ですか、いつも絵葉書ありがとうございます。8月1日から個展をするのですか、すごいなあと思います。ぼくも早く外に出られるようになりたいです」と書いた。

7月27日ツバメの赤ちゃん、8月6日鬼百合、…セミの幼虫、カワラナデシコ、と横山先生は絵を描き送り続けられた。

孝子さんから、治療の日程が送られ、10月から本格的な治療が始まる。

「いよいよ移植。がん細胞も一緒に作っている恭平君の骨髄を薬で空にし、ゼロになったことを確認した後、がん細胞を殺し、冷凍保存してある恭平君の骨髄を植えるという、最も苦しい治療の開始です。完全無菌室に1人で入れられて嘔吐し続けている恭平君を外から見守る孝子さんは耐え切れなくて“私も全身消毒して中に入れてください！”と叫んだという。」報告の受話器を握ったまま、また涙。

「がんばれ」は禁句だけれど、言わずにはおられません。恭平君、がんばれ！ 恭平君、がんばれ！

10月19日、横山先生から、ツリガネニンジンの絵にそえて、恭平君、がんばれ、お母さん、がんばれ、の葉書が送られている。

12月23日、横山先生は日赤広島病院に見舞いに行った。窓越しに「葉書より先生が先に届いた」と孝子さん。ガラス窓の向こうで細い手を振っている恭平君、

焦ってはいけません。慎重に、慎重に。ここはドクターに任せるしかありません。

12月28日、JA病院の部屋に「外泊許可が出ました」「お正月をおうちでできりるの！」と孝子さんと恭平君が現れた。2人が駅の方へ去った後も、胸のドキドキが続いていた。神様、こんな年の暮れに、こんな幸せを、ありがとうございます。

1月6日、武田先生から、「寒中お見舞い申し上げます。先日は嬉しいお便り、ありがたく拝見いたしました。松葉恭平くんが再発しないことを祈りましょう。美しいハガキ、毎日眺めております。先生が恭平君におくられた真心は、どんなに力づけになったことでしょう。魔女の念力の靈験あらたかなことを信じましょうね。ではまた。 武田倫子」

5月8日、孝子さんからの手紙で、5月5日に日赤に再入院したとの報せがあり、検査の結果、「再発に間違いないと診断され、化学療法を始めています。白血球の立ち上がりがどの程度あるのか、治療が何回できるのか分らないそうです。」

5月16日「いつも、ありがとうございます。検査の結果、肝臓、肺、環状動脈付近のリンパに多数の腫瘍があり、思った以上にひどいものでした。私は私なりに今できる事を精一杯してみよう、そして恭平に少しでも、やりたいことをやらしてあげ、生命のある限

り、あの子と一人の人間として接していきたいと思っています。今まで何度となくもうダメかと思ったのですが、あの子の頑張りで私達家族は健康の幸せやありがたさを痛切に感じることができました。今度は私達があの子にしてあげる番だと思います。横山先生、私がんばりますよ、見てください。もう一度あの子と釣りに行けるようにがんばります。その時は先生、よろしく！恭平が目覚めたのでこの辺で、またお便りします。いつもありがとうございます」と。

私はこの母の手紙をパソコンに打ちながら涙が止まらなかった。母は、健気に病気と闘っている恭平君の再発という過酷な現実に向き合いながら、自分が頑張っている恭平君の回復への期待を書いておられる。

1995年4月20日付けの孝子さんからの手紙がある。その一節に「桜の季節も終わり田植えの準備を見かけます。横山先生お元気ですか？（中略）我が家の仏壇には、横山先生からいただいた葉書絵が置いてあり、ページをめくりながら広島での辛い日々が目の前に浮かび また涙したりすることもあります。でも恭平が、すごく楽しみにしていたハガキ絵、今も私の大事な宝物です。

先日、『武田先生が尾道に見えるので来ませんか？』とお誘いをいただきましたが、丁度、その日は恭平の

四十九日の法要で納骨をすることになっていましたのでお出会いきませんでした。お誘いいただき有難うございました。恭平が亡くなって4ヶ月以上過ぎました今も淋しさ、辛さは大きくなる一方で、いつまでもこれではいけないと思いながら日々を過ごしています。また近いうちに横山先生、武田先生にお会いしたいと思っています。お体をお大切になさってくださいい……」とある。

私は、「空を見上げて～生きてくても、生きられなかった少年の話」を読みながら、お母さん、武田先生、横山先生をはじめ、多くの人の支えと励ましを受け、尊い生命が終わりをつげた感動の記録を読みながら少年の苦しみの中で真剣な戦いの実話に心打たれ涙した。

そして今、日本の将来を担う青少年に顕著になりつつあるムカつく、キレる、うざいという会話を聞くにつれて心が寒く、いじめ、自殺、親が子を、子が親を殺すという末期的風潮をみる時、大人でも大変な治療を小学生の恭平君が「生きるために耐えて耐え抜きながら、生きることができなかった命の尊さを、多くの少年に伝えることが大切だと思う。そして医師として真剣に取り組まれた武田倫子先生。恭平君に美しい絵ハガキを描いて送り続けて、恭平君に励ましと癒しを与えられた横山先生。両先生の姿に職業倫理に徹した人

間の尊さを知ることができるのである。

日本には古来より重んじられ守ってきた慎み、勤勉、思いやる心、良き習慣、根気、常識などの美德があり、これらを身につけ、師や友の行動や言葉に学んで新しい道を切り開く勇氣と活力を学び行なってきた。

このような志を、日本の将来を担う青少年にしっかりと植え付けていかねばならないと思う。

私は「空を見上げて」を読みながら、生きたくても生きられなかった少年の話に胸を打たれた。私が旧制中学生の頃は第2次世界大戦の真っ只中であつた。この時代、日本では「生きたくても生きられない時代」であつた。私と同年齢の従兄弟、茂君は優しい青年であつたが学業なかばで戦死。野球の仲間であつた同級生、浅井・真鍋両君はお国の為には航空兵を志願し、終戦間近い沖縄戦に出撃して、並んで飛びながらで手を振り合つて敵艦に突っ込んだという。

戦争中のこのような悲惨な事例は数限りなくあり、生きたくても、生きられなかった青少年たちが多くいたことを忘れてはならない。この人達の犠牲の上に現在の平和があることを今の青少年に伝えることが大切であると思う。

自分が今、生かされていることへの感謝と、多くの人のお陰で自分が存在している幸福を学校、家庭、コ

コミュニティなどでしっかり伝えることが大切であろう。今、学校では、戦時中のことになるべく触れない風潮があるように思うのだが、わかりやすく祖国のために命を捧げた若者の熱い思いを伝え、日本の将来を担う青少年が力強く生きていくための鏡とするべきではないかと思う。

人から受けた恩恵、命の大切さ、他人への配慮、人間に生まれたことの幸福、ありがたさなどを教え、感謝する心を育てることが大切であると思う。

相田みつお氏の詩に「ぐち」がある。

ぐちをこぼしたっていいがな  
弱音を吐いたっていいがな 人間だもの  
たまには涙をみせたって いいがな  
生きているんだもの



# 11

## 旧制中学の一年先輩に 司馬遼太郎さんがいた



毎年 8 月の最終日曜日に旧制中学の同窓会が開かれる。もう 64 年も前に卒業したのだから集まるのは僅か 7~8 人だが、常に連絡を取り合っている人を除くと、お互いに顔も名前もわからない。しかし、間もなく昔のやんちゃな時代に戻ってわいわいやかましく、ガラは悪いが楽しい会になる。

去年、久しぶりに同窓会に出席したが、一人か二人のほかは顔も名前も思い出せない。参加者の中に、中学時代に一緒に草野球のメンバーだった田辺君（通称なべ君）がいて、久しぶりの再会である。

少し太ったが昔のままの元気さだ。彼は「夏の暑い日にアイスクャンデーをなめながら野球ばかりやったな！冬の寒さもきつねうどん食べながら野球ばかりやっていて勉強なんて全然しなかったな。日曜日になれば野球のできる広場探しに自転車で走り回ったじゃないか」と、大きな声で喋りまくり中学時代そのままである。

私はなべ君に「ところでお前、薬剤師だったが、薬局まだやっているのか？」と聞くと「やっているよ、だが商売にならんね、今は同級生の溜まり場になっていて、将棋やったり、バカ話したり、ビール飲んだり、したいほうだいの有様だよ」

聞けば息子さんが調剤薬局を何箇所か経営しているとのこと。親父は昔の仲間に溜まり場所を提供して

共に楽しんでいる。僅かながらも商売になるらしいが、それも昔から人に好かれていた彼の微笑ましい役割のように思った。彼は、同級生の消息を良く知っていて、誰はどこに住んで何をしているとか、何年前に手術したとか、勉強が出来た誰それは元気であるなど、大した情報通である。

同窓生の消息に及ぶと、何をおいても偉大な先輩司馬遼太郎さんの話になる。この話題もなべ君の独壇場である。

「彼は中学時代からよく知っていたよ、俺のところと同じ薬局の息子でね、福田薬局の跡を継ぐのかと思っていたら大阪外語の蒙古学科へ行って、新聞社で活躍して立派な国民作家になってね、司馬さんの後輩っていうとお互いに鼻が高いね」と、ウダツの上がらない同級生の自慢と言えば司馬さんと同窓ということしかないようである。

司馬さんの [少年茫然の頃] のなかに、英語の教師が「台湾の高砂族には熟蕃と生蕃がいる。おまえは生蕃で王化に浴していない」とにくにくしげに言われ、英語なんか勉強してやるものかと思った、と書いている。

1 学年の 3 学期になっても教科書に出てくる not が読めずに教室中の失笑をかったことがあり、そのとき

の失笑は屈辱と憤りで戦慄が走るほどであったという。しかし、中学5年になって我が身がそら恐ろしくなり、旧制高等学校に行くために勉強をしなければと、夜3時間以上眠らぬ覚悟で、英語を憶え、数学を理解しようとした。

ついに それでも追いつかず、5年生の3学期は、まるまる休んで狂おしい作業に没頭したが落ちた。その落ち方はすざましいもので、東京、大阪の学校は秀才が行くだろうと、東北地方の弘前高等学校を受験したが、東北北部の秀才がことごとくここを受けることを知って失望、片道20時間を費やして関西にもどった。

「恨みはおそろしいもので、今でもこのころの夢を見るし、同年齢で高等学校に受かった人にあうと無性に卑下を感じる」と少年時代の挫折感を書いておられる。

司馬さんは、少年茫然の頃の挫折に耐え、渾身の努力によって天性が甦り、平成3年、68才で文化功労者、平成5年70才で文化勲章を受章され、72才という若さで惜しまれながら世を去った司馬さんに多くの識者から追悼の言葉が寄せられている。

梅原猛氏は

司馬遼太郎なるペンネームは、司馬遷にはるかに及

ばないという意味ではなく、司馬遷を凌駕する意味だと聞いたことがある。その野望をひそかに自己のペンネームとしたのは、あっぱれな決意とあってよいだろう。72 才にして人生を閉じたが、日本の文学にして司馬遷の「史記」に近づいたのは司馬遼太郎の数々の小説であることは否定できない。

司馬遼太郎の文学は国民文学といわれるが、国民文学とは、その国のあらゆる人、老いも若きも男にも女にも広く愛読され、しかも読者に人生とは何かを教え、生きる勇気を与える文学である。日本の文壇の主流である純文学はとてもこのような国民文学にはなり得ない。純文学のエースである太宰治、三島由紀夫、川端康成は自ら命を絶った。命を絶った人間は、多くの人に勇気を与えることはできない。

国民文学の名に値するのは、戦前に活躍した吉川英治である。「宮本武蔵」を頂点とする小説は戦前の日本人に広く愛読され、日本人に人生とは何かを教え、生きる勇気を与えた。「宮本武蔵」は日本の典型的な求道者であるが、吉川英治は作品の中で、忠義、孝行、誠実、努力、純愛などの美德が讃美されている。

司馬遼太郎は 22 才のとき戦争から帰って、馬鹿げた戦争を起こした日本は何とアホな国であるかと思ひ、22 才の自分に対して小説を書いたという。

彼は求道者が大嫌いなのである。求道者には嘘があ

り、そして、それはどこか日本が行った巨大な愚行に通じている、彼はいささかシャイな道徳的懐疑主義者である。

たとえば『竜馬がゆく』の坂本竜馬にしろ、『坂の上の雲』の児島源太郎にしろ、宮本武蔵のような求道者ではない。むしろ極めて普通の、あまり理想や道徳を信じない人間なのである。それが世の中の辛酸をなめていくうちに一つの使命に目覚め、時代が要求している難問を見事に解決し、あまり報われずに死んでいく。

司馬遼太郎は歴史の陰に隠れていたそういう人間を掘り起こし、その人生のすばらしさをあまねく日本人に知らせたのである。

戦前の日本人が吉川英治の小説を読んで、忠義、孝行などの徳を教えられたように、戦後の日本人は司馬遼太郎の小説を読んで、道徳に縛られず、自由にしてしかも偉大なことを成し遂げた日本人を知り、生きる勇気を与えられたのである。

司馬文学は、二つの点で吉川英治の国民文学の水準を超えたと思う。

一つは、学問と見識である。それは、司馬遼太郎は資料収集の力において世の歴史家をはるかに超えているばかりか、歴史を見る目に一つの見識があることである。これは、京都の学者たち、桑原武夫、吉川幸

次郎、貝塚茂樹などの学者との交流によるところが大きい。

もう一つの点は、司馬遼太郎の日本歴史の見方には必ず外から日本を見るというインターナショナルな目があることである。

司馬遼太郎こそ戦後の日本を代表する文学者であった。ちょうど戦後50年が過ぎ、司馬遼太郎が死んだ。今後どのような文学を創造するか、我々に与えられた課題は重い

と司馬遼太郎さんへの追悼の文を贈っておられる。

司馬遼太郎さんは、将来の日本を担う少年たちに激励の文を贈っている。少学5年生には「洪庵のたいまつ」、小学6年生には「21世紀に生きる君たちへ」を残された。

「21世紀に生きる君たちへ」

私には、この世にたくさんのすばらしい友人がいる。歴史の中にもいる。この世では求めがたいほどすばらしい人たちがいて、はげましたり、なぐさめたりしてくれる。昔も今も未来においても変わらないことがある。そこに空気、水、土などの自然があって、人間、動物、微生物にいたるまで、それに依存して生きている。

自然こそ不変の価値なのである。

人間こそ、いちばんえらい存在だ。という思い上がった考えが頭をもたげた 20 世紀という現代は、自然へのおそれが薄くなった時代とっていい。

「人間は、自分で生きているのではなく、大きい存在によって生かされている」

さて、君たち自身のことである。君たちは、いつの時代でもそうであったように、自己を確立しなければならない。21 世紀において、特にそのことが重要である。21 世紀は科学と技術がもっと発達するであろう。君たちのしっかりした自己が、科学と技術を支配し、良い方向にもって行ってほしいのである。

「自己」ということをしきりに言った。自己といっても、自己中心におちいつてはならない。人間は、助け合って生きているのである。

私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの線がたがいに支えあって、構成されているのである。

このことでも分るように、人間は社会を創って生きている。社会とは、支えあう仕組みということである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようには作られていない。このために助けあう、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。他人の痛みを感じるといってもいい。優しさと言い換えてもいい。「いたわり」[他人の痛みを感じる]「やさ



しき」この三つの言葉はもともと一つの根から出ているのである。

根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけねばならないのである。その訓練は簡単なことである。

例えば友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中でつくりあげていきさえすればよい。この根っこの感情が自己の中でしっかり根付いていけば、他民族へのいたわりという気持ちも湧き出てくる。君たちがそういう自己をつくっていけば、21世紀は人類が仲良しで暮らせる時代になるに違いない。

鎌倉時代の武士たちは、「たのもしき」ということを大切にしてきた。人間は何時の時代でも、たのもしい人格をもたねばならない。

もう一度繰り返そう。先に私は自己を確立せよと言った。自分に厳しく、相手に優しくとも言った。いたわりという言葉も使った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていくのである。そして、「たのもしい君たち」になっていくのである。

以上のことは、いつの時代になっても、人間が生きていくうえで、欠かすことのできない心構えというものである。

君たち。君たちはつねに晴れ上がった空のように、たかだかとした心を持たねばならない。同時にずっしりとたくましい足どりで、大地をふみしめつつ歩かねばならない。私は、君たちの心の中の最も美しいものを見続けながら、以上のことを書いた。書き終わって、君たちの未来が、真夏の太陽のように輝いているように感じた。」

と書き贈られている。

私は、司馬遼太郎先輩が将来の日本に思いを馳せ、それを担う少年に贈られた熱いメッセージを読んで心洗われる思いがした。

「現在の識者から果たして自分が体得した貴重な経験や、心構え、自己の確立、他人への心遣い、他人の痛みを知り、思いやり、助け合い、たのもしい人格を得ることなどは、日ごろの簡単な訓練を永年重ねることで身につくのである、という分り易い言葉で少年に呼びかけているであろうか」

私は、司馬遼太郎さんが文化勲章の榮譽を担われたことと同じ重さで、[21世紀に生きる君たちへ]を残されたと思う。

私は82才を過ぎても、なお足りないことの多さに困惑をおぼえるのだが、幸いにも私達が会員となっているロータリークラブの中にその多くが含まれていると思う。

素晴らしい師、友人がたくさんいて、毎週の例会の出逢いを楽しむことができる。気兼ねのない会話や笑いに、はげましたり、なぐさめたりする。私たちは多くの友人を鏡にして自分を磨き、人柄を高めることもできるのである。思いやり、助け合いの心でみんなが力をあわせて人の為に尽くし、ユーモアがあり、笑いがあり、楽しみがあり、喜びがあり、感動がある。そんな集いにいる幸せを大切にしなければならない。私が尊敬する故宇野収さんが愛されたサムエル・ウルマンの「青春の詩」そのものである。「青春の詩」を読み直そう。

青春とは人生のある期間をいうのではなく、心の持ち方をいう。

(中略)

青春とは人生の深い泉の新鮮さをいう、年を重ねるだけで人は老いない。

理想を失ったとき はじめて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、情熱を失えば心はしぼむ。

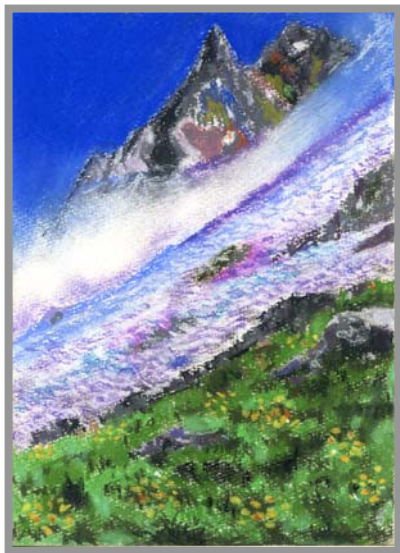
(中略)

靈感が絶え、精神が皮肉の雪に覆われ、悲嘆の氷に閉ざされる時、20歳であろうとも老いる。

頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、80歳であろうとも人は青春にして已む。

# 12

## 2500 地区大会 “友情の出愛” 利尻島の感激の一夜



1897年9月12～14日、日本最北端の地 稚内市で“友情の出愛”をテーマに開催された2500地区大会に、私はRI会長チャールス・C・ケラー氏の代理として参加することになった。

11日に伊丹空港をたち札幌空港到着、乗り継ぎの飛行機に乗って稚内空港到着、迎えの車で大会会場へ向かう。会場で秋永智徳ガバナーとお会いし、ナッシュビル国際協議会以来の再会に感激の握手を交わす。

秋永ガバナーご夫妻とは1984年のバーミンガム国際大会のツアーでご一緒し、2週間の旅行を通じて特に親しくしていただき、その3年後、私がグループリーダーを務めた国際協議会で秋永さんがガバナーエレクトとして参加された時にも1週間を共にし、御夫妻の温かいお人柄をさらに深く知ることができた。その上、秋永さんが主催された地区大会にRI会長代理としてお会いすることができるという思いもよらないご縁をいただいたことに無上の喜びを覚えたものである。

私たちより先に到着された元RI理事夫人菅野喜與様、山田つね氏、私と妻は大会関係者の案内で納沙布岬に立つ日本最北端の石塔を見学し、初めて日本極北の地に立った感慨をおぼえた。備え付けの望遠鏡をのぞけばロシアの警備兵が銃をもち巡視している様子が手に取るように見え、日本の北辺の国境に来た実感

を味わうことができた。大韓航空機が墜落したのは、納沙布岬の海であったと教えていただいた。

9月12日、17時から始まる会長・幹事懇談会、懇親会までゆっくりできると思っていたが、稚内市長に表敬訪問に続いて記者会見があると聞き、初めての経験に驚いた。14時、稚内市役所に浜森辰夫市長を訪問、気さくなお人柄の市長さんの御配慮もあって楽しくお話しすることができた。続いて記者会見、15人ほどの記者が教室ならびに座っている。私は前の席に座って質問を受けたが、至って好意的な記者会見で、笑いもありユーモアもあって40分ほどで終了した。

大会期間中に気づいたのだが、新聞各紙に地区大会を祝う広告が全面に出ていて、大会委員長をはじめ地元のロータリアンの多くが協力されていることを拝見しロータリアンと地域社会の絆の強さを感じた。記事としてロータリーの国際的な奉仕活動などが掲載され、地区大会を機に効果的な広報が行われていることに嬉しい思いをしたものである。

会長・幹事懇談会に続き、和やかな雰囲気の中で懇親会が開催され、秋永ガバナーと私が楽しく談笑している写真が残っている。

大会第1日目、秋永ガバナーのアドレス、私のスピーチに続いてシンポジウム「ポリオプラス」が行わ

れた。コーディネーター道下俊一 PG、シンポジスト河邨文一郎 PG（ポリオの疫学と臨床像）、仲原雄治 PG（ポリオプラスはこう動いている）、山田ツネ氏（ポリオ免疫プロジェクト国際コーディネーター）上記の3人は共に北海道大学で医学を学ばれた専門家であり、山田ツネさんは東京大学を卒業され、ポリオプラス・インターナショナルコーディネーターを務められた各分野の専門家たちによるシンポジウムは大会参加者に大きい感銘を与えた。

山田さんは、「“ポリオで苦しんでいる人を助けてやるのだ”、ではなく、私たちが住んでいるこの地球上の、いま同じ人間が苦しんでいるのです。ロータリアンの善意、奉仕の精神をもって、手を差しのべてあげよう”という「愛」を実践していただきたいのです」と話された。

コーディネーター・道下 PG は、シンポジウムの締めくくった。

「日本をはじめ先進国では既にポリオの発生は見られなくなりました。しかし、発展途上国では今もなお、ポリオで死亡し、障害をもって生きねばならない悲惨な状況である子供が多いことを忘れてはなりません。世界の子供からポリオを撲滅するという壮大な大事業にロータリアンが力を結集することによって、ロー

タリーが 21 世紀にむけて発展し、栄光への道を歩むための輝かしい奉仕活動になると信じています。善意の人々が、自由な意志で、来るべき世紀の全ての幼な児に生命と健康という素晴らしいプレゼントを私達ロータリアン一人一人の手で贈ろうではありませんか。あとはただ、実行あるのみであります。最後に、チリの女流詩人、ノーベル文学賞を受賞されたガブリエラ・ミストラル女史の詩でシンポジウムの幕を閉じたいと思います。

「人間は、多くの失敗や過ちを犯す。最も悪いのは子供を見捨てることだ。欲しいもの、必要なものはいろいろある。しかし、今すぐでなくてもよいものが多い。ただ、子供だけはそうはいかない。子供の骨や肉が形成され、脳が発達するのは、今、現在のことなのである。この子供にむかって『明日にして』とは言えない。子供の名前は『今日』なのだから。」  
有難うございました。

私にとって、この素晴らしいシンポジウムは終生忘れ得ぬものとなっている。

本大会に「夫人のためのプログラム」があって、「ロータリーと私」と題して元 RI 理事・菅野多利雄氏の



ご令室喜與様（医学博士）の素晴らしい講演があり、喜與先生と同じ医師である私の家内が「ロータリー夫人の役割」について話すことになっていた。

特別講演、菅野喜與様の「ロータリーと私」の記録誌で読ませていただくと、豊富な経験に基づく素晴らしい講演で、参加された夫人たちに大きい感銘を与えられた。

続いて家内、操の「ロータリー夫人の役割」で、その概要は、

ロータリーといえば主人だけのものと考えていました。「今日はロータリーの会合で遅くなるよ」と出かけますと、帰りました時には、いささか酩酊気味で殿方はロータリーをダシにして飲んでいるのではないかと思っていました。でも家族会やクリスマスパーティなどにお招きいただきますと、楽しい雰囲気を楽しむあわせていただきますし、地域の立派なロータリアンとの親しいお付き合いを見るにつけロータリーの素晴らしさを感じます。

ロータリー夫人の役割は、大きく分けて3つあると思います。「精神的な面での役割」「実践的な役割」「夫人も奉仕の一端を」ではないでしょうか。

「精神的な面の役割」は、家庭内の温かさがロータリー活動の活性化につながるといわれますが、話し合

いのある温かい家庭にすることを心がけるのが夫人の役割だと思います。仕事上のストレスを和らげ、毎週の例会に出席する気持ちになってもらうのも夫人の役割のように思うのです。「また、ロータリークラブですか？」ではなく「今日は例会ですね、皆さんと楽しくネ」と快く送り出すことが大切だと思います。特に夫人の大きい役割は、主人の健康面の配慮だと思います。

「実践面での役割」としまして、青少年交換学生やGSE、財団奨学生へのお世話などがありますが、これは夫人の大切な役割の一つです。たいへん難しい面もありましようが、若い青少年の国際理解は次の時代の世界平和への地道な奉仕でございます。帰国の時は涙して別離をおしみ、機会を得て外国で再会した時は肩を抱き合って喜び合い、人と人の温かい交流を体験させていただくのもロータリーで、その実践は夫人の役割でございます。

「夫人も奉仕の一端を」につきまして、今、ロータリーは総力をあげて地球上からポリオを追放しようとの計画が進みつつあります、子供を恐ろしい病魔から守るのは私達母親の務めです。美容院行きをちょっと節約したり、流行おくれのハンドバッグで我慢してでも、この意義ある奉仕事業に参加させていただきましょう。

また、ご主人を勇気づけてこの事業に参加するよう励ますのも夫人の役割でございましょう。

結びに、主人がガバナー時代に主催した地区大会で、岩村昇博士のたいへん感銘深いお話しを伺いましたので、ご紹介します。

岩村先生は広島で被爆され、疲れた時には血尿が出るお体で、皆さんより一足も二足も早く天国へ召される短い命を、アジアの貧しい人たちの為に捧げておられます。先生は「ネパールの極貧の結核患者に与える薬・パスを得るために、皆さんが使い古した切手を送っていただきたい。古切手を集めることでネパールの貧しい方々が結核から救われ生活に光明を見出すことができるのです」と教えていただきました。私は話を聞きましてから、今まで屑籠に捨てていた古切手を集めて送り続けています。こんなちょっとしたことが人様のお役に立つことを知って、私の生き甲斐の一つになったように思います、また、今まで知らなかった人としての新しい生き方をロータリーで教えていただいたように思うのです。皆様とご一緒に小さくても人様のお役に立つ奉仕を実践することができますれば幸いです。ご清聴有難うございました

私と同じ地区の先輩であり、直前 RI 理事をつとめられた伊藤恭一さんが遙か遠い本大会に参加され、

「戸田さんよくやったね」と激励していただいたことは今も忘れ得ない思い出である。伊藤さんが早く世を去られたのは残念であるが、仕事の上でもたいへんお世話になり、私がガバナー時代には温かいご指導を頂いたこととともに脳裏に刻みこまれ感謝の気持ちでいっぱいである。ロータリーにはこのような素晴らしい先輩が後進を指導され、人を育てていただけることがロータリーの永続的な発展のために大切であると思う。

#### 忘れえぬ利尻島—感激の一夜

大会終了後のエクスカーションは、利尻・礼文・サロベツ国立公園を巡る旅であった。兵庫県から日本海フェリーで函館に到着し、車を連ねて大会に参加された執行 PG、生田神社宮司・加藤氏を含め数人がエクスカーションに参加された。

9月中旬は嵐の余波であろうか、利尻島への船は右に左に、上に下に揺れに揺れて船酔いに苦しむ人が多く出た。利尻島に到着、バスに乗って利尻富士を望み、イクラ丼、ウニ丼に舌鼓をうった。この日は、サロベツ国立公園を見学し、利尻の宿で一泊することになっていた。2階の大広間で夕食をとり、話がはずみ、酒がまわりはじめると、誰かの音頭で歌が始まった。

「会長代理、ガバナー、パストガバナー、お客さん！

前へ出て歌を唄ってください!!」の掛け声に、ガバナーと私を中心に 10 人ほどが肩を組んだ。私の左で肩を組んだ背の高い山田ツネさんは、浴衣からによきっと毛むくじらの足を出して、みんなが蛮声を張り上げて「知床旅情」を歌った。地区大会を成し遂げた後の高揚した気持ちと、知床と見紛うばかりの雰囲気に、歌う人も聞く人もひとつになって大声を張り上げ、利尻の空に響きわたった。

私は今も「知床旅情」を歌ったあの宵の感動のひとつ時を忘れることはできない。これぞロータリー歓喜のひとつときである。

私は本大会に参加して、秋永ガバナーはじめ多くの人々の温かいご好意をいただいたことと、利尻島の一夜の思い出は終生忘れることはないであろう。

ロータリアンのだれもが何かの機会に、このような「心の高まり、充実感」を経験しているのではないか。「人はより善く、より高くという気持ちを抱き、友を求め友情を深め、友と一緒に奉仕した時に得られる感動」を味わっているに違いない。

この時に生まれる「人と人が和す温かい心」が、ポール・ハリスのいう少年の心であり「みずみずしい少年の心を生かし続けることによってよき人を創る」というロータリーの素晴らしさを知った。私が第 2500 地区大会「友情の出愛」に参加して、また一つ素晴ら

しい体験を積み重ねることができたことに感謝したい。

# 13

ものづくり名人が人づくりに完敗か



私が 1980 年にガバナーノミニーに指名されてから 28 年の間、大阪ロータリークラブから毎週の会報をまとめて送っていただいている。有り難いことである。余す所なく読ませていただき素晴らしい卓話はコピーしてファイルしている。

2004 年 3 月 19 日、大阪ロータリークラブの例会で、流通科学大学学長、ブリティッシュコロンビア大学名誉教授・永谷敬三先生が話された文章が載っている。

そこで私たちが気になっている「日本の教育の現状」について語っておられ、文章を読みながら日本の大学教育の現状を知って愕然とした。天然資源の乏しい日本は、勤勉に学んで新しい科学技術を開発したり、世界に通用する良き人材を育成して諸外国と対等に渡り合える国作りを目指してるのではないのか、将来の日本はどのようになるのであろうかと不安な気持ちになった。

永谷先生の話のを要約すれば、先生はカナダのブリティッシュコロンビア大学で 30 年間経済学を教えておられたが、日本に帰ってこられて大学生の目が死んでいる、やる気がないことが分って大変なカルチャーショックを受けられたそうだ。カナダでは学生が授業料を取り戻す意気込みがあって勉強をしますが、日本では勉強を忌避する、それが何故か分らない。トレーニングジムでは会費を払って黙々と筋トレを行います。



大学は脳トレをするところなのです。アメリカ、カナダの学生に比べ日本の学生は抜群に悪いことを指摘したいのです。

### ① 欧米は政府ができる前に大学があった

スイスのローザンヌにあるビジネス系の研究機関IMDが作成した2003年版全世界の国の評価とランキングを見ますと、大学教育について日本は30カ国中30位と最低です。公的な教育支出はカナダが1位で日本は22位となっており、非常に悲しいことですが日本の大学教育はメチャクチャということができません。

これは歴史的経緯の違いもあります。欧米の大学は近代政府ができる以前に創設されました。世界で最も古いイタリアのボローニア大学は1119年、パリ大学は1150年、オックスフォード大学は1219年、ケンブリッジ大学は1219年、コロンビア大学は1754年、私が留学したブラウン大学は1776年、政府ができたのは1776年ですから、やはり政府より前です。

日本の東大は1877年、京大が1897年で、文部科学省は自分が産んだ子だからと子離れができない教育ママなのです、口は出すが金は出さない。何をすることもお伺いをたてさせる。外国はこの逆で金は出すが口は出さない。教育活動、人的資本というのは、本人

に帰属する利益以上の利益を社会に生み出すのです。口を出すのは制度的欠陥だと思います。

## ② 人づくりの戦略を持て

モノづくりと人づくりは大きく異なります。経済学のゲーム理論でいいますと、モノづくりは自然を相手のゲームです。人と人とのゲームとの違いは、自然は我々の腹を読み間違える反応をすることはありません。手間暇かければ相応の品質の製品ができます。ある意味では正直で、予測可能な活動です。

一方教育、人づくりは、人が人をつくるわけです。こちらの戦略に対し、いくつもの選択肢の中から何かを取る。それにこちらもまた対応する。いい均衡に落ち着くこともあるし、全く逆のこともある。

教育は教師が生徒相手にゲームをするのです。手間を暇かければ必ずいい均衡が得られると限らない。日本は悪い均衡になっています。人づくりは自発的に勉強したいと思わせるインセンティブ・ストラクチャー（誘因構造）をいかにつくるかということです。

日本人は自然相手のゲームは上手なので、理科系は強く有能です。ところが人を相手のゲームはうまくない。外交をみてもこれが世界の大国かと思うほどオロオロして情けない。どうやって誘因構造をつくるかなのです。皆さんが学ばれた新古典派の経済学は自然科

学に近かったが、最近の経済学は不確実性の多い人間学になりつつあるのです。

### ③ 怠慢を排し信賞必罰の教育を

日本の大学生は勉強をしません。しなかったら落ちるかという落ちない。できてもできなくてもいい評価制度なのです。できたからといって誉める人もいない。先生は面倒だからテストをしない。日本の教師は平均的に怠慢です。教育と研究は車の両輪なのに常に「教育は研究の邪魔だ」というのです。欧米では誘因構造ができていますから、論文を書かないとクビになります。それを何十年やると嫌になるし、やはりラットレースとは思いますが、「教育をすることで脳が活性化されます」「いい学生は必ずいるのです」教えることは学ぶことなのです。私が何をどうやって教えているのか、どれくらいいい先生か、誰もチェックしないという相互不可侵条約があり、互いに人のことに口を出さない。

そのように何十年も同じ科目を教えていれば、どんなにいいスタートを切っても脳死します。そんな授業を聞いている学生こそいい面の皮で、結局お互いが楽で努力をしないようにしているのです。

これは大学教育だけでなく、小学校からそうです。できない者に「できない」と言わない。いつかどこか

で言われるのです、それなら 22 歳で言われるより 12 歳で言われた方がいい、まだ改善の余地があります。

誉められるほど、いい励みになるものはないのです。ところが日本では、しからず誉めずの「不賞不罰」です。教育はいい成果を誉める「信賞必罰」です。子供たちの長所と短所を教えてやり、分際をわきまえさせるのが第一です。

偏差値での進学指導も残虐です、20 歳くらいまで受験勉強してきて、人生について何も考えたことがない。昔は貧しかったこともあって、誰もが大工、兵隊さんになるんだ、など自分の人生を比較的優位に生きるために一人づつの子供に意識させる、それが大変重要です。今の大学 4 年生は就職活動に没頭して勉強は無に等しい。この点だけでも直すべきです、と話しておられる。

永谷先生の「怠慢を拝し信賞必罰の教育」が戦前の日本教育の原点であったと思う。

子供の頃からこの精神で頑張ってきた多くの人材がいたからこそ、焼け野原と化した戦後の厳しい日本を、渾身の努力で GDP 世界第 2 の国にまで押し上げる原動力となったのである。

今、日本の歴史に学び、外国の素晴らしい制度を受け入れて真剣に次世代を担う子供から青年まで「信賞必罰」の教育を実施して人創りを積極的に行わないと、

国土が狭く天然資源に乏しい日本は、過去の栄光にノスタルジーを抱く 3 等国に陥る危険性があることを為政者は銘記し、速やかで大胆なる対策を打ち出してもらいたいものである。

# 14

## 母の言葉は心に沁みて



東京ロータリークラブには各界の代表的な人が会員として入会しているが、藤山一郎さん、徳川無声さん、森繁久弥さんなどの芸術、芸能の代表的な人たちも入っておられた。

藤山一郎さんは、平沢先生が作詞された名曲「限りなき道ロータリー」の曲をつけられ、戦後の暗い時代、日本国民に明るい希望を与えられた歌声は今も忘れることはできない。

また、講談で名人といわれた徳川無声さんが、ロータリークラブについての感想として「地域で選ばれた会員が毎週一回、決まった時間に集まって語り合い親交を深め、地域社会のお役にたとうという人びとの集いは他に例のない素晴らしさである」と書いている。

森繁さんは「特に多忙な無声さんがロータリークラブの出席規定が他に例のない素晴らしい約束ごとであると評価していることに驚きをおぼえた」と感想を述べている。

森繁さんの著書「人師は遭い難し」の「衣食足りて礼節を知らず」の項に次のようにある。

森繁さんのフアンの一人に、東京八王子で中流の会社を経営している社長さんがいて、文字通り立身出世の人で、この人がロータリークラブで卓話したとき、全員が感涙にむせんだということである。この例会には全員に赤飯が用意されていた、出席者は何事だろう

かと疑問に思ったそうである。

社長の話:私は貧しい百姓の長男に生まれました。かねて心に決めていたことを16歳までに実行しようと折を伺っていましたが、百姓は百姓だとなかなか親父がうるさく、言い出す機会もないまま悶々と日々を送っていました。

16歳のある寒い日、4～5日前から身辺をかたづけ、いよいよ今日こそ家出しようとう決心しました。持ち出す荷物として下着2,3枚ですが、しっかり風呂敷に包んで用意していました。

前夜は一睡もならず午前2時を少し回る頃、静かに床をかたづけ3時に部屋をそっと出ようとしました。すると台所で何か物音がするのです。

そっとのぞくと何とおふくろがこんな夜中に起きてきて何かしている模様です。見つかったは大変と、足音をしのばせて出て行こうとしましたら、突然おふくろの小さい声が聞こえました。

「一男！」私は息をのみ、だまって立ちつくしてしまいました。

「めしを食ってけ！」

すべてはバレていたのかと観念し、台所のお膳の前に座りました。

暗いランプの下で、何と湯気の立つ赤飯が私の前においてあるではありませんか。母は一こともいいませ



んでした。とうとう私は一口も食べることができずに、だまってそれを包んで出奔しました。これは、私の母の話ですが、これが日本の母の常の姿かと思っております。

「どうぞ記念に皆様に食べていただきたいと赤飯を用意いたしました」と話された。

例会に出席したロータリアン全員が涙を流しながら赤飯を頂いたということである。

社長が自分の母を言葉少なに語る中に、母の無限の愛がにじみ出ているではないか。

私には、この感動的な母の話とは反対に、母に心配をかけた思い出がある。私が昭和7年、小学校に入学して間もない頃のことである。

クラス分けがあって私はイ組に入ることになった。担任は厳しきで有名な学年主任、吉村先生であった。2学期に入って、1年坊主も学校になれてくると、巷で流行っていた一文菓子屋で売っている「粘土」を学校に持ちこんで遊ぶのが流行っていた。楽しそうに遊んでいる友達の姿をみて、私も母からもらった1銭の小遣いを貯めて待望の粘土を買い、みんなの仲間入りを果たした。

最初は、それぞれが犬や魚や舟などを作って見せ合い自慢しあって楽しんでいたが、ものづくりに馴れると飽きて、小さく丸めてキャッチボールがはじまる、

さらにエスカレートすると大きい粘土を投げあい、粘土が教室の床に落ちてベツトリとくつつく。

そんなとき、私は何か作ろうと新しい粘土のセロファンを剥がし、真新しい粘土を机の上に置いた。始業のベルが鳴って先生が入ってくる。ヤンチャな一年坊主はかまわず粘土合戦を続けている。

吉村先生は「何をしているか！教室は勉強する大切な場所だ。持っている粘土をみんな持って来い！」一年坊主は震え上がって粘土を先生の所へ持って行く。

私は「粘土遊びも投げあいもしていないし、使っていない新品だから」と思ってポケットにしまいこんだ。今になって思えば「母から小遣いを貯めてやっと買った粘土」への未練があったのだろう。

先生は「もう誰も持っていないか！」と、念をおして生徒を見回した。「戸田が持っています」と誰かが言った。先生は鬼のような形相になって「戸田もってこい！教室の外で立ってろ！」

私は一年生で教室の外に立たされた第1号となった。終鈴がなって体育を終えた上級生が通りかかり指さながら「一年坊主が何をしでかしたのか！」と笑いながら通り過ぎていく、恥ずかしさと無念の思いが頭を駆け巡った。

授業が終わり、吉村先生がやってきた。「戸田、お

母さんに教員室に来るように言ってきなさい」授業時間が終われば許されると思っていた私の思いが外れて、1年坊主は生まれて初めて「困惑の極」を味わうことになった。

私は家に帰って泣きながら、今日あったことを話し「学校へ行ってほしい」と頼んだ。母はさぞ無念であったと思う、自分が慈しみ育てた長男が待望の一年生になって間もなく先生に呼び出しを受けるなんて。

母は「一緒について行ってあげるから、先生に謝りなさい！」私は吉村先生の怖い顔を思い出し「僕は行かない、お母さんだけ行って」。母は「一緒に来なさい！」私は泣きながら地面に寝転んで抵抗する。小柄な母が驚くほどの力で引っ張る、母も泣いている。学校へ行った母と私は吉村先生にこっぴどく叱られた。

母は家に帰って、私の頭を撫でながら、「もうこのようなことをしてはいけないよ、先生の言うことをよく聞いて、友達と仲良くするのですよ」といつてくれたあの時の光景は 82 歳になった今もはっきり記憶の底に残っている。

前述の社長の挿話にある「言葉少なに語る母の愛」は、聞く人に感動を与える素晴らしい実話であるが、それと正反対に、幼かった頃、一番困っていたとき、頭を撫でながら母に諭された「先生のいうことをよく聞いて、友達と仲良くするのですよ」の言葉は、その

後の人生で、人に接し親交を結ぶための大切な教であったように思う。

今、家族関係の断絶が問題になり、虐め、自殺が大きい社会問題になっているが、機会あるごとに、先人の赤飯の話や、「素晴らしき出逢い…①」の11話にある、「知能に障害のある兄と弟の話」、「あとがき」にある「知能指数が低い姉と妹の話」などに加え、ロータリアンの心に残る感動の話を、若いお母さん、小、中、高校生に情熱をこめてお話いただきたいものである。

このような地道な努力を積み重ねることもロータリアンの役目ではないかと思う。

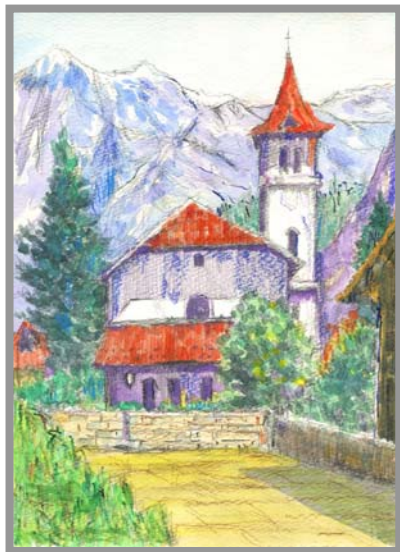
誰もが懐かしい母の思い出を沢山もっているであろう。調子はずれで、優しい言葉でつぶやくように歌う子守唄を忘れることはできない。誰もがお母さんが赤ちゃんの顔を見つめながらあやしている姿を見ると、微笑ましくも心洗われる思いがする。

そこに日本の母の姿を見ることができ、子供にとって母は永遠なのである。

# 15

## 人間らしさを求めて

渡辺和子氏 (シスターセントジョン) より  
石川 ICGF ホスト金沢北ロータリークラブ



私は以前に、金沢北ロータリークラブが主催されたインターシティ・ゼネラルフォーラムの記録を読む機会に恵まれ、渡辺先生のお話の中に「ロータリアンが心がけるべきエキス」を見出した。参考にもなればとその概要を記すことにした。

渡辺先生は、1936年2月26の未明に起きた2・26事件で凶刃の犠牲となられた教育総監、渡辺錠太郎陸軍大将のご次女であり、聖心女子大、ボストン大学大学院を終了された哲学博士、ノートルダム清心女子大学学長を務めておられる方である。

## 渡辺先生の話

### 1) 人間性の感覚はまだ私を去っていない

ドイツの哲学者カントの晩年について書いた本に、カントが80歳に達し、死を目前に臥せっていたとき、親しい医者が見舞いに来られた。カントは床に起き上がり、姿勢を正し、医師が座るのを見届けてから、病床についたと言うのです。そして嬉しそうに「人間性の感覚はまだ私を去っていない」とつぶやき、その場に居合わせた人達はいずれも深い感動を受けたということです。

### 2) 肉体に打ち克つ精神力

カントが「人間性の感覚」といった言葉の意味は、歳をとって老衰の極に達し、肉体的条件が苦難のどん

底にありながらも、肉体的な苦難に打ち克つ精神力を堅持し得た自覚と誇りを指したものといえましょう。

### 3) 礼儀の中に秘められた精神力

私たちは人間らしさ、人間性の回復、人間優先などと結構な言葉を使っていますが、それをもし、ただ快適、快樂な生活、自分がエンジョイすること、より多く給料を手に入れることなど、肉体的に楽をすることのみに使っているとすれば、それは誤りで、本当の人間らしさは、肉体的な諸条件に打ち克つ精神力を發揮することにあるのではないのでしょうか。

人間尊重といますが、尊重し優先する人間が、どのような人間であるかを忘れ、むやみに人を傷つける人間、利己主義の固まりのような人を優先させてよいものでしょうか。

私達が尊重し、優先するのは、本当に人間らしさを伴っているかをじっくり吟味してみることが大切だと思うのです。

私は時々新入社員の方々の集まりに招かれお話をすることがありますが、今時の若い人は挨拶をしない、しょうともしない。「挨拶をしなさい」というと「一体どんな得があるのですか」と言います。

私達が挨拶をすること、ありがたうとお礼を言うこと、礼儀作法に従っていくこと、それは社会的な意味をもっていると同時に、私たち自身の人間性の感覚の

表われであると考えねばならないでしょう。

わざわざ立ち止まって礼をする、帽子を取ってお辞儀をする。これらは、他人に対し仕方なくするのではなく、自分の人格を高める為に、自分を甘やかさぬ為に、自分に対する厳しい態度として、自分自身に課す厳しさとして大切にしていかなければならないのです。

#### 4) 世の中のオアシスとなれ

卒業した学生が、手紙をくれまして、「新入社員の研修の時に、とてもいいことを習いました。それは、今の世の中は砂漠のようにカサカサしている。ものも沢山あるのに、人も大勢いるのに砂漠なんだ。人っ子1人いない不毛の砂漠のような世の中で、君たちはオアシスになって欲しい。どうしたらオアシスになれるかと言いますと、まず、お早うございますの「お」を大切にしてください。ありがとうございます、の「あ」を大切にしましょう。失礼しました、の「し」、そしてすみませんの「す」を忘れないように。お早うございます。ありがとうございます。失礼しました。そして、すみません。これらの言葉が貴方の口から素直に出るとき、はじめて、砂漠と化した世の中に潤いのあるオアシスが出現するのです」と言うのです。

このように礼儀というものは、自分自身を高めていくために、自分自身を甘やかさぬために、そして自分の人間性の感覚を堅持すると同時に、世の中にオアシ



スをもたらす潤滑油としても大切なものなのです。

#### 5) 相手が無礼でも礼儀は大切にしよう

私たちは、とかく礼儀と言うと、相手の出方によって自分のあり方をきめがちですが、相手の出方に係わりなく、自分自身の礼儀を守ることが大切です。

私がアメリカで勉強していました時、黒人と白人の間に大変厳しい差別がありました。そして特に差別が強かった南部で、あるとき、黒人の講演者が演壇に立つと、白人の中から、聞くに耐えないような野次雑言が浴びせかけられたそうです。

その黒人は講演をやめて壇を降りるかと思ったところ、最後まで立派に話し続け、静かに降壇しました。

白人の主催者が、大変申し訳なく思ってお詫びをしたところ、その黒人は「私は言い返そうと思えば言い返すことができました。降壇しようと思えばその理由もあったと思います。しかし、私は自分をそこまで低く身をかがめる事ができませんでした。つまり、自分と言うものを、相手の低さまで下げることができなかったのです」という話を聞きました。

私たちはとにかく、相手が丁寧にしてくださる時は丁寧に、相手が無礼な態度の時には無礼を返しがちではありますが、人間らしく、自分らしく生きていくためには、相手の出方に係わり無く、自分の生き方を堅持していくことが大切なのでありましょう。

## 6) 微笑で広げようロータリーの輪

皆様が所属していらっしゃるロータリー、その輪はとて大きく広がっているものと思います。しかしその輪は単なる事業や、お出しになるお金だけで広がるものではなく、ロータリー活動の中で皆様が他の方々に微笑みかけられる、その微笑が次の人の微笑みを生む。

皆様のありがたい感謝の言葉が、今までそれを言えなかった人の口からも自然に洩れるようになる。そして初めて、お金を使わなくても、また病気の時でも、年をとってからでも、このロータリーの輪を、平和の輪を広げていくことができるのではないかと思います。

## 7) 小さきは小さく花咲かん

私の存じあげている方で、選ばれて留学生となられた方が日本に帰国されてお話しくくださった話しです。

「留学生活をしている間、言葉が不自由な為に大変苦労したそうです。またキリスト教の深い伝統に根ざす哲学、神学の教養の不足から劣等感に打ちのめされ、このまま日本へ帰ろうかとさえ思ったそうです。そんな或る朝、学園を散歩しているときふと足元を見ると、名も無い小さい雑草が、愛くるしい花をつけて精一杯咲いている。その時自分は、自分なりの小さい花を咲かそうという境地に達することができたのです。

確かに薔薇の花、百合、菊、カーネーションのように咲くことは自分には出来ぬかもしれない。でも小さい花、名もない花として、バラ、カーネーション、百合、菊が咲かせることのできない、自分なりの小さい花として咲きたい。

この境地を得た時から、迷いの霧が晴れて目の前がスーとし、勉強に身も心も打ちこめるようになった。

人と比べないで、人を見ないで、自分の出来るだけの力で、自分なりの花を咲かせようと思った」と話されたのです。

人間らしく生きるという事の一つは、自分の肉体的条件に打ち克って精神力をフルに使いながら生きていくということ。その二つは、小さきは小さく咲こうという言葉が示すように、他の誰にもなれない自分というものを、相手と比較することなく精一杯生きていく、そういう生き方であると思います。

#### 8) 人間らしさを求めて

ロータリアンの皆さんのお仕事も、喜び、希望、平和と一致、光と真理、信頼と希望、そういったものを世の人々にもたらすことではないかと思えます。

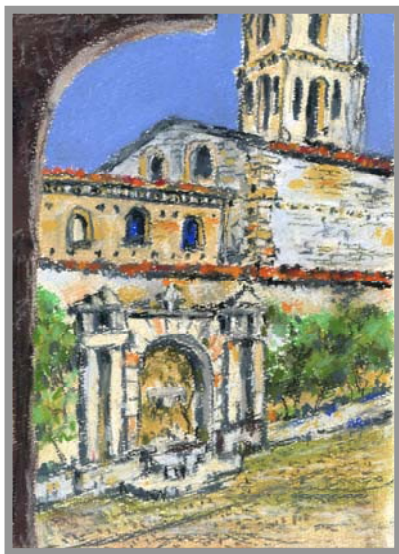
皆様のお人柄が、今までも、そしてこれからも大きい力となって、世界を平和に、人々の生活を向上させていくことにあると思うのですが、この営みが皆様のお仕事・事業の中心にもなっているとすれば、事

業に携わる人々が、心に何を祈りながら、自らをどのように存在させて行くべきかということ、そしてそのために今日、「人間らしさ」ということを皆で一緒に考えさせていただき、自らに厳しく、他を先にする心を忘れず、社会に平和と光をもたらすことによって、ロータリーが人間をより人間らしくするところであり得るようにと、心から願って今日の話を終えさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

# 16

## 仰げば尊しわが師の恩



2007年2月9日、第4回ガバナー諮問委員会が日航ホテル大阪の竹葉亭で開かれた。

2時間の諮問委員会が終わり各自が会費を払って会食がはじまった。私の左隣に1993～94年度の地区ガバナーをつとめられた大森慈祥さんが座っておられた。

大森さんは永年にわたり（宗）辨天宗の管長をつとめておられ、さらにすぐれた進学校であり、高校野球大会で春夏の甲子園出場という文武両道で有名な智弁学院の理事長の重職を担っておられる。

大森さんは「各教科の先生は、熱心に勉強を教えています。生徒から『私達は大学入試の為に一生懸命に勉強していますが、社会に出てからも役に立つのですか？』と聞かれるそうです。戸田さんはどう思われますか？」と聞かれた。

私は「高校時代、目の前の大きい目標は大学受験ですね。それに向かって地道な努力を続けることによって、今まで出来なかったことが徐々に出来るようになり、分らなかったことが分ってくる、そのような小さい成功体験を沢山積み重ねることで自信ができてくる。大目標の達成はこのような努力と経験の集積によるものでしょうね。高校時代に身につけた勤勉で努力を惜しまない習慣は社会に出てからも変わらず持ち続け、難しい仕事も、時代に適応する新製品の開発も、

困難な交渉も成し遂げられる素質が備わるのですね。良い大学を出たから出世するという人もいますが、高校時代から大学時代に身につけた人生の貴重な習慣と、何事もやればできるという経験が評価されるのですね」と私が思っていることを話した。

大森さんは「戸田さん一度、経験談を生徒に話してくれませんか」と言われた。大森さんは、「明日、奈良の卒業式に行きます、その次は和歌山です。私の学校では卒業式の最後に“仰げば尊しわが師の恩”を歌います。生徒と先生が交互に歌うのですが、先生も生徒もみんな涙、涙です。私も涙いっぱい卒業生を送る言葉を話すのに困ります。先生と生徒が一つになりましてね、学びと睦みと感謝の心があふれて感動しますね」と話された。

私は、「“仰げば尊しわが師の恩”は私たちの人生で最も心に残る歌ですね、昔は歌いながらそーっと涙を拭き、溢れる涙をどうしようもなかったですね」と互いに若かりし頃の思いを話し合った。

この章を読まれた方は是非「仰げば尊しわが師の恩」を小さく口づさんでいただきたい。恐らく現在では味わうことのできない感動に包まれることは間違いないであろう。

私は、大森さんに「学校の卒業式で“仰げば尊し”を歌っている学校は少なくなっただけでしょうね。」と聞

くと「ほとんど歌っていないのが実情ですね」と言われた。

大森さんと私は周囲の人に分からない小さい声で、交互に「仰げば尊し わが師の恩」「教えの庭にも 早くくとせ」[思えばいと疾し この年月]「今こそ別れめいざさらば」を歌った、やはり私の目頭はあつくなり、久しぶりに若かりし頃に戻って感動をおぼえた。

このような日本人の心の歌は理論や理屈ではなく、等しく人の心の中にある人恋うる心、感謝の心が甦つて感動するものである。

いま、前例や形式、戦前の旧来の陋習を排除しようとの一部の主張を受け入れ、人の心の部分を疎かにする風潮があるのではないかと思う。このような良き伝統を消し去ることで、子供たちの純粹さや情操の部分が干からびて、イジメ、キレル、殺人、自殺というような殺伐とした世相になっていったのではないかと思う。

「仰げば尊しわが師の恩」「蛍の光窓の雪」を先生と生徒と一緒に歌って涙を流す人間の情感が、今最も大切なのではないかと思う。

私は、現在の青少年が「キレル、ムカツク、苛める、殺す・・・」が日常の生活に当然のように幅をきかせ、日本の伝統である「和、敬、静、寂、善、愛、志、温かさ、慎み、思いやる心、友情、察する、奉仕、善意、



理想、習う、学ぶ、真理、価値観、新鮮な心、柔らかい心、少年の心……」という人間の内面にある大切な心の部分を身につけることができず、学ぶ機会が少なくなっているのではないかと思う。

本来、誰の心にも少年の心が宿っているものである。およそ善良な人間の心の奥底には、必ずけがれを知らず、偏見もなく、寛容で、鋭い情熱と、友好的な素晴らしい人生観を持つ少年がひそんでいるものである。しかし、年とともに少年の心が次第に消えうせていくことは悲しいけれど、それはある程度仕方がない。

ただ「人は柔軟な心をもち友情に敏感で、師を敬う心をもっている間は、いつまでも若々しい」ということを、先人の教訓として少年に伝え、励まし、自信を持たせることが大切であると思う。

みんなから、謗られ、バカにされ、阻害されるころから、将来の日本を担う人材は生まれてこない。勇気づけ、やる気を与え、励まし、先輩の知恵に学び、努力の大切さ知り、人生の成功を勝ち取る秘訣を教えねばならない、小手先の小細工では将来の役に立たない。健全で将来を託す青少年を育てあげることこそ国家百年の大計である。

私は大森さんと話しながら、先生一人一人が担当する学科を分り易く熱心に教え、生徒に日々の努力を積み重ねることで成果を上げることができるという事

実を教え、体得させ、勉学も運動も弛まず励み、練習し続けること以外に練達の方法がないこと、とこれが人生の王道であることを教えておられると感じた。

そして、その基本に 先生と生徒との心の通い合い信頼関係が築かれ、例えば「仰げば尊しわが師の恩」を交互に歌うなどで共感が醸成され、親しみが育っていくのではないか。私の乏しい経験であるが、日々僅かながらでも努力を積み重ねることで、小さい成功体験が得られ、それが小さい自信となり、小さい自信を積み重ねることで本当の自信につながっていくことを教えていただいている先生方の献身と、学校のありかたに敬服するとともに、そのような環境にいる生徒さんの幸せを強く感じた。

世間では、受験のためのガリ勉と揶揄するが、若いころ失敗しながら繰り返し、繰り返し勉強し、小さい成功体験を積み重ねることで培われた力によって、目前にある受験という大目標に挑んで成功することが、人生で、はじめて味あう大きい感動であり、将来の希望への第一歩を踏み出す契機になるのである。またこの成功が永年支えてくださった先生への恩返しであり、最高の親孝行につながるのである。

社会に出てどんな仕事についても、若い頃に身につけた習慣と体験と頑張りがあれば、少々のことでは動じない気持ちと、やれば出来るという自信をもって事に

あたることができるのである。

今、大学受験という過酷な競争に挑んでいるが、今まで先生に教えていただいたことに加え、自分の限界に挑んで勉強を続けるのも将来、良き人生を生きるための貴重な経験として、健康を第一に頑張っていたきたいと願わずにはおられない。

たとえ一度や二度の失敗があったとしても、積み重ねた習慣や努力は必ずや初志を貫くことができることを信じている。

私は、82歳の高齢になっても、第2次世界大戦中の受験の厳しさを思い出す。「文化系に進めば20歳になれば学業なかばで戦争にかりだされた。理科系に進めば国内にあつて航空機、戦車、大砲、弾丸、などの兵器生産工場の監督官を務めることができた。だから、よくできる自信のある人が理科系に殺到して激烈な受験競争となった。

私は長男であつたので父の仕事を継ぐために理科系の入試に挑戦した。落ちれば浪人も許されず軍需工場に徴用され、20歳になれば軍隊、戦場という、まさに背水の陣であつた。その当時のことを思えば少々のことではへこたれない勇気が湧いてくるではないか。

幸運も味方し合格した時の感動は今もはっきり心に残っている。それが自分自身への励まし、経験とな

って、何事にも挑戦し、やり遂げられる自信につながったのではないか。

“若い頃の辛抱と努力は買ってでもせよ”と言われるがまさにその通り、成功した時の感動は例えようもなく素晴らしいものである。

2004年3月8日8（月曜日）の毎日新聞に、東大名誉教授 小柴昌俊先生の「私の教育改革論」が載っている。ノーベル物理学賞を受賞された先生が現在の教育について考えを述べておられる。

「同年代の子供と接触する機会が減って自分で考えて行動することができなくなっている。こんな時代に能動的に判断する力をつけようとするれば、全寮制の中学、高校で教育することが一つの方法だと思う。私も旧制高等学校の3年間寮生活ができてよかった。1～2週間の宿泊体験ではだめだ。心を開いて何でも話せるようになる前に終わってしまう。（中略）「学習内容を大幅に減らした学習指導要領の導入には大反対であった。小学校の高学年から中、高校にかけては、最も知識を吸収して身につけられる年代である。九九でも何でも徹底して詰め込むべき時期なのに「ゆとりが大切だ」という教育学者の発言は納得できない。…」とある。

私はこの論説を読んでスーとした。努力の積み重ね

なくして成し遂げることはできない、という現実を教え、それを実行することを日本の若者に伝えていかねばならないと思う。

小柴先生が地下 1000 メートルの神岡鉱山の廃坑に水を充満させ、地上では観察できないニュートリノの研究を成功させることによって世界に新しい理論を発表され、ノーベル賞を受賞された功績は、小、中学校、高等学校、大学での弛まぬ努力を続けられた結果にあるといえる。自然資源の乏しい日本にあって、勤勉な国民性をもつ日本の将来の繁栄と幸福は、各部門において一人一人が勤勉に努力を積み重ねる以外に道はないのである。

そのために若い頃から勤勉な生活習慣を身につけることが大切であり、この地道な方法以外に道はないと思う。

諮問委員会後の会食で大森パストガバナーと一緒に青春時代に戻って「仰げば尊しわが師の恩」を歌ったあの宵を懐かしく思いだす。

6月25日に2006～07度の最終の諮問委員会後の懇談会で大森パストガバナーと奥様にお会いした。

「来年の春、奈良県代表として甲子園の選抜野球大会に出場することになりました」と話してくださった。

「おめでとうございます！」とお祝い申し上げたが、

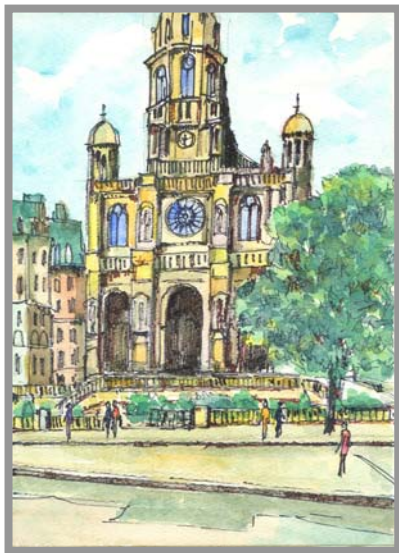
やはり「先生のよき指導をいただき、普段から勉学に励み、練習を積み重ねることが、良い結果を生み出す原動力である」という考えがまた実現したことと、先生と生徒が情熱をもって一つになり頑張られた素晴らしい成果を自分のことのように嬉しく思った。

来年の春はテレビの前で、智弁学園高等学校の勝利を声張り上げて応援したいと心から思った。

# 17

イリノイ大学 208号化学研究室 福岡大学学長  
宮野成二氏（ロータリーの友より）

無償の行為は100倍にも1000倍にも  
なって世の中を潤す



私どもは提供した労働や技術に対して正当な報酬を要求する。しかし一方無償の行為の尊さがどれほど人々を力づけ励まし奮い立たせこの世界を動かしてきたかを決して忘れてはならない。私は 35 年前ロータリー財団奨学生としてそのノウハウをイリノイ州の大学の町の洗濯屋の主人から学んだ、と宮野先生は書いておられる。

昭和 63 年 6 月号に、宮野先生が福岡西ロータリークラブで卓話をされた要旨が載っている。宮野先生が財団奨学生に選ばれ多くの人々の支えと、ご自身の常識を超えた努力の中から体得された無償の行為の尊さを読むたびに目頭が熱くなることを思い出す。何回読み返しても心が熱くなるすばらしい実話である。宮野先生は緒方貞子さんに続いて日本から 3 人目の財団奨学生としてイリノイ大学大学院で研究された。

大学町の唯一のロータリークラブは 120 名の会員中 80 人が大学関係者であり、私のアドバイザーをしていただいたのは有名なウィリアム・ローズ教授であった。一方、私の指導教官はロジャー・アダムス教授で、熱心なロータリアンであり、威厳と気品に満ちたアメリカを代表する科学者であった。

鳥養元ガバナーの推薦で奨学生

私をロータリー財団奨学生に強力に推薦して下さい



ったのは、京都大学学長の故鳥養利三郎先生である。一学生を学長室に招いてロータリーに関する情報を細々と教えてくださった往時を顧みるとき、しみじみと有り難く、自分の今日あるのはひとえに先生のお陰であると感謝の念を新たにす。

私は大学院でのきびしい訓練にはじまり、約 10 ヶ月の財団奨学生として講演活動をつとめ、講義の出席を終え、留学の延長許可を得て最後の本格的な研究活動に向かった。この 6 ヶ月のすさまじい化学研究者の戦いに入ったのである。

夏休みも完全返上、土曜、日曜もなく実験室を歩き回った。化学実験をした人ならご承知のように、化学反応は一工程ずつ行うのが原則であり、フラスコの中を凝視しながら反応の進行を観察するのが常道とされる。しかし、困難なアルカイド母核の完全合成を目指しながら、一方で最先端の工程を選びつつ原料合成を併行させるという曲芸をやらざるを得なかった。睡眠不足に加え食事もろくにとる暇もなかった。当然のこと、体重は急速に 10 キログラム減少し、目ばかりギョロギョロしていた。

大学院にはきら星のように並ぶ教授陣と全米から集まった英才があふれていた。クリスマスが近づくと、北から巨大な寒気団がやってきてイリノイに冷たい北風が吹き荒れる。気温は零下 20 度前後でも北風が

吹くと 100 メートル歩くのも骨身にしみた。

洗濯屋のアルバイトで室代はタダ

毎晩のように午前 2 時ごろ研究室を後にして、広大なキャンパスを横切り深々たる夜気の中にひびく自分の足音を昨日のように思いおこすことがある。

洗濯屋に隣接した倉庫同然の部屋に寝起きして時々洗濯屋のアルバイトをすることで部屋代を無料にしてもらった。実験の合間を縫うようにしてコインランドリーに週 2 日ほど通い脱水した洗濯物を大型乾燥機にかけた後、各人のかごに仕分けるという超単純労働を提供した。1 時間もすれば実験が気になって大学へ取って返すという気ままなアルバイト学生を遠くから温かく見守ってくれたのがホッキングさんその人であった。

しかし、再び化学教室 208 号室に戻れば、修業僧よろしく縮合反応と接触反応の進行をチェックしながら一方で真空蒸留と再結晶を同時進行させるという芸当もやってのけた。濃硫酸や 40% 過酢酸といった物騒なものを大量に扱う時だけは、魚河岸のあんちゃんを着るような黒い前掛と防護眼鏡を使った。

危険な実験は度々試みていたので慣れているつもりが、あるとき固体の青酸カリを使ったが反応せず、やむなく液体青酸のボンベから青酸を直接とりだす

破目になった。生まれてはじめて見る液体青酸は、ほとんど無色透明ながらかすかに青味を帯びているように見えた。ひと吸いである世に運び込まれる代物をへっぴり腰で扱ったのはいうまでもないが、気がつくと 10 人程の院生は一人を除いて全員退去していたのには驚いた。

### 危険きわまる実験の日々

顧みて、すごい時代だったと思う。今はアメリカの化学者で土曜、日曜に研究室に出かける者は少ない。同僚としてまた畏友として多くの教訓を残しベンは、私より半年早くイリノイを去ってカリフォルニア大学へ移り、ドナルド・クラム教授（1987 年度ノーベル化学賞受賞者）の協同研究者を経て、現在はニューヨーク大学教授として発癌機構の解明で世界的名声を博している。

このように書けば、いかにも成功の涙物語のようであるし、当時の自分がよく耐え抜いたと思わぬでもない。

しかし苦しみや困難な渦中にある本人は、無我夢中で曙光を求め、暗いトンネルの中を急いでいるようなものである。とりわけ私どもの世代は戦乱と敗戦の中で異常な体験を積み重ねた。いわば人生の原点に「飢えと貧困」をもつ時代であり、これ以上没落すること

はないという開き直りの姿勢があったと思う。

イリノイ大学における奮闘はこうした意味で苦しみの中で希望を、闇の中で光を求め続けた修行の時代といっても言いすぎではなかろう。

近ごろ年をとるにつれて寝覚めが早くなる。朝の4時半には新聞少年のバイクの音が聞こえる、ご苦労だなどと思う。朝3時半に起きるのは辛かろう。何人かの福岡大学の学生もいるのだ。自らの糧を自らの勤労で稼ぐ諸君よ、くじけないでしっかりやれよと声をかけたくなる。

しかし、私は彼ら新聞少年について基本的に心配していない。なぜならば、苦難は人を鍛えるのみか他人に対する思いやりの心を植え付けてくれるからだ。物質的に充ち足りて人生に退屈している人間の方が、よほど危なっかしいのではないだろうか。

1954年2月サンフランシスコからウイルソン号の3等船客となって帰国の途についた。大学町のローカル鉄道の駅で、20人ばかりの日本人留学生の見送りを受けていると、発車間際になって洗濯屋のホッキングさんが人波をかきわけて近づいてきた。

今しがた洗濯屋の前で別れの挨拶を済ませたばかりの私が何事かといぶかっていると、ホッキングさんは人目につかないように100ドル紙幣をにぎらせようとする。固辞する私に彼は小声でささやいた。「旅

には何かと金がいるものだよ。心配いらない、とってくれたまえ。もし余ったら日本の真珠を少し送ってくればいい。店を手伝ってくれて有難う。助かったよ、じゃ無事でな。さよなら！ セイジ」

見れば彼の青い目に涙が光っている。それだけ言うと彼はさっと日本人の見送りの人の最後列に戻って行った。

走り出した列車の中で、私は彼の言葉を反すうしながら、あふれ出る涙をぬぐわねばならなかった。

本当のところ私は帰国用の鉄道と船の切符以外の余分のドルは持っていなかったのだ。それを見透かすように彼は車を飛ばして隣町の駅まで駆けつけてくれたのである。

帰国して京大に職を得た私は、最初の2ヶ月の給料で真珠を買って彼に発送した。ホッキングさんは高等教育も受けていない平均的なアメリカ市民である。その彼が平素は押し付けがましい親切もしない代わりに、見て見ぬふりをしながら私の苦闘振りを察知していたのだろう、そして、最後の別れで見せたさりげない親切—私は国境を越えて人が人を助けることを当然とするよきアメリカの伝統に感動を覚えると共に、専門分野で得た知識に劣らぬ勉強をさせてもらい、青春の思い出の地アメリカ大陸をあとにしたのである。この話しには後日談がある。私は3年後に渡米し、ホ

ツキングさんを再訪した。彼は、3年前と同じように洗濯屋のカウンターにもたれて訪れる学生たちと屈託のない会話を交わしていたが、思わぬ再会に手を握り合ってお互いの無事を喜び合った。それから月余、彼は心筋梗塞で突然逝ってしまったのである。

### 無償の行為がロータリーの素晴らしさ

個人にしても国家レベルにしても他人を助けるのは大変むづかしいことである。助けられるよりむしろ助ける方がむづかしい。私はそのノウハウをイリノイ州の大学町の洗濯屋の主人ホツキングさんから学んだように思う。

「ごちそうをするときは、お金持ちや地位の高い人を呼ぶ代わりに貧しい人、病める人、しいたげられた人をよびなさい。この人たちはごちそうのお返しすることができないからあなたの行為は尊いのだ」という意味の言葉が聖書に記されている。

私どもは、提供した労働や技術に対して正当な報酬を要求する。それは当然のことで近代社会はこの契約で成り立っている。しかし一方で無償の行為の尊さがどれほど人々を力づけ、励まし、奮い立たせ、この世を動かしてきたかということも決して忘れてはならないと思う。

私がロータリーとロータリアンを素晴らしいと思

うのはこの点である。

ガバナー時代の千宗室さんが一期一会の意義をし  
ばしば強調されたことを思い起こす。

ロータリアンは、無償の行為、お返しを求めない奉  
仕活動が続けるが、実はそのお返しは 100 倍、1000  
倍にもなって世の中を潤しているのである。

私がここで記した忘れえぬ人一鳥養先生、アダムス  
教授そしてホッキングさん一どの方々も無償の行為  
をごく自然に自らの生活の中に取り組んでおられた。

その故にこそ私の鈍い心はゆさぶられ、生涯を変え  
るような影響を受けたのではないか。私は今も「右手  
のなすことを左手に知らさない」で無償の奉仕を続け  
る多くのロータリアンを知っている。

この精神が続く限りロータリーは永遠に人々に訴  
え続けるであろう。

私は、宮野成二先生の“イリノイ大学 208 化学研究  
室”を読むたびにロータリー財団奨学金制度や米山奨  
学会が、異国の地で苦勞しながらも専門分野の勉強を  
して知識、見識を深め親善大使として交流を通じ、相  
互の理解を深めることを目指す価値ある事業であると  
認識していたが、それだけに留まらず若い頃に言語、  
習慣の異なる国で一生懸命に努力することで、苦しみ  
の中に希望を、闇の中に光と楽しみを見出すことで強

い人間性が磨かれていく。苦難は人を鍛えるだけでなく他人に対する思いやりの心を植えつけてくれる。物質的に充ち足りて人生に退屈している人間の方が、よほど危なっかしいのではないだろうか。このように、経験された方たちの話に耳を傾けることで、奨学事業についてまた別の面の素晴らしさを知ることができるであろう。

さらに、ロータリーの無償の行為の尊さがどれほど人々を力づけ、励まし、奮い立たせ、この世を動かしてきたかということを決して忘れてはならないと思う。

ロータリアンは無償の行為、お返しを求めない奉仕活動が続けるが、実はそのお返しは 100 倍、1000 倍にもなって世の中を潤しているのである、の言葉にロータリアンは大いに励まされるではないか。



# 18

「サンガイ・ジュネ・コラギ」  
共に生きる  
生きるとは分かち合うこと



私がガバナーエレクトであった 1981 年、ブラジルのサンパウロで開催された国際大会に参加した。

大会第 1 目の記念講演で、「国際理解と平和賞」を最初に受賞された岩村昇博士の講演があり続いてマザー・テレサ氏の特別講演という素晴らしいプログラムが組まれていた。

私は岩村先生の素晴らしい話を聞きながら、1982～83 年度、私が主催する年次大会の基調講演を岩村先生にお願いし、大会参加者にこの感動の話を聞いてもらいたいと思った。

私の念願がかなって、大会 2 日目、1983 年 4 月 16 日に岩村先生の基調講演を参加者に聞いていただくことになった。

岩村先生は、「人類は一つ、世界中に友情の橋をかけよう！という向笠広次 RI 会長のテーマの映像を見ながら考えました。最初に相愛オーケストラの音楽を楽しませていただきながら、バイオリンはバイオリン、ビオラはビオラ、チェロはチェロの音色と、各自各様の特徴ある音を調和させ、認め合った上で、コンダクターがいらっしやいます。ロータリーも各自の特徴を調和させ、生かしながら素晴らしい活動を続けていらっしやる。その中心に国際ロータリーの会長さんがコンダクターを務めておられるのではないかと思うのです。

昨夜遅く大阪駅に着きましてタクシーに乗り「ロイヤルホテルへ行ってください」と言いますと、作務衣と地下足袋の風体をジロジロ見ながら「おじさん、本当にロイヤルホテルにとまるの？」と心配してくれましたが、ロータリーの皆さんのお陰で立派なホテルに泊めていただき、旅の疲れも癒させていただきました。

さて、一昨年サンパウロに招いて頂き、ミスター岩村とお母ちゃんにも飛行機の切符を送っていただきまして、2人で楽しめなかった新婚旅行を結婚28年目に楽しませていただきました。

明日は世界中から2万人のロータリアンとミセスロータリアンの前で大切なお挨拶をしなければならぬ。そのリハーサルが9時半からあるということで舞台の裏に参りましたら、日本の有名な銀行の元頭取とか、文献の中で尊敬しておりました有名なアメリカの名誉教授とかが、気軽に私を迎えてくださりましてお世話をさせていただきました。私はロータリーの皆様から「奉仕とはこういうものだ」と教えていただいた思いがいたしました。

大会当日、リハーサルがたいへん気楽にできたものですから、本番で気楽に話し過ぎまして時間をオーバーし、真打のマザー・テレサの時間に食い込んでしまいました。

申し訳ないとの思いで舞台裏に帰りますと、マザ

一・テレサはすくっとお立ちになって、働きとおした大きい手で私の手を包んでくださいました。“You Well done”（でかした！）と人生の大先輩から励ましていただいたのです。多くのロータリアンが寄ってきて「岩村さん、よかったよ！」と言ってくれるので、私はついうっかり自分の英語が通じたのかと思っていましたら、お母ちゃんが「あれはどう同時通訳が素晴らしかったのよ」といいます、私にとりましては世界一のお母ちゃんでございます、お許してください。

私は残念ながら心ならずも広島で原爆を経験しまして、このように立っていますと、あくる朝、小便に真っ赤な血が混じるという原爆症、傷ものでございます。

皆様より一足も二足も先に天国に帰らせて頂きますが、残る地上に命を賭けて「世界がどうか平和で健康で、またそれぞれ与えられた天分を生き生きと発揮できるような“peace, health, and human development”のために、私より困っている発展途上国の草の根の人たちに、私たちの10%を捧げましょう」というPHD運動に全力投球いたします。

20年前にネパールへ行かせていただきました。われわれ庶民はみんな歩いて旅をしています。人同士が出会いますと、手を合わせて“ナマステ”。朝会っても“ナマステ”昼会っても“ナマステ”さようならの

ときも“ナマステ”これは便利やなあと思いました。

その 10 年後、ネパールでまた学ばせていただきました。お互いに空の旅で初めて出会いますと「タバイコガラハンチャ？」（あんたの家はどこや？）と、私も聞かれたので「ジャパンだ」と言ったら「そのジャパンからここまで何日かかったか」当時、羽田からタイのバンコックで一泊し、明るる朝ひとつ飛びで「あ、1 日半です」と応えると、「なに？ たった 1 日半？ うちの嫁の里より近いじゃないか」と。これは素晴らしい人生観、世界観だと思いました。

さて、ネパールへ行って驚いたのは、人口約 1000 万人に対してお医者さんが 80 人しかいませんでした。歩いて 3 日以上行かないと医者顔が見えない、というのが当時のネパールの無医村の定義でした。

そのような無医村地帯に全人口の 90% が住んでいる。このような地域では、日本ではかからなくてもいい結核にかかり、日本では死ななくてもいい結核で死ぬ人たちがいらっしやる。

私はすごい経験をしました。あるとき、山の上にある私どもの小さな病院のクリニックに一人の赤ちゃんが連れてこられまして、赤ちゃんの頭を見ると血がこびりついているのです。「どうしたんですか」と聞くと、お母さんが赤ちゃんを自分の胸に抱いて、3 日 4 日 5 日と歩いて山を越えまして、私の病院に辿りつ

く寸前にドボツと血を吐いてしまいました。レントゲン写真を撮ってみますと、結核菌に食い破られた肺に7つの空洞が空いていました。ネパールの看護婦さんが一生懸命に看病し、手を尽くしてくださったのですが手遅れでございまして、入院3ヶ月目にドーンと咯血して、可愛い赤ちゃんを残したまま、天国へ帰ってしまわれました。

「お父ちゃん、お医者さまでしょう？」のお母ちゃんの一言でわかりました。

日本男児は奮い立ちまして、病院を後にしまして…病院で待っているはこういう手遅れの患者ばかりですので、山を越え川を渡り、村から村へ少しでも早く、結核患者をその生活の現場で発見することができましたら、いい薬があるのですからそれを届けることができれば遠い病院に来なくても治るんです。結核で死ななくてもいいことを1人でも多く知ってもらいたかったのです。

このような巡回診療の途中、ある村でおばあさんが倒れていました。話を聞くまでもなく結核とわかりました。若い日に、世界の人口割にして結核がいちばん多いインドの都市に出稼ぎに行き、爪に火をともしような生活をして、稼ぎ貯めたお金をもって村に帰り、それで嫁入りができて子供ができた。娘が嫁にいて孫ができた頃からぜいぜい喘息のように…。おばあ

さんの 20 年の歴史を聞いただけで検討がつきます。病院に連れて行ってあげなければ、咳をするたびに 10 の 8 乗（10 億）の生きた結核菌がおばあさんの手の届く範囲にパッと散らばって孫たちに感染します。またおばあさんの命も助からない。日本では電話一本で出前迅速と救急車がやってきますが、ネパールの山の中では電話も電気もないのです。

明るる朝、おばあさんを病院までどうして運ぶか思案しましたが、1 人の人夫さんが通りかかり、おばあさんを自分の肩に運んでくれました。

私と一緒に 3 つの山を越えて 3 日歩いて、病院まで送り届けてくれました。「ありがとう」とお礼を言って人夫賃を払おうとしますと、その人夫さんがどえらく怒るんです。「おまえさんはわしと一緒に 3 日も旅をしながら、まだわしがわかったらん。わしがこの 3 日間、おばあさんを担いだのは金儲けしようと思ってかついだんじゃない」と申します。「じゃあ、一体、何の為に？」と聞いた私に伝えてくれた彼のネパール語を、生涯忘れてはいけないと私の胸に刻み付けました。「医師として、いやそれ以前に人間として、このような人生の旅路を選ばなければならないんやなあ」と学ばせていただいたのです。

人夫さんの言ったその言葉は「“サンガイ・ジュネ・コラギ”」で、サンガイは「共に」、ジュネ「みんなで」、

コラギは「生きる」で、『共に生きるために』という言葉に岩村先生は大変感激して、誰にでもこの言葉をお裾分けしたいと思われたそうである。

岩村先生にとって何よりの教えとなったのは、目の前をおばあさんを担いで汗みどろになって3日間、3つの山を越して私と一緒に旅をしながら自分の後ろ姿で、私に教えてくれた青年の生きざまでありました。その青年が一文も取らずに去っていく足元を見て胸を突かれました。

青年が身につけているものは、一体、何年前に買った作業着か、もうぼろぼろになっていました。物質的に豊かになっている岩村昇や日本の若者のなかにはなくなっていたのです。理屈ではありません。難儀をしておられる方がいたら、さっと気軽に手をだす、時間を出す、ポケットマネーの10%もお役に立たせていただくことが私達にできる「共に生きる 生きるとは 分かち合うこと」になるのではないのでしょうか。

さて、皆様からお寄せいただきましたPHD基金でもって、ネパールから2人の農業青年、フィリピンから農業青年と漁業青年を呼びました。このPHD—自分の村づくりの中で貧乏から開放させるための技術を日本で習い覚えて、みんな仲良く暮らせる平和な村、そしてみんなで健やかに暮らせるような健康づくりをする人材を育てるPHD研修のすばらしさ、ロータ



リーの皆さんが PHD 研修生をホームステイさせていただきだけでなく、1年間つきっきりでアジアの弟たちの面倒を見ていただいています。ホームシックになれば、“明治の乙女”おばあちゃまが肩を抱いて慰めてくれたそうです。「岩村先生、ありがとう。私にはネパールの孫ができましたわい」と、丹波の“明治の乙女”が喜んでくださっております。

私は2年前、サンパウロでお約束しました誓いをもう一度立てさせていただきます。私は、あなたさまよりも一足先に天国に帰らせていただきますが、私はこの地上に残る命を全力投球いたします。そしてアジアと南太平洋の草の根の人たち、私たちより弱い人達のために、その人たちと仲良く健やかに生き生きと21世紀をつくるために10%を捧げるPHD運動に全力で投球いたします。

皆様ご清聴ありがとうございました。

私は、サンパウロの国際大会で拝聴した岩村昇先生の「サンガイ・ジュネ・コラギ」（共に生きるために）の講演の感動を忘れることはできない。

幸いも1983年、私が主催した地区大会で岩村先生にお越しいただき、再度感動をいただくことができたことは、この上もない喜びであった。また、地区内の多くの参加者にも感動のお裾分けができたと思う。

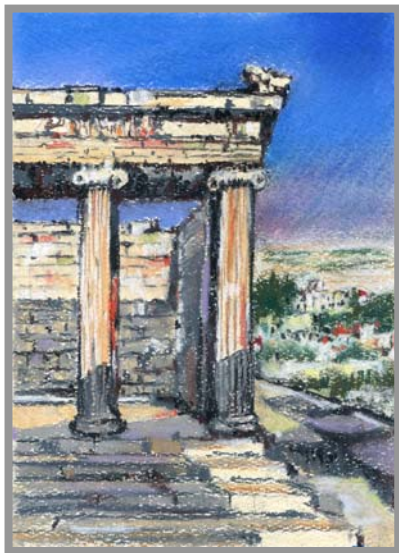
世界で最初に「国際理解と平和賞」を受賞された岩村先生の「共に生きる、生きるとは分かち合うこと」について多言を要さないが、「思いやり、助け合い、分かち合いの心」がロータリーの基本であるところから、岩村先生の話の中にある“貧しい人夫さんの言行”に啓発されることが多かったのではないだろうか。

最後に「参加クラブ代表の挨拶」を、大阪ロータリークラブ会長、目代渉さんから頂いた、「岩村先生の、大会を締めくくるに相応しい胸を打つ素晴らしいお話を聞かせていただきました。昨日、本日とたいへん勉強になりました。また明日のロータリーの活動に大きい指針を与えていただきました。いよいよ明日からのロータリー活動に一層活発な活動をされますことと、重ねて戸田がバナー、地区大会の準備に尽くされましたホストクラブの皆さんに、もう一度盛大な拍手をいただきますようお願いいたします」

そのときに頂いた、会場が割れんばかりの大きい拍手の響きを忘れることはできない。

# 19

“Kindle The Spark Within”  
「内部に火を燃やせ」



1962～63 年度の RI 会長は東洋から初めて選ばれたインドのニッチシ・ラハリーさんであった。

私は 1962 年 2 月 36 才で八尾ロータリークラブに入会したが、大阪の市内に事務所があったので、地区の会合によく代理で出席させられたものである。

私が副幹事するとき、幹事の代理として新大阪ホテルで開催された第 365 地区の「会長、幹事懇談会」に代理出席した。福井、滋賀、京都、奈良、大阪、和歌山の各ロータリークラブから集まった次期会長、幹事の皆さんは、「RI 会長のテーマ、地区ガバナーの方針」を真剣に学ぼうとの熱意が漲っていた。

当年度の地区ガバナーは関西電力の副社長、後に阪神道路公団の初代総裁に就任された大阪南ロータリークラブの森寿五郎さんであった。私は、代理という気楽な気持ちで参加したこともあり、40 年前の雰囲気はすっかり忘れてしまったが、不思議なことにラハリー RI 会長のスピーチのある部分が不鮮明ながら脳裏に焼き付いている。

“Kindle The Spark Within” [内部に火を燃やせ] は、私がロータリークラブに入会して始めてテープを通して聞いた RI 会長のスピーチであった。

薄れゆく記憶を辿れば、「我々ロータリアンはみな、世のため、人のために奉仕したいという意欲をもっている。それを持っているが故にロータリーに飛び込ん

だのだ。どうかこの尊い火種を立ち消えさせることなく、さらに燃え上がらせていただきたい」と呼びかけられ、「この火の光によって奉仕の理想に向かう大道を煌々と照らし出そうではないか、この火種は誰の心の中にあるものなのだ」と話され、一つの逸話を披露された。もう 40 年以上も経っているので間違いもあるかと思うが希薄になった記憶を辿って披露したい。

### ラハリ一会長の話

第 2 次大戦が終わり、戦争の余波を受けたヨーロッパの村々は疲弊の極にあった。ある山あいの村も例外ではなく、畑は荒廃し、撒く肥料もなく、食べるものとして雑草をとって食べるしかなかった。人は働く意欲を無くし、ただ茫然と日々を送っていた。村人の心の支えとして、永年信仰の中心であった岡の上の教会には訪れる人もなくただ荒れるがままになっていた。

村全体が静まり返り眠っているようであった。この村には立ち上がる気配が全く見られなかった。そのようなある夕方、岡の上の教会にかすかな灯が点った。村人達が教会を見上げた時、いっせいに叫んだ「あっ教会に灯がともった！」。

食べ物にだけ心を奪われていた人々にとって、それ

は驚きの灯であった。村人が忘れていた大切な心に灯がともったのである。

次の日の夕方、教会に二つの灯がともった。村人たちは「俺たちの教会は蘇った！」それから、ランプを手に教会の坂道を上っていく村人の列が続くようになった。

やがて、教会の窓には明るい灯がともり、村人たちは力を合わせて埃にまみれになった教会をきれいに掃除し、教会は昔の姿を取り戻した。村人の心に信仰心が蘇り、やがて教会から讃美歌が流れるようになった。

村人に信仰心が蘇り、働く意欲が湧き、畑を耕す手に力が戻った。村人に笑いが戻り、昔のように人と人とのつながりが強くなって多くの作物が作られ、互いに分かちあうようになった。村人たちが、昔の幸せを取り戻すのもそう遠くはあるまい。

どん底から元の幸せを取り戻すこときっかけとなったのは、村人によって教会にともされた一つの灯火であった。

**Kindle The Spark Within !** [心の中に灯を点せ]

誰もが持っている「火種」で教会に明かりを点した最初の村人は、点した火の連鎖で村全体の幸せを取り戻すことができたのである。

ロータリアンの誰もが「火種」を持っている。

自分の心に火を燃やさなければ何事も達成できないことを知っている。

私たちロータリアンは、地域社会の選ばれた職業人であり「多くの会員との友情、信頼関係を築き、人との付き合いの中から自分を磨き人格を高め、世のため人の為に尽くすこと」を目指し、毎週の例会の出会いを楽しみ、学んでいるのだ。

ラハリー会長のテーマ「心の中に火を燃やせ」は「会員一人一人の心の中にもっている、“人のために尽くそうという”とする火種に、ロータリアンすべてが火を点そうではないか」と力強く訴えられた。

この印象的な記憶は今も私の胸にしっかり残っているが、40年の歳月は私の記憶を曖昧なものにしているだろうが、私にはラハリーRI 会長が力強く言われた“**Kindle The Spark Within**”「内部に火を燃やせ」が、強烈な印象として心に刻み込まれている。

先日、自分の記憶にあるこの話しが、ラハリーさんの講演記録にあるかどうかを、元 RI 理事・菅生パストガバナーに調べていただいたが見当たらなかったそうである。しかし私にとってラハリーRI 会長の話の内容は忘れえぬ記憶？として残っているのだが、ラ

ハリーRI 会長が“Kindle The Spark Within”のテーマを説明するために、引用されたちょっとした挿話であったかもしれないと思う。

感動をもって話を聴いて 20 年後に、私が地区ガバナーに選ばれたとき、森寿五郎パストガバナーはお元気で、いろいろ御指導を頂いたことを懐かしく思い出す。

ロータリーは、一本の永い糸で結ばれた得がたい繋がりがああることを感じるのである。

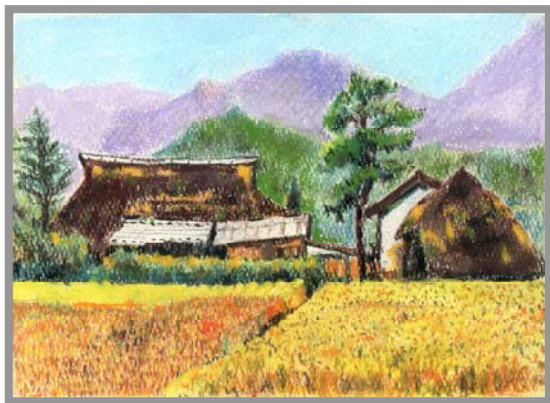
若いロータリアンが感動をもって聞いた RI 会長の話を 44 年たった現在、文章にしたいという衝動を与えるほど私にとって素晴らしい話であったことをお伝えしたい。



# 20

中高年を過ぎて知能は最高になる

(朝長東大教授の高齢者健康学より)



## 1) 脳の若さを保つ

象は長生きであることは、よく知られている。一般に体が大きい動物ほど寿命が長い。ネズミはおよそ2年半、ウサギは5~7年、馬は40~50年、象は100年といわれる。

しかし、寿命の長さが体の大きさに比例するという法則は人間にはあてはまらない。体の大きさだけからいえば、人間の寿命はせいぜい20年というところだが、実際はそれよりはるかに長生きする。

こうなりえたのは、人間の進化の過程で脳が異常に発達したことによるもので、その頭のよさで、動物の寿命の自然法則を克服したことにある。つまり人間の寿命は脳によって支えられていると言えるのである。

人間の脳が加齢によって変化のスピードは、体のほかの部分に比べると遅い。そのために、人間は動物の中で例外的に長生きできるのである。人間が長生きするために最も心すべきは、脳の若さをできるだけ長く保つことである。

## 2) 「60の手習い」は当然大切だ

かつては、人間の知能は20歳をピークにして、30歳を過ぎた頃から徐々に低下するとされていた。その低下のカーブは、老年期になると急激になり、高齢者の知能低下はある程度やむをえないこととされてい

た。

だが最近では、人間の知能のピークは青年期ではなく、むしろ中年以降に知能は成長し続けることが分っている。また、高齢者になっても長く保たれる知能や、かえって豊かになる能力もあるとされている。

そんな人間の知能の種類は、次の二つに大別できるそうだ。

その一つは、教育あるいは社会的経験によって発達する、経験の蓄積に関係する能力である。これは磨かれていく能力といってもよい。

この能力のピークは60歳ごろで、70歳代でもあまり低下せず80歳代になってようやく衰えてくる。

もう一つの知的能力は、学習や経験の影響をさほど受けない。生まれつきの能力で、新しい状況に適応する知識である。このピークは少し早く40歳頃であり、それ以後は加齢と共に少しずつ低下する。

むろん、個人差はある。だが万物の霊長である人間の脳は、そう簡単にトシをとらないようにできている。

だから私たちは中高年になっても、もっと自信を持っていい、「60の手習い」は当たり前、みんながやるべきことなのである。

3)ロータリアンは「60の手習い」「80歳の手習い」

「60の手習い」が自分の脳を長く良い状態にするために大切なことは分っても、具体的にどうすればいいのか？

それには毎週規則的に多くの選ばれた人と目的をもって集い、楽しみ、友情を温め、寛容な心を育み、人のお役に立つ奉仕を実践し 感動を得、正しい職業観を学び自分の事業経営に生かすというロータリークラブでの「60歳の手習い」がある。

毎週の例会出席を続け、健康と、信頼と、楽しみと、安らぎのなかで「楽しみもって患いを忘れ、老いのまさに至らんとするを知らず」の境地を体感できるのはロータリークラブのまたとない特性なのである。

毎週決まった場所、決まった曜日の決まった時間に食事を共にしながら、多くを学ぶ場所は他に見当たるまい。ロータリークラブこそ「60の手習い」「80の手習い」を着実にこなす為の理想的な集いだと思っている。

かくいう私は、入会46年目を迎え81歳を越えた。今も毎週の例会で親しい仲間との気兼ねのない語りや、大いに笑うことで気分爽快になるロータリークラブの例会を楽しみにして欠かさず出かけている。

#### 4) ボケやすい人、ボケにくい人

人生 50 年といわれた昔に比べ、今や人生 80 年といわれる時代になった。私たちは生きる時間が 30 年も延びたことになる。

生きる時間が長くなると、それだけ自分の人生をより素晴らしいものにすることができる。仕事にせよ、勉強にせよ、趣味にせよ、長期の計画でより高い目的を立て、それに向かって楽しむことができる。考えてみれば、ありがたい時代に生まれ合わせたものだ。

そのために肝心なのは、頭の若さも 30 年延ばすことだ。いくら長生きしても頭や精神の若さが伴わなければ、人生の索漠たる時間が延びたに過ぎない、そのことだけは避けねばならない。

京都の堀川病院の早川博士は、豊富な治療体験をもとに「こういう人がボケやすい」という 6 種の性格傾向を挙げておられる。

- ①他人の言い分を聞かず、自己中心にしか物事を考えられないガンコな人。
- ②すぐに腹を立てて、怒鳴ったり イライラする短気な人
- ③仕事だけに打ち込んできて、楽しみを持たなかった無趣味な人
- ④他人と和せず、人の輪に入れない孤独な人。
- ⑤人を信じられず、物にしか頼れない人

⑥笑わない人。

だそうだ。

「ボケにくい性格性向の人」には次の6項目をあげておられる。

①本や新聞をよく読む人、(情報を常に頭に入れる人)

②物忘れを気にしない人、(気にする人はストレスが高まる)

③文章を書いたり人前で話したりする機会の多い人  
(人間の精神的能力のトレーニングになる)

④他人の世話をよくする人。(他人への思いやりをもつことが大切)

⑤感動を忘れない人。(感動は脳を活性化する物質が分泌される)

⑥いくつになっても生き甲斐を求め、気持ちの張りを持つとうとする人。(生き甲斐は、自分の努力で見つけるもの。おしゃれをすることも大事だ)

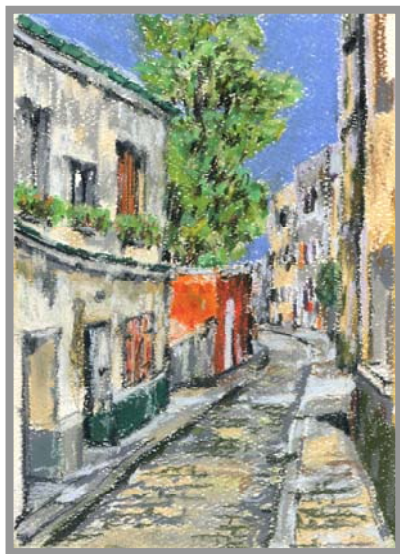
佐藤千寿パストガバナーは、著書 [ロータリーは人を作る] の中で 1974～75 年度 RI 会長ウィリアム R・ロビンス氏の言葉を引用され「ロータリーの第1の仕事は人を作ることである」一人を作る、これ以上の大きい奉仕が外にあるでしょうか。人作りは金の問題ではない、心の問題なのだ」と述べておられます。

ロータリーの人作りは、「芋の子を桶にぶち込んで

かき廻す様なものでいいのだと思います。芋と芋とがお互いにこすり合って、自然に黒い皮がむけて綺麗になる—そのかき棒にあたるのが、ロータリークラブの計画する様々な奉仕活動であり、擦りあうのはロータリアンどうしなのです。ロータリアンが互いに磨き合って人間性を高めていくことが、引いては『ボケにくい性格、性向の人』を育てていこくことになるのです。」

# 21

## 会員へのメッセージ





1) エドワード・カドマン氏の言葉(1985～86年 RI 会長)  
“You are the Key” 「あなたが鍵です」というテーマを掲げられた。

誰もが、この世の中を変えようとしてロータリークラブへ入ったのではありません。大部分の人は仲間が広がる機会を求めて入会したのです。ロータリーの深い影響はゆっくりとやってきました、私たちは、ゆっくりその精神に身をひたしていったのです。

「ロータリーの精神は一口では表現しにくいけれども、友情、地域社会への努力、あらゆる人の職業の理解、仲間への友情を含むものであります。入会は派手なものではなく平々凡々としたものでしたが、徐々に変化が起こり、単なる人であることから、ロータリアンへの変身が始まりました。当たり前前の酔生夢死の生涯から、意義ある運動を援助する方法を見つけ出した生涯へと移っていったのです。超我の奉仕について学び、信じた時に、善の網に取り込まれました。ロータリアンは生まれるものでなく、かくして作られるものなのです。ロータリアンに変身していくゆっくりとした過程そのものに、大きな価値があるのです」と教え、

「ロータリーに注ぐところが大きければ、そこから得るところも大きい」また、「ロータリアンとして歳月を重ねると、そこから受ける人間的温かさと愛情、これはロータリーに尽くし得ることより圧倒的に大

きなものであることが分かって参ります」と述べ、「温かい人柄になれることが一番大きいのだ」と永年の経験からロータリーライフの本質を語っておられる。

要するにロータリーは仲間を愛する人間になるための場所で、だから、毎週の例会で多くの仲間との出会いが大切なのだ」と例会の大切さを語っておられる。

## 2) 孔子の理想主義とロータリー

孔子は自分の性格を「楽しみ以って憂いを忘れ、老いのまさに至らんとするを知らず」と述べている。

「世の中には憂いのタネも、楽しみタネも両方あるのだから、これは仕方がない。憂いのタネを無くしようとしても無理だから、むしろ、楽しみタネを大いに拾い集めて憂いは忘れてしまい、年のとるのも忘れるほどだ」と語っている。

ロータリーもそれと同じで人生を肯定し、人の善意を信じ、汚れた世の中にあっても理想を捨てず前向きに積極的に生きようという、そういう理想主義で貫かれているのだ。私なども楽しいロータリーライフをおくっているうちに、大変な年になるまで気がつかずに忘れていた。このように見ると「論語」とロータリーとの共通した心の姿勢が見えるではないか。

3) 心を開いて友人をつくり、活力ある社会を  
(1986年地区大会・東大教授 木村尚三郎氏)

①心を開いて友達をつくろう。

さまざまな集会に参加する意義は、友達が出来ること。いろんな問題が出れば相談しよう、研究会をやろう。それには広い人脈をもつことが世の中を切り開いていくために非常に大事な時代になっています。

修道院でいちばん大事な場所のひとつは、食堂です。修道士が一堂に会して食事をすれば、たとえ沈黙の時間であっても、お互いに心が開け、兄弟である実感がわいてきます。

②知恵は暇から生まれる

私たちの暇とは、忙しい時間の中で毎週 1～2 時間をさいて、自分自身の時間を持つことです。ロータリークラブでよく開かれるシンポジウムは、ともに酒を酌み交わすことなのです。

シンは「ともに」、ポーシスは [飲む] で、ギリシャ人は酒を酌み交わし、学問、芸術、スポーツなどあらゆることを話し合いながら知恵を出してきたのです。スクール、スカラーは、ギリシャ語のスコールからきていて、暇のことです。暇をつくり、心を楽しませながら会話をし、食べたり飲んだりすることで、本当の知恵が生まれるのです。

ギリシャ、ローマ以来、優れた学問や芸術を生んできたのは、暇のある人たちでした。

リッチという言葉は、単にお金持ちというのではなく、自分なりの時間をもって絵を楽しむ、スポーツに励む、自分を磨く、あるいはロータリーで活躍する、ということではないでしょうか。自由な時間を持ち、知恵を大切に、ということが今後を生きる上で大切でありましょう。

このような論説を読むにつけてもロータリークラブの中にある要素・・・友情、自己研鑽、人の為に尽くす、知恵を出し合う、相談してよい方向を目指す、学ぶ、伝える、笑う、共に行動する、などなど、ロータリーが私たちの人生に大きい役割を果たすものであることを強く感じるであります。

#### 4) ロータリーへの私の道 (My road to Rotary)

1945年ポール・ハリスが亡くなる2年前に「ロータリーへの私の道」を書かれた。副題として「ある少年の物語—バーモントの田舎—そしてロータリー」という自叙伝である。

イギリスを脱出したピューリタン（清教徒）たちが初めて住み着いたニューイングランドと呼ばれた地方がポールが育った所である。

ポールは、農村の生活、山や川、汽車、緑の丘、い

つも友達と泳いだ懐かしい池、温かい村人たちを回想し、けがれを知らない心、寛大な心、人種や宗教で差別しない心、なにごととも良いほうへ解釈する心、友情に敏感な心、これらが少年時代の心であったと書いている。

行き交う人ごとに「やあ」と声をかけ、家へ帰れば祖父母と真面目な暮らしが営まれている。ポール・ハリスは青年弁護士になり、大都会シカゴにやってくると、そこには人、人、人の暮らしがあったが、互いの心は砂漠のようだったと記されている。

1905年ポール・ハリスは人情を求めている人たちを仲間にしてクラブを創ったのがロータリーのスタートであった。

その後、ロータリークラブの輪は急速に広がっていくが、大きくなったのは、心のオアシスを求める人が多かったからである。クラブが成長するにつれて、何か世の中の為にいいことをしようという気持ちで活動したのが社会奉仕の始まりであった。

ロータリークラブはフエローシップ、友達を求める気持ちが大切で、仲間を呼び合う心は、田舎時代の少年の心であった。

ロータリーの「奉仕の理想」にある理想とは、私どもが憧れる“天空に輝く星”というよりも、むしろ胸中に宿って私どもを行動に駆り立てる志であると言

えるのではないか。

ポール・ハリスの語る少年 (a boy) もそのような性格であったのだろう。

人は、より善く、より高くという気持ちを常に抱き、魚が流れに逆らって上ろうと絶えず鰭を動かしているのと同じように、人も絶えることなく善意に向かって鰭を動かしているであろう。

“善意を持って人の為に尽くす奉仕の道は、大小いろいろあるが、何れにせよ私たちの世界は明るい希望にむかって歩んでいる” そういう「少年の心」が大切なのだ。

ポール・ハリスは、「ロータリーが個人を向上させる方法の一つは、彼の中に童心を保存せしめることである。およそ善良な人の胸底をさぐれば、そこには必ず常に童心がある。年の移り行くと共に童心は影を潜める。」

しかし、その頭脳に弾力をとどめる間、他の友情に応える心を持つ間、人は決して老い朽ちぬであろう。人を発展せしめ、長く童心を生かさんとするもの、これロータリーである。」と教えている。

司馬遼太郎さんの風塵抄の中に「高貴なコドモ」という一節がある。

「菜の花の沖」の主人公、江戸時代の航海者で商人の高田屋嘉兵衛は12歳で隣村の商家に奉公した。普

通は世間に早く出すぎると、自分の “コドモの部分  
が干からびてしまう” しかし、人間は幾つになっても  
コドモの部分の胎蔵していなければならない。「人間  
は終生、その精神の中にコドモを持ち続けている。た  
だし、よほど大切に育てないと、年配になって消えて  
しまう。」嘉兵衛は、一念発起して商家をやめ、自分  
で商売を始めるべく、操船技術を真剣に学び、気象や  
潮流にも熟達し、激流が渦巻く国後、択捉間の水道を  
航海できる特別の航行法を着想したのは、嘉兵衛の豊  
かなコドモの部分であった。

想像力と創造力は、オトナの部分の働きではなくコ  
ドモの部分の働きである。嘉兵衛の偉大さは、12歳  
で世に出ながら、年配になっても、コドモをみずみず  
しく保ち続けたことである。

いい音楽を聴いて感動するのもコドモの部分であ  
り、小学生の誰もが担任の先生を尊敬するように、他  
者の偉大さを感じるのもコドモの部分なのである。ポ  
ール・ハリスの “個人を向上させるには童心を保つこ  
と” と司馬さんの “精神の中に豊かなコドモを胎蔵す  
ること” とは共に人を発展向上させるための最も重要  
な要素が示されている。

ポール・ハリスの言葉 [ロータリーが個人を向上さ  
せる方法の一つは、彼の中に童心を保存させることで

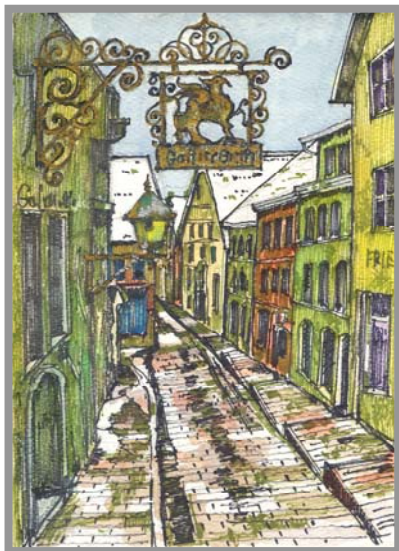
あるが、年とともに童心は影を潜める。しかし、頭脳に弾力をとどめる間、他の友情に応える心をもつ間、人は決して老い朽ちぬであろう。人を発展せしめ、長く童心を生かさんとするもの、これがロータリーである」と教えているように、いろいろなことに関心をもって永くロータリーライフを送る間に、友情を育み 人のために尽くし 活動的で健康な生活をおくることができるのであろう。

私は、足かけ 47 年のロータリーライフを振り返るとき、毎週、親しい友人と食事を共にし、大いに語り、大いに笑い、人のお役にたつ奉仕を考え、下手な俳句を作り、調子外れのコーラスを恥ずかしげもなく歌う。少々のご事は赦し合えるかけがいのない友人が沢山いる。ポール・ハリスのいう少年の心を保ち、年配になっても老い朽ちず 楽しく健康でコドモの部分を大切にすろロータリークラブの会員である幸せに感謝を捧げたい。



# 22

## 「我が自叙伝」 「四つのテスト」の創作と 有用性について



1991～92 年度、第 2550 地区大会が宇都宮文化会館で開催され、大会史上最高の 4000 人の登録を得て、ラジェンドラ K・サブーRI 会長の代理としてウィリアム T・サージェント氏を迎え、辻ガバナー主催の年次大会は 4 月 4～5 日に盛大に行われた。

私のガバナー年度の RI 会長、向笠広次さんと、向笠年度の RI 副会長をつとめられたサージェントさんが本大会に RI 会長代理として揃って参加されるという素晴らしい年次大会であった。

私が宇都宮の大会に参加したのは、元 RI 理事の菅野多利雄さんがコーディネーターを務められ、第 2500 地区の道下俊一パストガバナーと第 2660 地区の私にパネリストをつとめてほしいとの依頼があったからである。

「ロータリーからの挑戦」という題のパネルディスカッションがはじまり、菅野コーディネーターは、「只今から“ロータリーからの挑戦”の話を進めてまいります。きょうは、戸田パストガバナー、道下パストガバナーという日本のロータリーで最も囑望されているパストガバナーでございまして、私のあとゆっくり 道下節、戸田節を聞いていただきたいと考えております。・・・」と過分の紹介をいただき、私のガバナー年度の RI 会長、副会長の前でのディスカッションは冷や汗ものであったことを思い出す。

この大会で、特記すべきことは、コーディネーターを勤められた菅野多利雄さんが、本大会に参加された会全員におみやげとして、第 50 代 RI 会長ハーバート・テラー氏の著書「我が自叙伝」を翻訳され、文庫本タイプの「我が自叙伝」を参加者全員に贈られたことである。

私は今も大切に読ませていただき、「四つのテスト」が誕生した経緯や、テラー氏の事業経営にかける基本的な精神などを学ばせていただいている。この章は、パネルディスカッションの顛末ではなく「我が自叙伝」に焦点をあてて記すこととした。

ハーバート・テラー氏は、海軍時代の上司であるモーリス・カーカー氏がシカゴのジュエル・ティー紅茶販売会社の社長をしておられた時に、自分の会社に来ないかと誘われシカゴに戻って同社に務めることになった。

彼は、セールスマン時代に多くの体験を積んだお陰で、早く昇進することができた。彼はセールス時代に得た経験から「他人に思いやりをもって尽くすことは、一生懸命に働くことと同じように、良い市民生活を送るばかりではなく、結局は大きい報酬となって自分に返ってくるものなのだ」という信念が、年を経るにつれて強固なものになってきたと語っている。

ジュエル・ティー会社でのテーラーの昇進は早く、本店支配人、社長補佐。1929年には社長カーカー氏の次に位置する取締役副社長となり、年収は3万3千ドルに達した。

その時点で彼は次期社長候補になっていたが、あるときシカゴのコンチネンタル・ナショナル銀行の副社長が、カーカー社長に「テーラー氏の時間を半分割いて、クラブ・アルミニウム製品会社の再建に手をかしてもらえまいか」と頼み込んだ。

銀行家は、テーラーがジュエル・ティー社の生産部門の責任者として素晴らしい業績をあげていたので、弱体化したクラブ・アルミニウム会社を破綻から救い、従業員250名の職を守ってくれるに違いないと判断したのであろう。

1930年は、大恐慌の苦しい日々が続き何百万人が職を失い、会社はいたるところで破綻に瀕し、銀行さえ安全ではなかった。

カーカー社長は、テーラーが時間の半分を割いてクラブ・アルミニウム会社出働くことに賛成してくれた。テーラーは自分の選んだ数名のスタッフと会社に乗込み、資料を集め、訴訟案件を調べ、40万ドルの借金があることを掴んだ。

どうみても荒涼たる光景であって、大多数の意見は会社の閉鎖であった。そこで働く人の職を確保するこ

とは無理のように思われた。社長のカーカー氏はテレーに早く戻って来いと言ったほどであった。

しかし、テレーの心の内に、ジュエル・ティーに戻って3万3千ドルの年俸を得るのと、クラブ・アルミニウム会社に無報酬で留まることを比べ、「神が本当にお望みなのは、ここに留まることではないか」と神に長い祈りを捧げた。第2の人生をまっとうするために、会社の経営方針を自分の手で決められるようになれば、今より数倍の時間を神の御奉仕のために使える。そこで私は、神に導かれているのだという確信を強めた。

そして、将来への不安はあったが、待ち受けているやりがいのある仕事に益々情熱を燃やし、ジュエル・ティー会社に辞表を出し、自分名義のジュエル・ティー社の株式を担保に6100ドルの借金をして法人組織を再編し、年俸6000ドルでクラブ・アルミニウム製品会社に留まることになった。

#### 四つのテスト

テレーは、第一にしなければならないことは、どんな商売をするにしても欠かすことのできないことだが、高邁な倫理・道徳に基づく会社の方針を固めることであった。必要とするのは、簡単に覚えられる行動方針—倫理の物差しであり、誰もが暗記でき、取引

にあたって考え・言葉・行いすべてに応用できる倫理規準が必要であった。

テーラーは、全てをお見通しの全能なる神に委ねることにした。神に深い祈りを捧げ、暫くして頭を上げ、紙に手をのばして書き留めた。

“真実かどうか みんなに公平か

好意と友情を深めるか

みんなのためになるか どうか “

彼ははこれを「四つのテスト」と呼び、私が考えたり、言ったり、行ったりする際の指針にしようと考えた。

かくして「四つのテスト」は、クラブ・アルミニウム社の経営方針となった。

テーラーは、社員の名刺の裏に「四つのテスト」の文面を印刷させた。そして当社のセールスマンに、こんなふうに切り出しなさいと教育したのである。

「私たちはこの四つのテストを遵守するようにしていますが、この通り実行できないかもしれませんので、もし、私のいたらない点にお気づきになりましたら、お教え下さい。ご希望に添うよう努力いたしますから」

このテストは多大な成果を生み出した。セールスマンはディーラーの相談役になって、ディーラーに消費者に品物をうまく売れるような様々な情報や忠告を

提供するようになった。

そして販売は少しずつ上向き始めた。

「四つのテスト」をできるだけ忠実に実行することによって、ディーラーと消費者だけでなく、同業者の間にも善意を築くことができるようになった。

同業者の製品をこきおろすことなどしなかった。業界の販売は全体で大幅に増えたのである。

神の御加護—「四つのテスト」—これは私の祈りに神が答えて下さった賜物である。

善良な社員、良質な製品といった幸運が重なり合って、会社は5年間に40万ドルの借金を返済することができ、次の15年で100万ドル以上の株式配当を支払い、会社の純資産は750万ドルにまで達した。

しかし、[四つのテスト]がもたらした成果は、仕事の上だけに限られたものではなかった。四つのテストが最も有益で役に立ったのは、何と言っても一般の人間関係においてである。

事業の成功を足場にして「四つのテスト」を更に広めることによって、神へのかかわりを求め、倫理、道徳の大切さを知ることが大事であることを浸透させなければ、事業に成功したことなど何の役にもたたないであろう。

人生はいつも順風満帆とは限らない。青年たちも逆境と混乱の真っ只中から抜け出て、幸せなそして役立つ人間になったのである。彼らは自信に満ち溢れ、人間に満足している。それに、彼らには何より威厳がある。誰もがそうありたいと切実に思うであろう。

人々のもその通りにせよ

1954～55年度、第50代RI会長を務められたハーバート・テラー氏は[我が自叙伝]の第8章で、「皆さんが生きていく上で非常に役立つもう一つのこと、大切なものは何かということを知ることである。即ち、大切なことは、誠実、正直、信仰といった内面的になくってはならない徳ばかりではない。神や人類に仕える団体、組織も大切なのだ。もちろん実質的なものでなくてはならないが、そういった団体、組織に加入し、そこから多くを学ぶとともに、良いことをしようという強い意志をもった人々や団体があるものだと感じることは、皆さんの人生に大変プラスになることである。個人は団体に貢献する。そして個人団体共に強くなり、良いことを行おうという熱意と友愛は益々高まる。そう、この友愛があればこそ、創意工夫が生まれるし、無意味で非生産的な人生に陥ることもなくなるのである。私見によれば非宗教的諸団体の中で最も抜きんで活躍し、世界の為に尽くしている団体は



国際ロータリーである。」と記している。

テラーはロータリーを定義せよと言われれば、こう答えるつもりだ。

「ロータリーは、友情を育み、人と社会を作り、世界各国の人々の間に善意と友情を芽生えさせる団体である」と。

そして、ロータリーの活動で多分最も重要なことは、  
良い市民を育成するというのではないだろうか。  
1940年、私がシカゴロータリークラブの会長だった頃、ロータリアンに短い話をしたことがある、その一部を紹介したい。

「ロータリーのしなければならぬ大きい仕事に人格者を育てること、つまり人作りがあるのではないか。また、そのことに関してロータリーには大変な責任があるのではないかと私は思っています。政界や実業界において、また地域社会や家庭において一つまり生活の様々な領域において有能な役に立つ人物を育成すること—そのことこそロータリーのなすべき仕事ではありますまいか。良い市民、良い指導者を育て上げることは是非必要なことであります。真の意味での指導者を必要とし、それを求めている領域は数多くあります。それにもましてロータリーがなさねばならぬ最も大切な仕事は、宗教的信念に裏打ちされた理想を

もって、その理想を具体的に家庭や会社、さらに地域社会といった日常生活に場で実行できる指導者を育成することではないでしょうか。もし私達ロータリアンが真実、正義、友愛といった理想を掲げてそれを常に実行すれば、ロータリーは山をも動かすことができるでしょう。ということは、ロータリーが生きるも死ぬも、すべてそれは一般ロータリークラブ会員の双肩にかかっていると言うことなのです。即ち、それはロータリアン一人ひとりの生き方と、ロータリアンが他者をどう扱うかにかかっているのであります」

ロータリアンは、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもその通りにしてあげようと努力するのである。こういった精神こそ、世界が今最も必要としているのではないのでしょうか。

後日、道下パストガバナーに聞いて知ったのだが、向笠広次元 RI 会長から「今日のパネルディスカッションは大変聞き応えありました。今後のパネルのあるべき模範を示されましたね」と労っていただいたそうである。

# 23

## ベンジャミン・フランクリン とロータリークラブ



私がガバナーをつとめた 1982 年、大阪ロータリークラブは創立 60 周年を迎え、記念誌「随想」を発刊された。

その中に小谷年司会員が表題にある「フランクリンとロータリークラブ」を書いておられる。たいへん興味をそそられる論旨は忘れ難いものがある。この機会に随想を引用させていただき、詳しくご存知の方がいらっしゃればお教えいただきたいとの願いに応えたいと思う。

小谷氏は「自伝文学の傑作をあげれば、福沢諭吉氏の『福翁自伝』、西欧ではフランクリンの『自伝』が双璧であろう。両者に相通じる点は、現実主義者であると同時に、斬新的な理想主義者であるところであろう。フランクリンの『自伝』には、若い頃に既に次の点に気づいていたと記されている。“政治家はそもそも利己主義であって、国家の利益を優先する人は古今東西存在したためしがない。幸福な政治家というのは、偶々、自分の利益の実現と国家の利益の実現とが一致した人に過ぎない”

フランクリンの偉ところは、この事実を深く認識していたにもかかわらず、そのままニヒルになるのではなく、だからこそ政治家は徳を積む必要があると信じた楽天的な態度にあつたと思える。

1727 年、フランクリンは友人たちと語り合って、

毎週の金曜日の夜、政治、科学、倫理について語り合う会を作り、ジャントークラブと名づけた。会員は、公証人、数学者、測量士、指物師、有閑紳士、商館の番頭、印刷業などと職業を異にする人びとで構成されていた。

ジャントークラブは40年間中絶されることなく続き、独立前のアメリカで最もすぐれた哲学、道徳、政治の学校となったと「自伝」に記されている。フランクリンが小さい印刷工房の経営者から、偉大な政治家、学者になった根底にジャントークラブの活動があったことは疑いのない事実である。

ジャントークラブで討論されたアイディアから、火災保険制度が生まれ、図書館を創設し、のちにペンシルベニア大学が生まれている。教育を重視した面においても、後に慶応義塾の創設者となった福沢諭吉翁との類似点が見られる。

さて、ロータリークラブも始めの頃は、フランクリンのジャントークラブの存在が創立会員の頭にあっただのではなかろうか。これは、ロータリーだけではなく、キワニス、ライオンズ、青年会議所も、このような社会に貢献する団体の淵源はみんなアメリカからきている。その理由を考えるのだが、フランクリンの播いた種ではないかと、漠然と考えるだけで終わってしまうのである。「どなたか“フランクリンとロータ

リークラブ”といった論文をご覧になった方はいないでしょうか」という問いかけをしておられる。

私は「フランクリン自伝」とマックス・ウエーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を読みながら、フランクリンとポール・ハリスの共通点らしきものを知ることができた。

それは、それぞれの先祖がイングランド南部と、スコットランドからアメリカのニューイングランド地方に移住してきた敬虔なプロテスタントの信者であり、共に「寛容、善意、奉仕の心、勤勉、節約・・・」という道徳的で純粹、合理主義的な人生観をもっていたことが、社会に貢献するクラブを創設する基礎になったと考えるのである。

16世紀、ドイツのプロテスタントの信者は富裕階層であったが、イングランド、スコットランドに住むプロテスタント信者は英国国教会を奉じなかったために国を追われ、新天地を求めて多くの信者がアメリカのニューイングランド地方に移住することになった。

ベンジャミン・フランクリンの先祖もイングランド南部からニューイングランドの中心都市ボストンに移住している。フランクリンは、印刷工として働き、経営者となりフィラデルフィアにおいて、一業種一人

制のジャントークラブを創り、互いにクラブで討議されたアイデアから、火災保険制度や図書館を創り、ペンシルベニア大学創立のきっかけをつくっている。彼は生まれつきの勤勉さとジャントークラブで学んだ知識で“稲妻と電気の同一性を発見し、凧をあげて実験”を行った。

彼は学校に1年通っただけであるが、フランス語、イタリー語、スペイン語をマスターし、アメリカに植民地を所有していた各国の政府と直接交渉して、植民地返還に成功し、アメリカ独立の父と尊敬されている。

フランクリンは、誠実で積極的な性格と、ジャントークラブで学んだ知識、教養に加え、社会に尽くし、国家に貢献する志を堅持し、多くの知識人との繋がりによって植民地返還が為し遂げることができたと述懐している。

フランクリンは郵政長官、ペンシルバニア総督などの要職をつとめあげ、また「各自の職業倫理を高めることが、職業人の使命であり、正しい資本主義を発展させる基本になるものである」と説き、1905年、マックス・ウェーバーの書「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」と同じ立場に立って職業倫理高揚の大切さを唱えている。

これは、ロータリーのサービスの原点である職業奉仕と同じ思想であり、ジャントークラブは、ロータリ

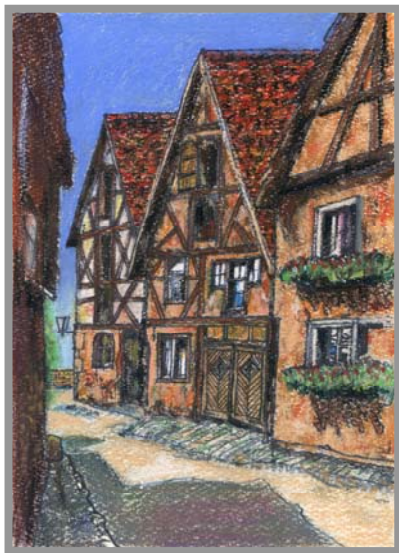
ーと同一線上に存在するクラブであるとえるではないか。

ポール・ハリスがシカゴロータリークラブを創立したときにはジャントークラブの存在を知らなかったといわれるが、情報、通信が発達していなかった20世紀初頭において、当然のことと頷ける。しかし、ジャントークラブの例で分るように多くの選ばれた人と永年にわたって学び、信頼関係を深めていくことが正しい人材育成につながるという貴重な事例であり、「ロータリーの第1の仕事は人づくりにある」といわれることもうなずけるであろう。



# 24

## 身体障害児、孤児など 白浜招待旅行



1981年、私がガバナーノミニーのころ、豊中大阪国際空港ロータリークラブが計画した〔身体障害児孤児などの白浜招待旅行〕に参加した。

地域社会の障害をもつ児童と学院の先生を白浜の名湯「川久」旅館に招待して温泉を楽しみ、一緒に料理をいただくという奉仕活動は過去に例のない素晴らしい活動であった。

当時、「川久」の社長は、1年間お客様にご愛顧いただいた感謝をこめて毎年12月中旬の閑散期に「恵まれない人のために」全館を解放し、無料で宿泊していただくとの活動を実施しておられた。この善意の奉仕にロータリークラブが参加させていただくことになったのである。

私は参加した障害のある少年、孤児と学院の先生みんなが喜んでいる姿に接することが出来た。

この計画の世話をされたクラブの責任者は、もっと多くのクラブに呼びかけて、各クラブの地域社会にある「恵まれない子供と、お世話をいただいている先生」を招待して奉仕の幅を広げてはどうかと提案した。各ロータリークラブに呼びかけて各クラブの地域にある施設を対象にして、1982年から「多くのロータリアンが参加し、奉仕の感動を！」なる計画が船出し、1991年に終了するまで毎年欠かすことなく10年間続けられた。

1986～87年の参加者の記録を見ると、

障害児、孤児など	131人
学院の先生	58人
交換学生	10人
RAC	17人
米山学生	5人
ロータリアン	123人
合計	344人 となっている。

計画遂行にあたって、紀勢線の特別編成の列車を貸切り、ロータリアン一人ひとりが児童や障害のある人の話し相手になるよう配置することになった。障害児、孤児とロータリアンが一緒に弁当を食べ、ジュースを飲み、お菓子を食べながら、話し相手になって子供たちと親しさが増していく。

「川久」に到着、各部屋に案内されたあと大浴場に入る。アメリカの背の高い交換学生が手足の不自由な大きい障害児を抱えて温泉にドブーンと勢いよく入っている。孤児たちは初めての温泉に大はしゃぎ、賑やかな声が響きわたりロータリアンたちも一緒に楽しく入浴する光景が見られた。

温泉から上がれば楽しい夕食の時間、大食堂にテーブルが配置され、ロータリアン各自が受け持つ子供たちにスープを食べさせている。ロータリアンが口を開けてアーンと食べさせている姿は、微笑ましい夕食の

風景である。各テーブルのロータリアンは小さい子供をあやしめながら食べさせ、一所懸命にがんばっている。子供たちが部屋に帰って就寝の時間は、参加された学院の先生が面倒を見てくださる。

1日目の仕事を終えたロータリアンは、日本間に集まって、今日の反省点を顧みながらビールを飲み一息つく休養の時間である。参加した子供たちの喜ぶ姿に接したロータリアンは気分が高揚し、楽しさも一段と盛り上がる。今までに経験したことのない充実感を味わうことができ、明日のエネルギーとなった。一度参加したロータリアンは何度も参加してくれるのは、この心地よい充実感、達成感、感動によるものであろう。

翌朝、バスを連ねてサファリーパーク、水族館の見学に出かける。受け持つ子供と手をつなぎ、「イルカショー」で水しぶきを浴びて大声を張り上げ、象の曲芸に拍手し、サファリカーに乗って自然に近い環境に生息するライオン、トラ、などの動物を見学、パークの呼び物「パンダ」に歓声をあげて楽しいサファリーパークの見学を終える。

このプログラムを初年度から最終まで取材していただき「ロータリーの友」のトップに写真入と記事を掲載していただいた浅見 勇さんに感謝したい。

帰路の列車が天王寺に到着、先生に連れられてそれぞれの学園へ帰る別れのと、2日間の触れ合いで親

しくなったロータリアンとの別れがやってくる。子供たちはみんなばいばいしながら泣いている。ロータリアンみんなが泣いている。わずか2日だけの付き合いなのだが、参加したみんなが涙をながす感動の奉仕であった。

私は毎年この光景に出会い、ロータリアンが人のために尽くした奉仕の後に、各自の心の中に自然に感動が生まれ、よきロータリアンをつくるのだ、と先輩に教えられたことを、実感することができた。このような奉仕は良きロータリアンを育成するだけでなく、人間として人を思いやる心を身につけ、人を創るロータリーの素晴らしさを実際に体験できる活動であった。

かくいう私も、何回も何回も子供たちとの別れで涙を流した1人であり、このようなプログラムを、各ロータリークラブがたとえ小規模であってもで計画し、できるだけ多くの会員が参加して、奉仕の感動を味わうことが大切であると思う。

この奉仕活動は、ロータリーの「I Serve」に反する「We Serve」ではないかと異論を唱える人もいたようだが、ロータリーのバックボーンである決議 23-34の6)のg項に「クラブがひと固まりになって行動するだけで足りるような事業よりも、広くすべてのロータリアン個々の力を動員するもののほうがロータリーの精神によりかなっていると言える。それは、

ロータリークラブでの社会奉仕は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられたいわば研究室の実験としてのみこれを見るべきであるからである」と記されているように、ロータリアンに奉仕の訓練と感動を与えて、ロータリアン一人一人が職業に社会に国際的に貢献する資質を磨き、この経験を生かして、あくまで個人として各方面に奉仕の実践を行うことが期待されている。

「この感動的な奉仕に、国鉄が身障者用トイレを新設してくれた」と聞いた。この活動の意義と感動が、頑固であった国鉄を自発的に動かす力となったと知り、人の心に訴えるのは理屈や理論ではなく感動なのではないかと思った。

ニーズに応じて国鉄がトイレを作ってくれたのは、100年前、シカゴのニーズに応じて、ポール・ハリスが最初の公衆便所を作って人々のために奉仕した故事を思い起こすではないか。

この奉仕活動で受け持った子供たちの思い出、印象は今もしっかり私の脳裏に刻みこまれている。その中の一人は、色の白い利発な3才の男の子であった。学院の先生が子供の生い立ちを説明してくれた。

「冬の寒い朝、職員が表の扉を開けますと、毛布にくるまれた赤ちゃんが置かれていました。すぐ室内に連れて入り、毛布を開きますと、お母さんからの手紙が

入っていました。手紙の内容は“私は、今この子を育てることが出来ないのです。一生懸命に働いて必ず迎えに来ますので、それまでこの子を育ててやっていただきたいのです。お願いいたします、お願いいたします”と切々たる母の手紙でした。学院長は、“お母さんの言う通り育ててあげましょう、そのうちに、お母さんが迎えに来るでしょう”と受け入れてくれました、それがこの子なのです」

私は、3才の男の子とお菓子を食べ、お茶を飲み、話をしながら、同年の私の孫と比べてはるかに利口なのに驚いた。甘える母がいなくて、多くの人の中で育つと、こんなにしっかりするものなのかと感じた。「おじちゃん、おしっこ！」一緒にトイレに連れて行ったり、絵本を読んであげたり、学院の先生と話したり、ほのぼのとした気持ちを与えてくれたこの事業に、私は時間が許す限り参加したものである。

終点の天王寺駅で別れるとき、学院の先生と男の子がお礼を言いに来てくれた。男の子も先生も、私も同じように泣いていた。私のクラブの松本さんも木村さんも、受け持った子供との別離の涙を流している、今思い出しても心に熱いものがこみ上げてくる。

ロータリーには、このような経験はいろいろあるだろうが、積極的に参加し、奉仕活動を実践して素晴らしい体験を積み重ねることで、人は成長していくもの

ではないかと思う。

自分のことだけではなく、広く他の人の為にと  
いう心が育つのもロータリーでなのである。

「ロータリーの友」に、私が椅子に座り元クラブ会  
長を務められた木村義一さんが立っている写真が1ペ  
ージ前面に載っていた。恰幅のある木村さんに会員み  
んなが「木村ガバナー！」と冷やかしていた当時を懐  
かしく思いだす。白浜で浅見さんに撮っていただいた  
記念の写真である。

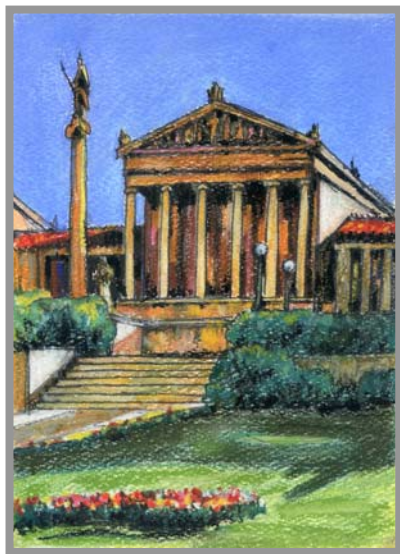
元 RI 会長ビチャイ・ラタクルさん、元 RI 会長ラジ  
ェンドラ・サブーさんの感動的な体験と同じような奉  
仕は、私たちの身の回りにも、地域、世界社会にも多  
く存在している。要はそれを、いかに見出し、いかに  
実行するかにかかっている。その機会は誰にでもある  
のだから常に心することが大切であると話しておら  
れるが、その真意が分かるように思う。

終わりに、10 年にわたって素晴らしい奉仕活動と  
学びのプログラムを、立案し、実践された豊中大阪国  
際ロータリークラブの皆さんに心から感謝の言葉を  
贈りたい。



# 25

## 自然な気持ちで生きることが 健康の秘訣



2007年1月10日、クラブの初例会が都ホテル大阪で開催された。その2時間前に小さい本屋に立ち寄り、宇野千代さんの「行動することが生きることである」を買い求め、例会が開かれるまでにホテルのラウンジで読みきった。私が常に行っている流儀、「右手に赤ボールペンをもち、速読しながらここと思うところに線を引き、ページを折って読み進み、折ったページを何回も読み返す」これを繰り返すことで理解が深まる。その日も、99歳の人生をしっかりと生きられた宇野さんの知恵に学ぶことができ、大変参考になった。その一部をお伝えしたい。

### 1) 感動は行動に結びつき、人生を愉しくする

人間はいつでも、胸の中がほうっと温かくなる気持ちで生きたい。美しいものを見て感動する、人の優しい言葉に感動するというような、どんな小さい感動でもよいのである。何事かに感動すると、すぐに行動しないでおれないのが私の性癖である。どんな大事業も、どんな大発明も、どんな小説も、興味をもっていただけからこそ、なし遂げることができたのである。

私はいつも、これで済んだとピリオドを打つのではなく、まだ済まない、と考える。済まないからこそ、これから先もいろいろ興味をもって考えていくことができるのである。

人はその人自身が思っているほど、自分の嫌いな、自分に不似合いな生き方をしないものである。

## 2) 幸福をはりめぐらせて生きる

私はときどき、ちいさい声で、「仕合わせだなァ」と呟く。いまの身の上が、この上もなく仕合わせに思われる。心が平静である。

この老齢になって、こんなに仕合わせだということ、神仏に、いや野仏にも感謝したい気持ちでいる。幸福というものは、決して、自分の環境が変わったとか、富の程度が変わったからということを感じるものではない。なぜかというと、幸福は客観断定ではなく、主観の断定にあるからです。はたからどんなに幸福そうに見えても幸福とはいえないんですよ。本人がしみじみ、ああ、私は仕合わせだと思えないかぎり、本当の仕合わせを味わうことが出来ない。

小さな幸運がくると、人はつつましやかになる。それがどんなに遅まきで、そして哀れな心情であったとしても、私たちは不幸な状態を、少しずつ乗り切ることができるのではないかと思う。

幸福を願う気持ちは、誰の心の中にもある。人の生きていく間には、どっちへ向かったらいいのか、など思わないのに、まるで、道しるべに従って歩いているように、私たちはただ真っ直ぐに幸福に向かって歩い

て行く。

### 3) 誉めること、喜ばせることが人間関係の基本である

大通りに止まっていたバスの窓から身を乗り出して2~30人の女の客が、いっせいに手を振っているではありませんか。私もまた手を振りました。バスが行ってしまったあとまで、知らない人同士がお互いに手を振り合ったことで、一種の和んだ気持ちになる自分を感じました。

「しずちゃん、あなた、これまでに一番嬉しかったことはなに？」と女の子にききました。「お金が儲かったことでも、人から何か貰ったときでもない。あ、あの人が好き、と思った瞬間に、向こうでもこっちが好き、と思っていると信じたときよね」と、バスの客たちが手を振ってくれ、自分も和んだ気持ちになった自分の心と重ね合わせてしずちゃんに聞いたのです。

人間は不可解なもので、涎をたらし貧しさと無能とが一緒かと思われていた子が、昨日出来なかったものが、今日できることがある。「あれア、こんなに難しいことが今日は出来たね。おまえは出来る子じゃのう」と褒めると、無能だと思われていた子供の顔に生気が走る。何事でも否定的に思うのではなく褒めてあげること。人生において幸福を呼ぶのはこれである。

#### 4、年齢を重ねることは有難いことである

60 歳にもなるとおかしなことに、何か憑き物が落ちたように違った心境になって、世の中のことがはっきり見えてくるのはどうしたことだろう。

もうじたばた騒いでも勝手なことは出来ないという自覚みたいなものができて、まるで霧が晴れて、青空になったようにはっきり見える気持ちになるのも不思議な現象である。

神様はどの年齢にも生きる力をお与えになる。長い人生の間にしばし同じことを繰り返しているうちに、思いがけない実を結んでいることがあるものです。

過去はときどき消えて、また現れる。そのたびに、傷ではなくある甘美なものに変貌した思いが掠めるのは、年齢のせいであろうか。

“年をとったらどうしよう” という恐怖は、一体何であろうか。

私は本年 88 歳で、豪華なものにたいする憧れがなくなってきたのである。年をとると、そう豪華なものが欲しくなくなるとは、はははは、何と有難いことではないか。

#### 5) 自然な気持ちで生きることが健康の秘訣である

(歩く効用)

わたしの健康法はと訊かれると、何と答えてよいか分からない。私の母は肺結核の病中に私を生みすぐに亡くなった、だから私は弱い子供と思われていたが、そうではなかった。満 80 歳の今も徹夜の就筆ではなく、徹夜のマージャンをする、あくる日はぐうぐう眠る。体を軽くして、肩の力を抜いて、何もない気持ちで生きていきたいものである。しかも何か自分の好きな仕事をしたいと欲張っているが、そんなことができると信じている。

人間は自然な気持ちで、つまり平常心をもって生活してさえいれば、ほとんど長生きすることができるものと私は信じている。

私は仕事の一休みには、仕事場を取り囲んでいる広い廊下を 1,2,3・・・と数えて駆け、1 万歩になるまでやめない。100 を数えるたびに指を一本折り、5 本折って、次に 100 数えるたびに 1 本起こして歩くと 100 歩、これを 10 回繰り返すと 1 万歩という勘定になる。万歩計があると聞くが、そんなもの使わず毎日 1 万歩あるく。

お千代さんが愉しかったという歩く健康法を見た思いである。私にも毎日、弱った足を正常に戻すために部屋を歩き続けた経験がある。1982 年、第 2660 地区のガバナーをつとめ、経歴に書かれているように毎年、いろんなロータリーの役を務め、アジア第 3 ゾー

ンの理事候補に指名されることになって間もなく極度の疲労のために、救急車で国立大阪病院の救命室に担ぎこまれ、危うく一命を落とすところであった。

担当された循環器の林部長の献身的な治療のお陰で一命を取り留めることができたことに、今も感謝の気持ちいっぱいである。

長い病院生活から退院することができたが、足は細くなって、かつての健脚は見る影もない。暫くは安静にしていたが、これでは歩けなくなるのではないかと真剣に考えた。

幸い、私の退院に合わせて、建築設計の専門家である長男・和孝が、3人の子供部屋を1つの大きい部屋に改造してくれて、私は約18畳のひろびろした部屋で療養することになった。

足慣らしに部屋を歩くうちに、一辺9メートルの距離を15歩で歩けることを発見した。毎日、千代さんのように、15歩あるく度に右の指を1本折り、右手の指を5回折り、次に15歩あるいて右の指を一本づつ開いて5回開いて、左手の指を1本折り、左手の指を折って開いて1500歩。900メートル歩いたことになる。

最初は300メートルを歩くのに精一杯であったが、毎日歩いているうちに習慣となり、歩くのが愉しみになってきたことを思い出す。

習慣ともなれば 1 日に 3～4 回歩き、2000～3000 メートルの距離を毎日歩き続けることで体調は上向いてくる。医師は私の回復の早さに驚いたほどであった。

以前私は送迎してもらっていたが、運転手が定年になったのを機に歩くことに決めた。現在、毎朝電車を乗り継いで、歩いたり走ったりしながら会社に通う毎日である。

思えば、私の健康の源泉を作ってくれたのは長男和孝の「長期療養には 18 畳のひろびろした部屋でゆったり」という心遣いによるものと思う。

昨年、経営の大部分を長男に担ってもらうことができ、私の肩の荷が軽くなり、健康と心の安楽を得ることができたことに感謝している。

息子の話をするのは気が引けるが、母親似であろうか小学校のころから利発で、東京大学の大学院を終える頃、教授から後を継いでほしいと望まれ、本人もそれを希望していたのを、祖父が残した事業後継の為とはいえ帰阪させたのは真に気の毒であったと思っている。しかし、小さい頃から積み重ね、身につけた判断力、集中力、持続力が、ビル経営、建築設計事務所などの経営を営む上で大いに役立つっていると思う。

彼は、大阪ちゃやまちロータリークラブの会員であり、第 2660 地区の世界社会奉仕委員会の副委員長を



つとめていて、地区の会合で時々出会うことがあるが、手をちょっと上げるだけがお互いの挨拶である。

彼は、かつての船場文化の復興をめざす若い友人たちと“船場文化塾”を結成し、ビルの10階にある日本間、茶室、洋間を利用して、日舞、長唄、落語、茶会などのお世話をし、地域文化の復興を目指していることは嬉しいことである。

これらを開催される日には、彼夫婦、3人の子供、私と家内も出席し、終了後一緒に外食を楽しむことができるのは至福の一時である。

6)ロータリークラブは、自然な気持ちで人生の愉しさを自分のものにするところ

ロータリークラブの会員になって、胸がほうっと温かくなる気持ちになることがあるではないか。また、永年の交友の中で人の優しい言葉に感動することも多いだろう。「仕合わせだなァ」と呟きたい。私のように老齢になっても仕合わせを感じることを神仏に、野仏にも感謝したい、幸福は自分の主観にあることを実感することができる。人に老いが訪れるころは、小学校、中学、高校、大学の同窓会は既に無く、親しかった多くの友人と出会う機会もなくなってくる。この淋しさや孤独感を感じる中であって、私たちには毎週の例会で多くの心温かい仲間が待っていてくれる。

職業倫理の高揚、互いの人柄を高め、思いやり助け合いの心を身につけ、多くの会員同士が親しみ、心を許して語り合う友人がいる。そして、価値ある人生の生き方を学び、いつも同じように会員たちの笑い声が聞こえ、温かい励まし、ユーモアが駆け巡る。社会のために効果的な奉仕の相談をしたり、国際的な問題について討議し、俳句会、お茶の会、コーラスの練習、ゴルフ会、スキー同好会、囲碁の会など、いつもの楽しい集があるのは私たちのオアシスでもある。

30歳代から90歳を越える会員が毎週の出逢いを楽しみ、人生の素晴らしさを教えてくれるのもロータリークラブの有り難さである。

1959～60年度、RI会長を務められたハロルド・トーマス氏は著書「ロータリー・モザイク」の中で「ロータリーの最高の姿は、良き働きと、良き清らかな楽しみとの、当を得た混合です。われわれの楽しみを常に清らかなものにするよう、お互いが気を配ろうではありませんか。われわれはロータリーの品位というものに健全な尊敬の念をもたねばならないのです。そしてわれわれが個人的影響力をもつクラブにおいて、まずこの規準を打ち立てるためにできるだけのことをしなければなりません」と書いている。大いに参考にしたいものである。

# 26

## ロータリー日韓親善会議 元R I理事竹田恒徳さんの思い出など



1981～82年度のRI会長を務められたスタンレーE、マッキヤフリー氏はテーマとして「World Understanding & Peace Through Rotary」「ロータリーを通じて、世界理解と平和を」を掲げられた。

私たちガバナーエレクトはフロリダ州ボカ・ラトーンの国際協議会を終え、全員がダラスの国際大会に出席した。大会第一日目から最終日まで出席し、国際大会の決議にも参加した。

日本のガバナーエレクトが持参した各地区の決議権を菅野多利雄パストガバナー（後にRI理事）がまとめられ、「大会期間中は観光などに行かないように」と注意されたお陰で同期のガバナーの親密さがいっそう増したように思う。

マッキヤフリー会長は、掲げられたテーマを実践する意味もあって、「日韓親善会議」を提案された。第1回日韓親善会議は1982年にソウルで開催され、第2回は翌年神戸で開かれた。向笠RI会長が出席され、600人を超す参加者を迎えて神戸国際会議場、ポートピアホテルで開催された。

この親善会議は私がガバナー時代に開催された印象に残る会議であった。その後、第3回は1985年ソウル、第4回は1987年宮崎、第5回仙台、第6回は慶州市で開催された。

その後途絶えているようだが、今日の日韓情勢を改

善していくにはロータリーのような善意の親善、信頼関係が預かって力になるのではないかと思う。本大会は、4月20日、21日の2日間行われた。

大会第1日：

神戸の親善会議の冒頭、向笠 RI 会長は感銘深いスピーチをされた。

「人類はひとつ、世界中に友情の橋をかけよう」をテーマに掲げた私が常に思っているのは、韓国人と日本人は血のつながった仲間なのです。会場では両国の親しい友人の顔がいたるところに見られ、私はしみじみ幸福だなと感じています。本年度の親善会議は、スリランカのコロombo、モナコのモンテカルロ、ケニアのナイロビで開催され、ノーベル賞を受賞されたマザー・テレサに出席していただき、お話しを聞くことができました。

本年度最終の親善会議を成功裏に開催できますことは、日韓両国の関係者の周到な計画によるものと深く感謝しています。韓国と日本が親しくなるためには時間がかかります。しばしば顔をあわせることが一番大切なのです。

20年あまり前にレークプラシッドで行われた国際協議会での話ですが、アメリカのガバナーノミニーが英語の部会に出たところ、たくさんの日本のガバナーノミニーが出席していたそうです。アメリカ人は第2

次世界大戦において、フィリピンで日本軍と戦った体験から日本人に対して敵意が湧いてくるのを押さえることができず、帰国しようとの気持ちをかろうじて封じ込めて、ともかく9日間日本人と一緒に過ごしたそうです。すると、9日の間に、日本人すべてが良い友達であることがわかって、敵意もどこかに消え失せたということです。

ロータリアンとは、元来、善意に満ちた人びとなのです。それが一緒に顔を合わせて時間を過ごすことで生まれてくる結果は、必ずや両者のわだかまりを減じていくものだと確信しています。

私が掲げた RI 会長のテーマ『人類はひとつ』は、哲学的な意味でも、宗教的な意味でもなく、きわめて生物的な意味でございます。

世界の中で、殊に血の繋がりの濃い韓国と日本が仲良くなれない理由はございません。顔を合わせる機会が多ければ多いほど、我々は仲良くなって、「友情の橋」をもっと強く、大きくしていくことができるのは間違いありません。この会議が韓国と日本の親善の実をあげて成功することを祈ってやみません」と、医学者としての素晴らしい話をされた。

私は向笠元 RI 会長が言われた「顔をあわせる機会が多ければ多いほど、私たちは友情の橋をもっと強く

なり、仲の良い信頼関係が築かれていくのです」という話を聞きながら、ロータリークラブの例会が月に1回や2回の出逢いではなく、毎週1回決まった時間に、決まった場所で多くの会員と顔をあわせる機会を多くすることが友情の橋を強くかけ信頼関係が深くなる、ここに毎週行われる例会の意味があるのだと改めて思った。

長年にわたり時間を守り、相手の身になって考える習慣が付き、人づきあいが楽しくなることで事業経営に役立ち、よき師、よき友に恵まれるとういう他では得られない人生の宝が存在するのだと思う。

人格教育の成否は、よき模範を得るかどうかによって決まり、周囲の人の性格や態度、習慣によって無意識のうちに形作られるといわれるが、ロータリークラブは自分の模範とする人を見い出すために得がたい場であり、友情の橋を架げるだけでなく 模範とする人と永年接することで自分の人格形成に大きい影響を与えてくれる場であるとの思いを強くした。

親善会議の第1日目に行われた昼食会は、広い会場いっぱい丸テーブルが配置され、日本最初の RI 会長を務められた東ヶ崎 潔さんによる乾杯で、和やかな雰囲気の中で開催された。午後は、青少年交流分科会：竹田恒徳パスト RI 理事、世界社会奉仕分科会；

松平一郎パスト RI 理事、米山財団及び奨学文化財団分科会；湯浅恭三パスト RI 副会長、姉妹クラブ分科会；原田秀雄パスト RI 理事の諸先輩がコーディネーターとなって、両国のロータリアンの友好的で積極的な討論が行われた。

分科会終了後、ホーム・ホスピタリティの時間には、韓国と姉妹クラブを締結している大阪、大阪北、南、東、西、住吉、柏原、池田、神戸、東、西、などの諸クラブ……のクラブ会員が迎えにきて、遠来の韓国ロータリアンと家族を設営した場所に案内し、との親睦の輪を広げるために、それぞれが設営した場所に案内する。

大阪北ロータリークラブから古市実氏と数人の会員が、韓国の姉妹クラブ会員家族を迎えに来ておられ、原田秀雄パスト理事は竹田恒徳さんに、「私のクラブが設営した料亭播半の親善会にお越しになりませんか」とお誘いし、ご一緒されたそうである。

“親善の集い”の開会にあたって、原田パスト理事は、竹田恒徳さんを次のように紹介されたそうである。

「竹田元 RI 理事はご存知の方も多いでしょうが近代日本の礎を築かれた、おそれおおくも明治天皇のお孫さんであり、昭和天皇の御従兄弟にあたられる方です。世が世なれば私たちが到底、ご同席することができない皇族のお一人でございますが、今宵



席を同じくし、親しくお話しする機会が与えられましたのは、同じロータリアンであるからなのです。このようなチャンスはめったに回ってこないと思いますので、竹田先生を囲んで大いに親睦の実をあげていただきますことをお願いし、竹田先生のご紹介と、開会の挨拶といたします…」

当時の韓国のパストガバナーは、ほとんど日本の教育をうけて育った人であったので明治天皇のお孫さんと同席することができた幸運を喜び、竹田さんの前はお話を聞くロータリアンたちで一杯であったという。

翌日、私は大学の恩師・原田秀雄先生から、韓国、日本のロータリアンが親睦を深め、大いに盛り上がって楽しい集いになった様子をお聞ききして、たいへん嬉しく思ったことを思い出す。

大会 2 日目:

7 時 30 分からポートピアホテルで朝食会がひかれた。600 人の参加者を 3 グループに分け、同期のガバナーが司会を務めることになった。

Aグループの司会 第2580 地区 川上寿一ガバナー

Bグループの司会 第2660 地区 戸田 孝ガバナー

Cグループの司会 第2680 地区 岩堀通夫ガバナー

私は B グループのみなさんに朝食会開会の挨拶を

して席に着いた。私の右に大学時代の恩師原田秀雄先生、左に竹田恒徳パスト RI 理事が座ることになった。

原田先生は竹田パスト理事に「戸田君は私の教授時代の弟子です、今後ともよろしく御指導いただきますようお願いいたします」と紹介して下さった。私は、右に恩師、左に明治天皇のお孫さんという偉い方の間に挟まってカチカチに緊張したことを思い出す。食事が喉を通るかどうかが心配したが、まことに楽しく朝食を頂くことができた。私は「竹田先生は、以前からスポーツの殿下とお聞きしていました。オリンピックにもお出ましになったとのことで、どんなスポーツをおやりでございましたか？」と、お粗末な質問にもお答えいただき「馬術です、若い頃から訓練してきました。大学に馬術部もありますが練習期間が短いので、外国の選手にはなかなか勝てませんね」。「私はいつも疑問に思うのですが、採点はどのような方法でおこなわれるのでしょうか？」殿下は「コースにはカナル（溝）や障害物でも低いもの、高いもの、幅の広いもの、などがあって、それぞれを正確に、美しく、基準以上の速さで走ること、馬をどのようにコントロールしていくか、というような項目について採点するのです。日本人は体格の問題などもあって、そこそこまではいきますが、優勝圏内に入るのはむつかしいでしょうね」と答えられた。

私は「先生は昭和天皇と従兄弟様にあたられるとお聞きしていますが、昭和天皇とはよくお会いになられるのですか?」「そうですね、私は天皇と年が近かったこともあって、小さいときからよくご一緒しましたね。陛下は相撲がお好きでしてね、私を見たら相撲をとろうと仰せになって、よく相撲しましたよ」「どちらがお強かったのですか?」「年は私が2つ下ですが、私の方が体格がよかったですので五分五分でしたね、私が勝つともう一番、もう一番といわれましてね、」と今までに聞いたことのない珍しい楽しい話を気さくに話してしてくださった。

竹田さんは、「私が大阪で師団長をしていた頃のことを懐かしく思い出しますよ。大手前から馬場町、大阪城から森之宮あたりを馬に乗って師団司令部に通った頃のことはいい思い出です」「階級は何でしたか?」に「中将でしたね」と話された。

私は日韓親善会議の朝食会で、思いもよらぬ偶然から竹田元 RI 理事の隣に座ることになり、いろいろ珍しく楽しいお話をお伺いすることができたことを懐かしく思い出す。ロータリーでは、天上の人と仰ぎ見る高貴な方とでも同じロータリアンであるということで、心を開いて話し合える素晴らしさを実感することができた得がたい体験であった。

年は移って、昭和天皇が崩御された大葬の儀に皇族、国内外の代表者が多く集う祭殿に一人代表として霊前にシキビを捧げられたのは、竹田恒徳さんであった。

昭和天皇と一番親しく長く接しられた竹田さんが選ばれて代表になられたのではないかと思う。

1989年、私は第2580地区の年次大会にRI会長代理としてに出席することになった。ホテルニューオオタニで開催された大会の参加者名簿に竹田恒徳さんのお名前があって、お会いできるのを楽しみにしていたが、一番前列の中央に座っておられた竹田さんに壇上から会釈ただけでお話しする機会がなかった。以前に比べて少し老けられたように思った。

「人生はすべて出会いである」といわれる。特にロータリーには思わぬところで、思わぬよき出会いがあるものだ。しかも出会いは思いもよらないときにヒョッコリやってくるものだよといわれるが、私がガバナー時代に行われた日韓親善会議の朝食会で図らずも、明治天皇のお孫さん竹田恒徳さんの隣の席に座るといふビックリするような出会いもあり、楽しく和やかな一時を過ごすことができた幸せは計り知れないものである。

47年のロータリーライフの中には楽しみタネは

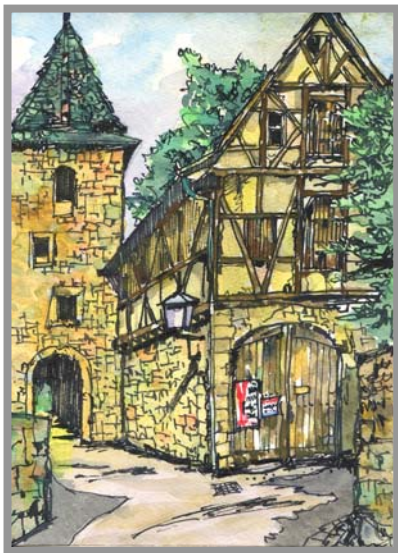
限りなくあるものだとつくづく感じている。毎週の例会での出合いは各会員が、お互いの宝を持ち寄ってくるのだから、常々、賢く楽しく年をとるためにかけがいのない場所だと思っている。

ロータリー創立 100 周年を記念して発行された「奉仕の一世紀」の「100 人の高名なロータリアン」の中に、エジソン、チャーチル、ケネディ、服部礼次郎、平沢興、松下幸之助、正田健次郎、竹田恒徳一日本、皇族（東京北 RC）・・・とあり、気取らない友人のように接していただいた竹田さんの温かさを、懐かしく思い出すのである。

また、100 人のお一人であるセイコーの服部禮次郎元 RI 理事と私は、1986 年、1987 年の国際協議会のグループリーダーとして日本のガバナー研修に尽くした当時を思い出し、ロータリーの出逢いの有り難さをしみじみ感じるのである。

# 27

一隅を照らすもので  
私はありがたい



私にはロータリークラブのなかに師と仰ぐ会員が多くおられる。クラブ創立に力を尽くされ、48年を経た今もお元気で例会に出席しておられる平野大太郎さんがいらっしゃるし、今は静養中であるがいつも表になり影になって導いてくださっている永井武さんや、諸先輩が在籍しておられる。その中のお一人に旧制第3高等学校から東京大学を卒業された白井勇さんが在籍しておられた。

白井さんは大学を卒業後住友本社に入社され、戦争中は住友金属和歌山製作所の取締役工場長として活躍しておられたが、終戦後、巨大な軍需工場の経営者が戦争責任を問われ、白井さんもパージにかかって浪人生活を余儀なくされたそうである。

数年後、住友系の柏原機械製作所の社長に着任されることになった。会社が私のクラブのテリトリーにあったことから八尾ロータリークラブに入会されることになった。幾多の困難を経験された白井さんは古武士然とした風格があって、会員たちはひとしく畏敬の念を抱いたものである。白井さんは私の父と同じ年の生まれであるが、私たちと一緒に、俳句会、お茶の会、小唄の会などに参加され大いにクラブライフを楽しまれた。

白井さんは創立15周年誌に自らの信条として次の詩を記しておられる。

一隅を照らすもので私はありたい  
私の受け持つ一隅が  
どんなにちいさい みじめな  
はかないものであっても  
悪びれず ひるまず  
ただほのかに照らしていきたい

白井さんの詩は私の心に深く刻み込まれ、忘れえぬものとなった。

後日、私は思わぬときにこの詩と出会うことになる。昭和史に大きい足跡を残された安岡正篤師は、人物を修める平素の心がけとして、第1に心中常に「喜神」を含むこと、第2に心中絶えず感謝の念を含むこと、第3に常に陰徳を志すこと、など人間の心のありかた、経営者の基本とすべき理念などを教えられた。

関西師友会のお世話役をされたのは住友生命の新井正明氏で、松下幸之助氏、平沢興先生をはじめ、各界のトップリーダーに陽明学、人の道などを教えられたという。

安岡先生に学んだ神渡良平氏は「安岡正篤の世界」という本を書かれたが、その本の中で「一隅を照らすもので私はありたい……」の詩を見つけたのである。詩の作者は住友の中興の祖といわれた田中良雄氏が作られたものであることを知った。



私はこの本を読みながら随分以前に亡くなられた白井勇さんと再会したような懐かしさを感じた。白井さんは住友の先輩である田中良雄さんからこの詩を学ばれ自分の信条とされたのであろう。

神渡さんが書かれた本は読者の口コミで反響を呼び、毎日沢山の手紙が配達されるようになったという。この中に、大阪の堺で豆腐屋を営んでいる橋本さんからの手紙があったそうだ。橋本さんは田中さんの詩「一隅を照らすもので私はありたい」にふれたとき、「そうだ、店が大きいとか小さいとか、そんなことで悪びれまい。それよりも、自分がお客さんにお渡しする商品の中に、どれだけ真心が込められているかを問題にしよう、それから素材を厳選し、いい大豆を探し、ニガリも天然のものを仕入れ、懸命に努力をして自分にできる最高の豆腐を届けようという気持ちになりました。それから肩の荷がおり、店を大きくしようとか、お得意を広げようとか、そんなこと以上にお客様に自分の真心のこもった商品を届けよう。その結果として取引が大きくなることもあるだろうが、本末転倒してはならない。そのような気持ちで仕事をしています」という内容の手紙であった。

神渡さんは、たいへん感じるものがあり、大阪での仕事のあと、堺の橋本さんを訪ねることにした。

橋本さんの店は金岡ショッピングセンターにある

小さいお豆腐屋さんであった。神渡さんは長靴姿の橋本さんに会って話を聞くことができた。橋本さんが言うには

「私は、昔金沢である会社の工場長をしまして、270人ほど使って仕事をしていました。考えるところがありまして会社をやめてこの地に移り、家内と2人で豆腐屋をはじめたのです。高校生になる長男はどうして親父は270人も使っていた工場長から、夫婦だけの豆腐屋になり下がったのか、何故だろうと息子はだんだん私の目を見なくなり、話もしなくなったのです。そんな息子の気持ちの揺らぎが伝わってきながら、親父としてなにもできなかつたのです。

ある朝、息子がトイレに起きたのでしょうか、私が仕事に取り掛かる前に毎朝、大きい声で唱読している田中良雄さんの詩—

一隅を照らすもので私はありたい

私の受け持つ一隅が

どんなに小さい みじめな

はかないものであっても

悪びれず ひるまず

ただほのかに照らしていきたい

を諳んじて仕事にかかっている姿を見て「オヤジは、こんな姿勢で仕事をしていたのか、豆腐づくりをして

いたのか』

それから息子さんのオヤジを見る目が変わり、お父さんと話をするようになった。お父さんの仕事にかける姿勢を心やすく思うようになったというんですね、私は、その話を聞きながら目頭があつくなって涙がとまらなかった。

仕事をしていきますと、誰もが会社の伸びが気になるものですが、しかし、橋本さんは、それよりも商品の質の程度を問題にしようと考えていらっしゃる。

近年、自分の利益を優先して他を顧みない風潮が蔓延している中であって、この話は私達に多くのことを教えているように思うのである。

白井さんは企業の実業家である田中良雄さんに学ばれて、この詩を自分の信条とされ、私はロータリークラブで白井勇さんからこの詩を教えられ、触発されて忘れ得ないものとなり、橋本さんは神渡さんの書から感動を得て、自らの仕事のあるべき姿を見出し、さらに橋本さんは「父の心」を息子さんに伝えるという大きい役割を果たしているのである。

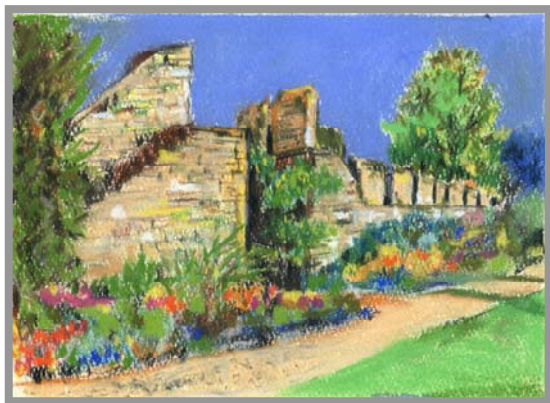
思えば、田中良雄さんの一編の短い詩が、多くの人たちに計り知れない大きい影響を与えていることに驚きを覚えるのである。

私たちはロータリーライフの中で注意深く観察し、何事からも学ぼうとする心を持ち続けることで思わ

ぬ喜びや感動が得られ、その上楽しみと友情、人のお役にたち、優しい心をもつことができるとすれば、これほど有り難い場は他に見当たるまい。在籍 47 年の一老タリアンの独り言である。

# 28

## クラブを活性化する 5分、10分間卓話



八尾ロータリークラブが創立したのは1961年である。創立当時、ガバナー特別代表補佐をされた塚本義隆さん（1969～70年度ガバナー）に大変お世話になった。

塚本さんはよく「ロータリーの素晴らしさは、毎週の例会で選ばれた親しい会員と気兼ねなく話し合えることと、永年の間に3分なら3分、5分なら5分、10分なら10分と与えられた時間内で分りやすく話をすることに慣れることです。事業経営者の重要な要素の一つは、お得意さんと長年にわたって親しく話し合い信用を高めること、事業経営の目標や心得について社員に分りやすく話し、力をあわせて成功への道を歩む気持ちを力強く印象深い言葉で伝えることが大切です。人生を歩む上で重要な話に慣れるのはロータリークラブの役割でもあり、話に慣れることはロータリークラブ会員の特典とも言えるでしょう。」と教えていただいた。

創立41年度の会長をつとめられた山口幸雄さんは就任の挨拶で、「創立50年への新しい門出での年です。第1年目は『良き友の輪を広げ』、『クラブの活性化』を実現し、『ロータリーの原点である職業奉仕』を理解し、“ロータリーの根幹”について学び、全会員に『ロータリアンである誇り』が抱けるような年度

にしたいと思います」とクラブの目標を会員に話された。

私は山口会長から事前に相談を受けていて、第1の目標、“良き友の輪を広げること”“クラブ活性化”を実現させるには、先ず、「クラブの例会を充実させ、楽しく明るい集いにする」こと。そのためには塚本さんから教えていただいた5分間、10分間卓話を毎月1回行なって互いの理解を深め、全会員がプログラムに参加する意識を高めること。第2の目標は、ロータリーの原点、職業奉仕を学ぶために、私に判り易い冊子を作り、それをもとに会員による輪読会を行ない、ロータリーの理解を深めるための具体的な計画を実践すること。これらを年度の計画に加えられた。

#### 1) 5分間卓話；

山口会長は担当委員長と相談の上、年間のプログラムに毎月1回の5分間卓話を配した。30分の卓話時間に5人が話しすれば6分の持ち時間となるが、演壇に上り下りの時間を勘案して、5人による5分間卓話を決定し、卓話者に与えられた時間の30秒前に予鈴を鳴らし、話の結論を述べることにした。そして、5分卓話を担当する会員に次のような約束条項示した。

①事前に5分間で喋れる原稿を作成すること。

- ②何回も練習して原稿なしで話せるように練習すること。
- ③卓話が終わった後、原稿を会報委員会に渡すこと。
- ④次週の週報に記載された5人の原稿を反復読み返し、反省する事。

このような事前の約束のもとに5分間卓話が始まった。

誰がトップバッターになったか覚えていないが、十分に準備して見事に5分間で話し終えた会員の卓話は、居眠りする暇もない真剣な卓話で全会員の万雷の拍手が響き渡る、今までに聞いたことのない拍手であった。

惜しくも、時間が足りずに途中降板となった会員は、照れ隠しに頭を掻きながら赤い顔をしてすごすごと演台を下りる。会員の大爆笑と温かい激励の拍手が起こって、会場に和やかな風が吹きわたる。

5分間卓話に成功した人も、失敗した人にも、会員の反響は素晴らしいものがあつた。そして、今まで知らなかった会員の素顔にふれ、親しさと理解が深まったように思う。更に良かったのは、たとえ5分の原稿でも自分で考え、手直し、練習し、時間内で話しをするという又とない機会を全会員に提供することがで



きたことである。

塚本さんが教えてくれた 5 分卓話が 40 年を経て実行されたこと、クラブ活性化のために全会員が参加できるプログラムを立てることができ、親しい友人の話に拍手で応え、居眠り雑談がなくなったのもこのプログラムの効果であった。

会員増強、退会防止が叫ばれて久しいが、このようなちょっとした工夫の積み重ねによってクラブの一体感と、全会員が力を合わせてロータリーの素晴らしさを体験し、認識を深めることができたように思う。

長年にわたって何の工夫もなく、同じことを繰り返しているだけではマンネリになり、クラブの活力が沈滞していくように思う。

皆さんのクラブにも 5 分間卓話を採用してみてもどうだろう。時には外部からの卓話者を迎えるのもいいが、あまり啓発されることのない話を聞いて謝礼を出すより、ユーモアのある会員による 5 分間卓話のほうが数段楽しく、ためになるのではないか。それに加え、会員が時間内で話すことになれるという素晴らしい効果があることを思えば、まさに一挙両得と思うがどうだろう。

## 2) 10 分間卓話（職業奉仕 10 分間卓話集）

3 人の会員による 10 分間卓話は過去に何回も行な

われてきたが、昨年度「私の職業奉仕 10 分間卓話」を行なうことになった。私もその一人で、10 分あれば充実した話しができることを実感した。A4 版 2 枚のパソコン原稿で 10 分間の話ができる。これを、年に 5 回行なえば 15 人の「私の職業奉仕」を聞くことができ、原稿に少し修正を加えて小冊子に編集し、「職業奉仕 10 分間卓話集」が完成した。なかなかの出来栄である。しかも、親しい会員同士の職業の実践倫理にかける基本姿勢を知ることができて大成功であった。

これを行なう為の注意事項として、職業奉仕を分り易く会員に伝えることが大切であり、これを疎かにすれば会社と製品の宣伝のみに終わることがある。事前の準備が大切であることを認識した上で、試してみてもうどうだろう。大変ユニークで、ためになる卓話になるに違いない。

### 3) 「ロータリーは知・好・楽」10 分間の輪読会；

私は山口会長から肩のこらない「ロータリー情報の栞」を書いて欲しいと頼まれて、以前から書き溜めた中から抜粋して 80 ページほどの冊子を作った。

本の題は、「ロータリーの真の姿は Enjoy、Study、Service」から取って「ロータリーは E・S・S」としてはどうかと提案したが、山口会長の思いもあって、

論語の「これを知るものは、これを行なうものにしかず、これを行なうものはこれを楽しむものにしかず」から取って「ロータリーは知・好・楽」ではどうでしょうか、との意見を尊重し、たいへん素晴らしい題名の本となった。

冊子を全会員に配ってもなかなか読んでもらえないので一計を案じ、冊子を原稿にして「10分で話せる範囲を設定」し、トップのスピーカー3人に話の範囲を示して何回も読んで練習し、卓話当日、演台に立って分り易くゆったりしたスピードで淀みなく読んでいく。

聴く会員たちは卓話者が読む話にそって各自の本を読んでゆく。耳で聞いて目で読むことで記憶に残る率は、聞くだけに比べ2・5倍上がると統計に載っている。輪読会を3回行なえば9人の会員がロータリーについての理解と関心が深まり、いささかなりともロータリーに対する意識の高揚に繋がったのではないかと思う。週報に掲載された自分の話を読み返すことで更に認識が深まるという効果も期待されよう。このような地道な企画によって、徐々にロータリーの知識や素晴らしさが認識されていくのではないだろうか。

私は、輪読会を始めるにあたって次のように説明し

ている。

本来、『輪読会』は、英語やドイツ語などの文献を一人で読むよりも、6～7人が5～6ページを分担して翻訳、勉強して日を決めて会合し、各自が分担したページの内容を説明、解説し、互いに質問しあい、議論しながら理解を深め、知識を広める方式であり、互いに学び意見を交換し理解を深める研修方法なのです。

今回、「ロータリーは知・好・楽」を皆さんに知っていただくために、10分間の輪読卓話を担当していただきます。ここで大切なのは、「聞き手」です。「話し手」が一生懸命に練習して話をして、皆さんが耳を傾け、理解を深めようとする姿勢で聞いてもらわなくては効果がありません。「話し手」と「聞き手」が渾然と一つになって、共に参加しようとする姿勢が大切で、これが成功の秘訣なのです。

もう一つ大切なことは、輪読会の講演記録を会報委員会で週報に載せることです。話を聞くだけでは忘れてしまうものです。だから、皆さんに来週掲載される「輪読会」の記事をしっかりと読み返して頂きたい。

「聞いて、読む」ことで理解が一段と深まっていくのです。そして、このシリーズの卓話の記録を残しておくことが大切です。このような小さい積み重ねによって徐々にロータリーに親しみが湧き、理解が深まってくるのです。

我がクラブにとってうれしいことは、新しく若い会員がたくさん入会していただいたことで、将来のクラブを担う大きい力となるのです。その為にも全ての会員にロータリーの素晴らしさを知っていただくことが大切です。さらに「全会員が力を併せて、恵まれない人のために役立つよう共に行動に移すことで“自分の心の中に生まれる感動”を通じてロータリーの素晴らしさと、その意義を知っていただくことになるでしょう」

「人をやる気にさせるのは、理論や理屈によるものだけでなく、人間の心に焼き付けられた感動の記憶である」と言われることから、今回の企画は難しい理論ではなく、皆さんが心を開き、楽しく聞いていただける記憶に残るものなのです。聞き手として、話し手に対し「自分が話している時の心境になって、耳を傾けていただきたい」それが、“話し手”への誠意なのです。

3分間卓話、5分間卓話、10分間卓話、そして今回の「輪読卓話」と、新しいプログラムを組み合わせながら、皆さんにフレッシュな気持ちで例会に参加してもらうことが、クラブの活性化に繋がり八尾ロータリークラブの伝統となっていくのです

このような全会員が楽しく、ためになる企画を立案し実践していくことで、会員同士の親しみが増し、ロ

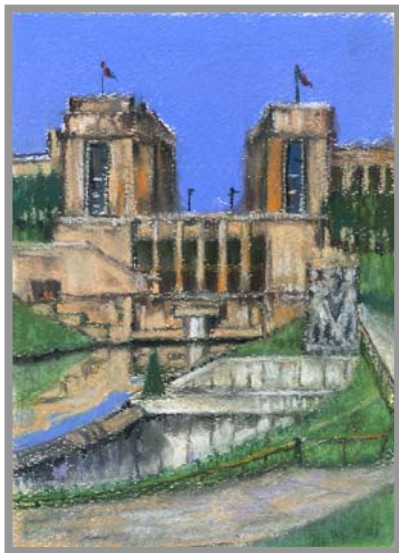
ータリーについての関心、知識が深まっていくのではないだろうか。

こんな、ちょっとした工夫がクラブの活性化につながっているのではないかと思う。当クラブに 85 名の会員が在籍し、大阪市外クラブで最高の会員数を維持し続ける原因の一つがちょっとした工夫にあると思う。常に新しいクラブ活性化への道を模索し、積極的に取り組んでいくことが大切なのであろう。

各クラブが新しい工夫をこらしながら活性化への取り組みを続けることによって必ずや、よき成果を上げ得ることは間違いないであろう。

# 29

毎週の例会は一期一会の心で



井伊直弼は桜田門外の変に倒れた薄命（46歳）の人であった。彼は「茶湯一会集」の中で「そもそも茶の交會は一期一会といって、たとえ幾たび同じ主客と交會するも、今日の會に再びかえらざることを思えば、実にわれ一生一度の會なり」とあり、一期一会とは生涯においてただ一度の會合であり、會ったときが別れの時なのである。

例え幾たび會う人であっても、今日の會合は二度とめぐってこない。だから一期一会は“めぐり合ひ”の凝視である、と記されている。

人生はすべて出會いであり、これは出愛に通じ、思いやりの心に通じる。

関西ロータリー研究会で、遠く滋賀県から参加された第 2650 地区のバスターガバナー山口善三さんは次のように話された。

「私は常に一期一会の心で例會に出席し、その積み重ねで 43 年皆出席することができました。それには自分のライフワークが挫折しないように、困難な仕事を乗り越え、健康に留意し、というような自己コントロールを心がけることで達成することができたのです。このことによって、ロータリーから得られた幸福と喜びがあり、人間として成長することができたことを顧みてロータリーに入れていただいたことに深く感謝しています。これから更に 50 年にむけて精進し



たいと思っています」。

山口パストガバナーの話の中にある「ロータリアンである幸せと例会出席の意義」をしっかりと私達に教えていただいたように思う。

例会出席を続けることは“出合いの重なり”ともいうべきもので、永年の間に稀有な教育的特性をもっていて“ロータリーは人を作る”場となっていると話された。

第50代RI会長ハーバート・テラー氏は「四つのテスト」に創作者としても有名であるが、氏の著書「我が自叙伝」の中で「ロータリーのしなければならない大きい仕事に人格者を育てること、つまり人作りがあるのではないか。政界や実業界において、また地域社会や家庭において、つまり生活のさまざまな領域において有能な人物を育成すること、そのことこそがロータリークラブのなすべき仕事ではありますまいか。よい市民、よい指導者を育てあげることが是非必要であります」このように、ロータリークラブに長年在籍して「他人に対する思いやりの心で、他人のお役にたつ行動を」という気持ちを自然に身につけることで自分を高め、人から評価されて社会に役立つ人材が育っていくのである。

そのために、毎週の例会は温かく、楽しみあふれ、信頼があり、常に人の身になって考える一期一会の集

いとして大切にしたいものである。

1999～2000 年度、第 2640 地区のガバナーをつとめられた成川守彦さんは、私に毎月、ガバナー月信送ってくださった。毎号月信の第 1 ページに坂村真民さんの詩を載せておられ、私はその殆どを保存させていただいている。

その中に、毎週のクラブライフが楽しく、人間関係が温かになる秘訣「こちらから」が載っているので披露したい。

「こちらから」

こちらからあたまをさげる

こちらからあいさつをする

こちらから手を合わせる

こちらから詫びる

こちらから声をかける

すべてこちらからすれば

争いもなくなごやかにゆく

こちらからおーいと呼べば

あちらからおーいと応え

赤ん坊が泣けばお母さんが飛んでくる

すべて自然も人間も

そうできているのだ

仏さまへも こちらから近づいてゆこう

どんなに喜ばれることだろう

自分が、自分がではなく、人さまを先にすることが  
ロータリーの心である。

このようにすれば、毎週の例会出席は楽しく、和やかになるのは間違いないであろうし、楽しく何十年ものロータリーライフを続けることができるに違いない。

毎週、「こちらから」を心がけ、

こちらからあたまをさげる

こちらからあいさつする

こちらから声をかける

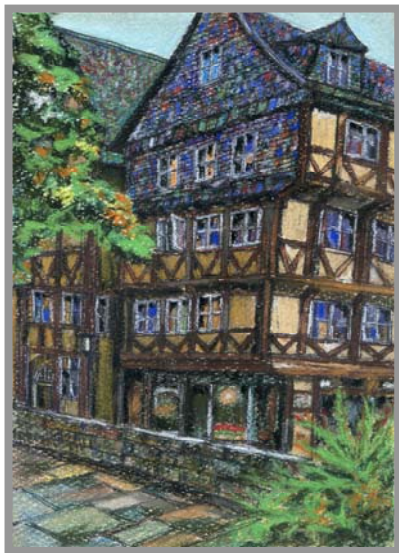
すべてこちらからすれば

どんなになかよく、したしく

たのしくなるだろう

# 30

## 日野原重明先生の 「豊かに老いを生きる」を読んで



私の 7 才下に弟昇がいる小さいころはやんちゃで手が付けられなかったようだが、私には兄ちゃん兄ちゃんと寄ってきて一緒に仲良く遊んだ記憶が多い。

小学校 2~3 年のころだったと思うが、父の言うことに憎たらしいほど反抗したためであろうか、若かった父は「コラ！」と怒鳴って弟を追っかける、弟は裸足で家の外に跳んで出て真剣に追いかける父に危険を感じたのか、高い木によじ登って下をながめている。母方の祖母が「許してあげて、許してあげて」と必死に父に頼んでいる。67~8 年前の我が家ではこんな光景がよく見られたものである。

弟はやんちゃであったが、私と違って勉強は大変よくできた。小学時代は級長を続け、6 年生には児童長をつとめ毎朝の朝礼で、大きな声で全校生徒を前に号令をかけていた。私も何回か見に行ったことがあり、弟の力強さに感心したものである。父は、何度も何度もそーっと弟の雄姿を見にいつては「自分の小さいころと同じだ」と自慢していたものである。

当時、義務教育は小学校までで旧制中学の受験には学区制などなく自分の目指す学校に挑戦することができた。弟の中学受験に関しては、既に大学生であった私に一任された。私は、いろんなデータを集めて旧制大阪高等学校の合格率が高かった住吉中学を選び

試験に合格したが、中学 2 年生の時に新制度になり、男女共学、学区制変更等で府立阿倍野高校に転学、京都大学理学部合格、基礎 2 年を経て学内浪人が多く競争がきびしかった医学部にストレートで合格したときには家族全員が大いに喜んだものである。

最近、ロータリーの会合で弟の学友に出会ったことがあり、友人は「弟さんは医学部にトップで合格して、トップで卒業しましたね」と聞いたことがあるが、本人に聞けば「そんなことはないだろう」という。

卒業後、本人の希望で基礎医学を選び薬理学専攻、京大助教授から新設された滋賀医科大学の初代教授に就任。後に日本薬理学会会長、日本高血圧学会会長、日本循環薬理学会会長、アメリカ生理学会名誉会員などを経て、私の会社の役員となってトヤマ循環器病治療薬研究所長として研究を続けている。

毎週 2 回、京都の吉田神楽岡の家から大阪本町のトヤマビルにやってくる。昼はいつもバカ話をしながら一緒にざるそばを食べるのがならわしである。「仲のいいご兄弟ですね」と感心されるが、昔のままの良い関係が続いているのは、なにより嬉しいことである。

平成 17 年 3 月 22 日、滋賀医科大学開学 30 周年を記念して学長から表彰状が授与された「貴殿の研究業績は開学以来本学から発表された研究論文の被引用回数合計において最多の優れた記録 (8,142 回) で

あり本学の研究の発展に大きく貢献されましたので開学 30 周年を記念してその功績をたたえ表彰します」とあった。

また、1998 年、ノーベル生理学賞の対象となった一酸化窒素 (NO) に関する国際学術集会、血管の神経支配に関する国際学術集会を主催するなど、わが弟ながら医学の進展にいささかなりともお役にたてたことを嬉しく思っている。

弟は今もトヤマ循環器病治療薬研究所で研究を続けているが、2001 年 9 月 1 日付で多くの人の参考になる「やさしい健康シリーズ、元気で長生き一やまいと予防の薬」447 ページを編著した。

半分以上は弟が書いたようだが、親しい専門分野の権威に就筆をお願いし、京都府立医科大学前学長、滋賀医科大学元学長、慶応大学医学部長、ハワイ大学医学部教授、島根医科大学前学長、大阪市立大学前学長の皆さんに執筆していただいた。

京都大学名誉教授・家森幸男先生は推薦の辞に「健康に輝く心豊かな長寿への道標」は、如何にすれば元気で長生きできるかに対する明確な回答が本書です。と巻頭文を寄せておられる。弟のことを書き過ぎたきらいがあるが、日野原先生の話の導入部としてお許し願いたい。

弟は、本書が完成し書店に並ぶと同時に、多くの医学関係の方々に送付贈呈したそうである。お礼の手紙がきたり、こなかっただけのする中であって、聖路加国際病院の名誉院長、日野原重明先生から丁寧なお礼状があったとのことである。

日々多忙な医療、教育にあたっておられる先生からのお礼の手紙であり、「どれだけお忙しい方でも、人の厚意に感謝の手紙を書かれる立派さ」に感動したそうである。

部外者でも、よく存じ上げている日野原先生は、オウム真理教によって引き起こされた地下鉄サリン事件のとき、多くの被害者が搬送されるのを察知され、先頭に立って、待合室、廊下、食堂などの広場にベッドを並べて、多くの患者を収容し早期治療に当たられた活躍の様子をテレビで拝見し、頼もしくも、頭の下がる思いがしたものである。

後日の発表によれば最も多くの被害者を収容されたのは聖路加国際病院であり、初期の素早い対応が患者を救う要因であったと報道されている。

2006年6月、日野原先生は、あるテレビの番組で、「希望を行動に移す勇気が大切である」と話しておられる。また「わたしとおかあさん」が新聞に掲載さ



れ、その中で日野原先生が医師になった動機を書いておられる。

「私は6人兄弟の3番目でした。2つ下に弟が生まれたとき、弟を抱いている母に“背中でもいい……”と母の肌にふれたいと希望されたという。私が10歳の時、母は仮性尿毒症で意識を失うことがあったが、その時「お母さん！死んだらいや……」と叫んだそうです。親切な家庭医の安永先生に日夜往診していただき、母の命を助けて下さったことが子供ながらたいへん嬉しかった。安永先生の往診の姿をみるにつけて大人になったらお医者さんになろうかしらと思った。お母さんも心の中でそう願っていたのではないかと推測していた。神戸のミッション・スクール関西学院中学部を卒業後、京都の第三高等学校を志願した。入試の前日、母は、神戸で一番のうなぎやで最上のかば焼きを注文し、自分に投資してくれた母の心の温かさを忘れることはできない。

「私は、1951年から1年間、エモリー大学へ留学したが、もし留守中に母が急死することがあっては、と心配でならなかった。母は留学中に心臓病で一時入院したが、友人の医者が面倒を見てくれ無事退院したとの報せを受けて安堵した。留学を終え帰国した時、自宅療養中にかかわらず、私の家まできて玄関で迎えてくれた。その時の喜びはたとえようもなかった」と記

しておられる。やはり母への思いは格別なものであつたのだらう。

日野原先生は1911年山口県生まれ、1937年京都帝国大学医学部卒業。1941年聖路加国際病院内科医、医長、院長、現在名誉院長、聖路加看護大学名誉学長・理事長をつとめられ、1998年東京都名誉都民。1999年文化功労章、2005年文化勲章の榮譽に浴され、若い頃と変わる事のない活動とユーモアで多くの人の尊敬を集めておられる。

先生は、人間が健康で活躍できる限界の常識を塗り替えられ、多くの人に勇気を与えておられることを有り難く思う。

1945年、大阪万博に沸く中で、忘れ得ない日航機ハイジャック事件が起き、仕事で福岡に向かう日野原先生が搭乗しておられたとのことである。赤軍派が「ピョンヤンへ行け！」と告げられた時命の危険を感じて自分の脈を計られたが、脈は早く打っていたそうである。

先生の「豊かに老いを生きる」の著書の中に次のような教えがある。

#### 1) 自分自身の羅針盤を持つ

「定年が近くなると、会社とか役所という大きい船から降りなくてはなりません。皆さんは孤独を意識す

ることになり、そのとき自分は何であることを発見することに迫られます。そのとき考慮に入れねばならないのは自分のことだけではなく他人のことも考える、即ち他者への配慮の気持ちをもつことです。そんな生き方への転換が大切です。それには自分で自分を訓練しなくてはなりません、その際に、良き友がいることが大切なのです。あの人のように私も行動したいというような人生の先輩や、若い友をもっていれば人生の午後になっても意味ある生活を選択することが出来るのです。また、その人の精神や魂が健やかになることが望ましいのです。心身共に健康という理想的なことは望めなくても、心が健やかであることが大切です」

「いつも他人への配慮ができる人を目指し、それを習慣付けなさい。このことは、あなたに善い報いをもたらすでしょう」

「他人に対する物腰が自然に柔らかくなるでしょう」と教えておられる。

## 2) いつも学ぶ姿勢

ゆとりができ、仕事の量が少なくなったとき、自己反省の機会ができます。そこで努力すれば新たな自己形成ができるのです。私たちの大脳は 60 歳になってもまだ 25%しか使っていないのですから、今までしたことのない何か新しいことを始めることができる

のです。日本人の寿命は世界一長くなりましたが、感謝し、生き甲斐のある長寿を心がけなくてはなりません。

人間は永い生涯に何らかの喪失の体験を何回も持つこととなります。喪失体験の中にあるとき、それをサポートしてくれる第3者がいなくてはなりません。私たちは人生の後半で他人をサポートできる自分になりたい、それが私たちの生き甲斐に関ってくるのです。それは、人から何かをしてもらうのではなく、自分を捧げる喜びになるのです。

ボランティアは、見返りを求める行為ではなく、時間を捧げ、財産を捧げる行為をいいます。自己を捧げるボランティアには生きる喜びがあり、自分に寿命が許されたことに感謝する生活をもつことができるのです。

### 3) 若い人との触れ合いを

人は年をとると異常に寂しさを感じるものです。体が悪くても、その人の存在がスクラップであるという印象を当人に与えないように、昔は仕事をしてくれた大切な老人としてその労に感謝しなければなりませんし、それには、子供や若い人が老人をそのように見るような教育が平素からされねばなりません。若い人と老人がもっと触れ合う機会をもつことが大切です。

老人が若さを保つことについて、サムエル・ウルマンは「青春の詩」で「人は信念と共に若く、疑念と共に老いる。人は自信と共に若く、恐怖と共に老いる。希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。」とあり、年をとってもいつも希望をもって明るく生きることが若さを保つ秘訣であると教えておられる。

私は、94歳と年を重ねられた日野原先生が、今もなお真摯に積極的な活動を続けておられることに大いに励まされる。それは丁度、相田みつお氏の詩にある「いつまでも勉強、いつまでも青春」のよき手本のように思うのである。

そして、相田さんの“顔”と題する詩に  
「仕事はなんでもいい 一生けんめいに  
 生きている人の顔は みんな美しい  
 美しい顔に なりたい」

を思い浮かべる。

私たちロータリアンには、例会で多くの親しい友人と毎週出逢い、話し合い、信頼関係を深め、若い人と年配者との長年にわたる触れ合いがあり、ウルマンの詩に示されている希望、信念、自信、を創り出す場となっている。それはまた、相田みつお氏の詩

「生きていて 楽しいと思う ことの一つ  
 それは 人間が人間と 逢って人間に

ついて話をする ときです」  
を実現する場でもあるのだ。

「外灯というのは 人のために つけるんだよな  
わたしはどれだけ 外灯をつけられるだろうか」

ロータリーの「奉仕の理想」“人の身になって考え、人のお役にたとうとする心”も「超我の奉仕」も「最もよく奉仕するもの、最も多く報われる」もすべて自分のためではなく自分以外の人のために、を目的としているのである。

それは、ひいては「人のために外灯をつけること」で、人間として最も尊いことで、ここにロータリーの素晴らしさが存在するといえるだろう。

日野原先生は、1987年創立された東京銀座新ロータリークラブのロータリアンとして、また医師として多くの人の心と生命を守られ、多くの人々に希望と、生きる勇気を与えられておられることは、私たちロータリアンの誇りであり喜びでもある。日野原先生のご活躍とご健康、ご多幸をお祈って稿をとじる。

# 31

「変えたいロータリー」  
ロータリー活性化のために



## A) 会員減少を食い止め、増加傾向に変えよう そのために、魅力あるクラブにすること。

1) 増加傾向にあるクラブを参考にして行動を起こそう  
八尾 RC の池尻会員は 40 才で入会し次年度副会長の 55 才である。彼は 15 年間に 30 人の会員を推薦し、一人の退会者も出ていない。それには常に心配りが大切と聞く。

新会員が「選ばれてロータリークラブの会員になった喜び」を語り、若者がロータリーに早く馴染んでくれることを知って嬉しく思ったそうである。

2) 広い人脈を持つ若い会員のやる気に期待しよう

会員に増強の意欲を高めるには「自分が RC へ入ってよかった」「RC が楽しく、互いに学びあい、人の為に尽くす」というロータリー本来の姿を実感してもらうことが大切である。対立やトラブルがあれば改善し、若い会員の広い人脈を生かし増強につとめよう。

3) 出席が楽しく活気あふれる例会にしよう

八尾 RC では毎月 1 回の 3 分間卓話か 5 分間卓話を 2 年続けて採用し、できるだけ毎年、全会員が話す計画をたてた。30 分の卓話時間、会員が入れ替って短い話に取り組む。それぞれがテーマを決め「決められた時間内で話せる話」を組立てる。そこに「自己研修」があって意欲が湧き、例会の卓話時間に「短いが内容のある話」に拍手と笑いがあり、クラブに活気と、会



員相互の理解が深まって、居眠り雑談がなくなった。

各クラブ独自の新しいプログラムを考えて実行にうつし活性化したいものである。今年度は、創立 40 周年に作った「週刊誌のように気楽に読めるロータリーの本」を、3 人による 10 分の輪読卓話を毎月 1 回行うことにした。全会員が参加し笑いと共感のあるプログラムを実行することで、楽しさの中に、学ぶ要素を組み入れ、クラブの活性化に寄与しているように思う。

現在、会員数 87 名、第 2660 地区 86 クラブ中 7 位、大阪府 40 クラブの 1 位を保っている。

#### 4) 新会員の同化について

例会場では、創立会員の周囲に新会員の席を設け、親しく話しあうことでクラブに馴染みやすくし、親睦会、皆和会（3 年以下の会員と 70 才以上の会員の集い）で、ビールが入れば若い会員から率直な質問が出て話が弾む。また、地域社会の会員候補者、に「ロータリーの概要」を分かりやすく簡単に読める資料が必要であろう。

#### 5) ロータリークラブは、選ばれた人の集いであるとの誇りを持つ

会員は、職業分類を基本に推薦され、会員選考委員会において「人柄、社会的、職業上の適性を調査し、理事会にはかって承認され、更に全会員に通知して異議申し立てのない場合に初めて入会が許可される」と

いう「選り抜きの人」であり、このようにして選ばれた人で構成されるロータリークラブは、エリートの集いである認識をもつことであろう。

ここで、エリートにはそれに伴う「Noblesse oblige」・・・「選ばれた人にはそれに伴う義務」が伴うことを認識してもらうことが大切で、だからロータリーでは各会員が永年の間に「奉仕の理想」“他人に対する思いやりの心、助け合いの心”、「超我の奉仕」－“サービス第1、自己第2”を身につけることで、この心を「クラブに生かして楽しい信頼感のあるクラブに、家庭に生かして和やかで温かい家庭を、事業に生かして信用される企業に、社会に適用して住み良い社会を、ひいては平和な世界を・・・」という、よき循環が期待されるのである。

その基礎に、ロータリーを楽しみ、互いに学びあい、人のため、社会のために尽くそうとする善意とエネルギーがロータリークラブの中に蓄えられて、よき社会人を育て、世界に尽くすロータリーを育て上げるのである。この価値ある目的の達成を担うロータリアンに選ばれた誇りを持つて持とうではないか。

## **B)ロータリーの基本は職業奉仕であり、事業の永続と 繁栄の源である**

ロータリーが他の団体と根本的に違う点は“職業奉

仕”という独自の理念に基づいていることである。

職業奉仕とは自分の職業を誠実に努力することが奉仕であると自覚することがその原点であり、ロータリーでいう職業とは、すべて地域社会の人々に尽くすために存在するために、神から与えられた「天職」と合致するものであるから、ロータリアンは職業を奉仕の原点と考え、倫理的水準を高めようと努力する自分の職業にも、同業の職業人にも定着するよう努力しなければならない。それがロータリーのいう職業奉仕なのである。

1908年、ロータリーに不滅の足跡を残したアーサー・F・シェルドンは「商取引は、売り手と買手との満足感の上に成立する。そのために、信用という信頼関係を確立することが重要であり、長期にわたって安定した利益をあげることと信頼関係の確立とは表裏一体であり、その精神的境地は、ロータリー精神と一致するだけでなく、相手の為に尽くすという Service の概念とも合致すると断定。「永続的に成功する商売は、相手に Service を提供することによってのみ認められるもので、商取引に関係するすべての人々が利益を受けるものでなければ正当なものではない」と語っている。

シェルドンは、1911年に開催されたポートランドの全米ロータリークラブ連合会を所要のために欠席

したが、自己の所信を書面にして送り、それをチェスレー・ペリーが代読した。

“He profits Most Who Serves Best” 「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」を公表したのである。続いて、ミネアポリスロータリークラブのフランク・コリンズは演壇に立って「私のクラブには創立以来、守り通した原則があります。それは利己ではなく Service である。即ち“Service Not Self”である」を公表し、参加者全員に感動を与えたのである。

後に Service Not Self は“Service Above Self”「超我の奉仕」と変更され、1950年、デトロイトの大会で「ロータリーの二つの標語」となり、「四つのテスト」と共に職業奉仕の進展のために大きい役割を果たしている。

1) 会員の事業発展はロータリー活動の維持発展と人作りに繋がる。

会員は、事業及び専門職業に携わる人であるから、会員の事業の発展と安定、利益向上を図ることが、ロータリー活動を維持し発展させる前提になることはいうまでもない。

ロータリアンは日々の仕事に精魂込めて努力することが大切であるが、そのことによって、ロータリアンは「心を高める修行」をすることになり、それが「職業倫理を高揚」につながる。

自分の仕事に打ち込んで一生懸命に働き続ける人は日々の仕事を通じて、厚みのある人格形成が可能になる。ロータリアンが自らの仕事に誠実に努力し成果を上げることは、クラブ会員として長く在籍でき、ロータリー活動の維持発展に寄与することにつながるのである。

自己の仕事に打ち込むことで「心を高める修行」を通じて「職業倫理の高揚」と厚みのある人格形成が可能になり、魂をこめて自分の職業に献身努力することが、職業を通じての人づくりとなるのである。

ラテン語に、「仕事の完成よりも、仕事をする人の完成」とあるように、ロータリアンが職業奉仕に励むことが、「仕事をするロータリアンの完成に繋がる」と言えるのであろう。

### C)ロータリーは人材育成の集い

「四つのテスト」の創作者であり、50代RI会長を勤められたハーバード・テラーは、著書「我が自叙伝」の中で「ロータリーのしなければならない大きな仕事に人格者を育てることがあるのではないかと私は思っています。政界や、実業界において、また地域社会や家庭において、つまり生活の様々な領域において有能な役に立つ人物を育成することこそロータリーのなすべき仕事ではありますまいか。良い市民、

良い指導者を育て上げることは是非必要なことであります」と述べている。

ロータリーは多くの会員と、心を開いた付き合いの中から、お互いに温かい友情と、信頼関係が生まれ「人の身になって考える思いやりの心、助け合いの心」が徐々に育っていく。このようにして人間は成長し、人材が育成されていくのである。

「ロータリーの真の姿は、Enjoy Study Service 一楽しみ、学び、奉仕する」と言われるが、長年にわたって楽しみ、学び、奉仕すること信頼関係を深めることで人間は成長し、良き人材育成が可能になっていくのである。

ロータリークラブが楽しく活気あふれ、友人との心温まる交友、みんなが出席したくなるような例会にすることが、その基本なのである。

## D) 世界に尽くす奉仕の実績から学ぼう

### 1) 地球規模の人道的プログラム「ポリオ・プラス」

200 年を要した天然痘撲滅より難しいと言われた「ポリオ及び他の感染症」を、1985 年からロータリー創立 100 周年にあたる 2005 まで、20 年かけての撲滅運動を WHO、ユニセフ、各国政府の協力を得て、現在まで 20 億人の子供にワクチン接種を行い、悲惨な病気が終結にむかっている。

この歴史に残る大事業のきっかけをつくったのは、東京麹町ロータリークラブの山田ツネさんである。彼は国際ポリオプラス・コーディネーターとして、64歳で没するまで心血を注いで「ポリオ・プラスの奉仕」に献身された。

「私たちは、命をかけて世界の子供たちをポリオの恐怖から救おうとしたロータリアンのことを決して忘れてはならない。このような人達がいる限り、ロータリーは常に世の中に訴え続けることができるであろう」私たちは山田ツネさんが抱いていた志の一端を受け継ぎ、未来のロータリーを担ってくれる新しい仲間を迎えることの大切さを認識し、行動に移したいものである。

## 2) 日本独自の「ロータリー米山記念奨学会」

日本ロータリーの祖、米山梅吉翁は、日本、アジアの学生達に学費の援助を続けてこられ、その遺徳を継ぎ設立されたのが米山奨学会である。毎年、主としてアジアからの留学生に奨学金を支給し、各ロータリークラブの会員が奨学生にきめ細かいお世話を行っている。日本の国費奨学会に次いで、民間第一の規模の奉仕事業である。

2002年度、第2660地区年次大会のプログラム「21世紀日本のアイデンティティー」の中で、パネリストの金美齢さんは次のように語っている「私の

主人は台湾大学を出て東京大学に留学し、国費留学生として修士課程を修了しました。ドクターコース在学期間を通じ、理科系ゆえに多忙でアルバイトは出来ず、経済的にハードな日々を送っていましたが、幸い米山奨学金を頂く幸運に恵まれ、博士号を取得することができ東京理科大学に奉職することが出来ました。どれだけ多くの留学生が米山奨学金の恩恵に与っているか、世間では知らない人が多いと思いますが、米山奨学会は日本一、即ち世界一の奨学会です。ロータリーは自己宣伝をしないという美意識を持つことも大切ですが、「男は黙ってサッポロ・ビール」じゃあないのです。世界にしっかり発信することが 21 世紀のロータリーにとって重要な課題であると信じています。

### 3) ロータリー財団奨学制度

ロータリー財団奨学生は、現在までに 35,000 人が海外で学び、世界理解と平和に貢献している。今やロックフェラー、フルブライト、メロン奨学会と並んで世界第一級の位置を占めている。

日本から財団奨学生として選ばれてアメリカへ留学した緒方貞子さんは日本で 2 人目の奨学生である。国際政治学を学び、国連難民高等弁務官を勤め、40 を超える国を訪れて紛争地の難民援助に多大な貢献をされた。緒方さんのリーダーシップで、1500 万人のモザンビーク難民を救った活動は歴史に残る大事



業であった。

2004年、大阪で開催された国際大会は史上最高の参加者を迎え、盛大に挙行された。この大会で基調講演をされた緒方貞子さんは「1951年、東京ロータリークラブの推薦でロータリー財団奨学生としてアメリカのジョージタウン大学の修士課程で国際政治を学ばせていただきました。特別なチャンスをいただいて国連に入ることができ、私を国連難民高等弁務官へと導いてくださったのです。私が今日あるのはすべてロータリーのお陰でございます。国際大会に参集されました多くのロータリアンの皆さんに心から御礼申しあげます」と感謝の言葉を述べられた。

そして「ロータリーとの関係を通じて、地域社会への奉仕活動の重要性を学ぶことができました。ロータリーのモットー“超我の奉仕”は私の心の指針となったのです。私の勉強の主題は『どうして戦争がはじまるのか』でした。日本の壊滅的な戦争への突入の理由は何だったのか？今世界の若者が戦争の脅威にさらされています。世界で多くの難民が発生し、さまよっています。私たちは彼らの生活を助け、復興させ、自立できるよう努力するよう力を結集しなければなりません。最後に「団結力のない慈善は役にたたないものです。ただ道徳的な価値だけでなく、団結は世界的な脅威に対処していく為の唯一の方法ではないかと

思うのです」と話された。

緒方さんは、ボスニア紛争をはじめ何千万人という難民を救った「小さい巨人」と尊敬されている。1人1人のロータリアンが永年にわたって積み重ねてきた善意の醸金が世界に、地域社会に大きく貢献していることに誇りと喜びを覚えるではないか。

日本から選ばれた3人目の奨学生は、京都ロータリークラブが推薦された元福岡大学学長の宮野成二さんである。宮野さんがイリノイ大学の大学院で、有機化学の実験を昼夜兼行で続けられた記事が「ロータリーの友」で紹介されている。その中に「私たちは提供した労働や技術に対して正当な報酬を要求する。それは当然のことで、近代社会はこの契約で成り立っている。しかし一方で、無償の行為の尊さがどれほど人々を力づけ、励まし、奮い立たせ、世界を動かしてきたかということも決して忘れてはならないと思う。私がロータリーとロータリアンを素晴らしいと思うのはこの点である。がバナー時代の千宗室さんが、一期一会の意義をしばしば強調されたことを思い起こす。ロータリアンは無償の行為、お返しを求めない奉仕活動が続けるが、実はそのお返しは百倍、千倍にもなって世の中を潤しているのである。この精神が続く限り、ロータリーは永遠に人々に訴え続けるであろう」と記しておられる。

## E)ロータリーの認識を深め、誇りを持つこと

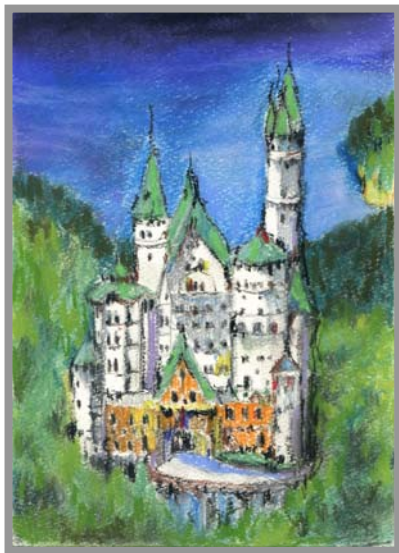
### それが会員増強に繋がる

私たちは 100 年のロータリーの歴史を育て上げられた先輩たちの実践力、組織力、生命力に敬意と感謝を捧げると共に、ロータリーの偉大な奉仕の実績を認識し、先人の意思を受け継ぎ、価値あるロータリーを発展させねばならない。会員増強の基本は、次世代を担う若い会員とロータリーを共有し、「信頼感あふれ、楽しく、人の為に尽くすロータリークラブ」に加え、ロータリーの素晴らしさを認識し、先人から受け継いだすべてを手渡そうとする強い意志の力が大切なのである。

バーナード・ショーは「人生は、私にとって燃え盛るたいまつです。それを、順送りに、よりよい未来をつくるために、次の世代へ燃え盛るたいまつとして手渡していきたい」と語っている。私達はこの大切なロータリーを、次世代に正しい形で送り継いでいくことが重要な使命であることをしっかり心に留め、次の時代を担う新しい会員を育成するために全会員が力を合わせて頑張ろうではないか。私達の先輩が築き、私達が受け継いだロータリーを着実に譲り渡していることの意識を高め、力を合わせて行動に移すことが大切なのである。

# 32

## パストガバナー・佐藤千寿先生の 「選ばれたる人」を読んで



佐藤千寿パストガバナーは8月7日、お盆の休みに自宅の書院に籠もられ、買いだめした本を読んで過ごされたそうである。その中に李登輝前台湾総統が著された「武士道解題」があり、格別の感銘を受けられたと述懐しておられる。

この書は日本人に対する警鐘に留まらず、未来を切り開く政経論であると記され、ロータリーの現状を論ずるにあたって、たいへん参考になる言葉があるので引用させていただきたい、と書いておられる。

私は早速同書を買って求め、新渡戸稲造先生が書かれた「武士道」と併せ速読し、久しぶりに心洗われる思いがした。

### 1) 武士道の感化；

武士道の徳は、一般より遥かに高いものであったが、やがて道徳的感化はいろいろな社会的階級にも伝播していき、それは丁度「太陽が昇る時、まず最高峰の頂を紅に染め、それから漸次その光を下の谷に投ずるように、先ず武士階級を照らした倫理体系は時を経るにしたがって大衆の間からも追隨者を惹きつけた。

このようにして、多くの人々が「人倫の道」を身につけて世界に誇る「日本精神」の真髓が結晶していった。

武士道は、有名な武士、学者の口伝もしくは筆で伝えられたもので「書かれざる掟」心に刻み込まれた「不

言不文」であるだけに、実行によって一層力強い効力が認められた。

武士道の豊富な道徳的教義の源は、孔子の教えであった。「君臣、父子、夫婦、長幼、朋友」における五倫の道は、中国から輸入される以前から日本の民族的本能として認めていたところで、孔子の教えはこれを確認したに過ぎないと語っておられる。

「父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信」は人間として守るべき最も基本的な道徳規範であり、儒教の「人の守るべき五つの道として、仁、義、礼、智、信」があげられている。

しかし、戦後の日本では、いわゆる「平等主義」について誤った解釈から、「エリート」「選良」といった一頭地を抜いて傑出した者の大切な存在に関して、極めてネガティブで攻撃的な論が大手をふってまかり通り、指導的立場にある政、官、財をはじめ多くの知識人までに強欲感染症が広がり始めている。

ここに教育の重要性があり、「人間として、社会の一員として守るべき基本的な倫理をベースにした上に自由主義があること」を認識させることが大切なのであろう。

「葉隠」に「武士道とは死ぬことと見付けたり」とあるが、同時に「我、生きる方がすき也、多分すき

の方に理が付くべし」とあるが、「生きて君のために  
尽くことこそ武士の道である」と主君への忠誠を顕し  
ている。

理と情との相克を止揚して「永遠の肯定」に導こう  
としているのがロータリーの「職業奉仕」であって、  
ここにも「武士道」から学ぶものが数々ある。

職業奉仕なくしてロータリーは存在しない。

李登輝さんは、台湾が日本の領土であった時代に、  
旧制台北高等学校で学び、京都大学で学ばれて自己の  
人生行路に生かしておられる。

李登輝さんは、「これから日本を背負っていかねば  
ならない若い人々は、ややもすれば未来への指針を見  
失いがちのよう見えてなりません。そしてその大部分  
の責は確乎たる姿勢と信念を見せてこなかった大人  
たちが負うべきだと思います。なぜなら「子供は親の  
背中を見て成長するからです。戦後の混乱の中で、日  
本の大人は、それまでの世界的に素晴らしかった精神  
的な価値観をないがしろにして、「高度成長」のもと  
で物質主義的で拝金主義を追い求めえきたものではな  
いでしょうか。そのような親たちの生き方を目の当  
りにしてきた若い世代が、物質主義に走りだしたとし  
ても、誰も文句はいえないはずです。『武士は食わね  
ど高楊枝』という毅然とした生き方はどこへ行ったの  
でしょう。国家百年の大計に基づき、“清貧”に甘ん

しながら、未来を担って立つべき世代に「人間いかに生きるべきか」という哲学や理念を率先垂範してみせるはずの政治家、高級官僚、経営者などのトップリーダーたちが私服を肥やすなどに汲々として、国家、国民の未来のことなど何一つ考えていなかった現実を知ったとき、若い人々の大きい衝撃は想像に難くありません」と語っている。

## 2) 選ばれたる人・エリートたるの誇り

ロータリアンは国の屋台骨である経済、専門職務の代表者、「選ばれたる人」の集いである。1923年に採択された決議 23-34「セントルイスの宣言」の第1に「ロータリーとは、自己の為に利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕しようとする義務感と、それに伴う衝動との間に起こる心の葛藤を和解させようとする人生哲学である」という千鈞の重みを持つ一句がある。

ロータリーは、本来エリートの組織なのである。エリートとは「選り抜きの人々」「精鋭」「社会の中枢」という意味だが、職業分類の原則に基づいて推薦され、選考委員会において選ばれ、理事会で承認され、さらに全会員に通知し、この手続きを経て会員になる人は「選り抜きの人」エリートなのである。

エリートにはそれに伴う「Noblesse oblige =高い



身分には道德上の義務が伴うこと」があり、高い地位にあるものは尊敬に値する倫理観、価値観を持っていなければならない。ロータリーには第1のモットー「Service above self」があり、これをロータリアン各自の倫理観として堅持し行動しなければならない。

昔、先輩が「エリート根性を持つな」とたしなめたのは「威張るな」「思い上がるな」という戒めであって「高貴の義務」を軽んじたわけではない。

エスマンは、「仲間の中にただ一人の賢者があればよい。しからばすべてが賢くなる。それほど伝染は速やかである」と提言しているように、ロータリーが人を育てていくのもこの伝染の力があるからではないだろうか。

ロータリアン一人一人が楽しみ、学び、人のために奉仕しながら賢者となるべく努めることが大切であろう。

### 3) 日本人よ「武士道」を忘れるな

日本の武士道は、西欧の騎士道に通じるものであり、アメリカに起源を持つロータリーは、実業人の騎士道にほかならないのである。

ロータリーが創立100周年を迎えた今日、天の啓示の如く現れた李登輝さんの「武士道解題」は、正にロータリーの金看板「職業奉仕」= Vocational service

＝を論ずるにうってつけの教本といえるであろう。

江戸時代の実業人は武士道を自家藁籠中に取り込んで「士魂洋才」として信奉したが、明治維新後は「和魂洋才」に転化し積極的に西洋文明を取り入れることになった。しかし、その根底にあるものは大和魂であって、これが近代日本発展の原動力になった、と言っても過言ではないのである。

ロータリー運動においてただ1点「各企業の基礎に確固たる倫理的信念を置き、その上に企業の管理を載せるが故に、常に実直な営利活動を行うことに務め、虚飾を排除した企業管理法をもって企業を發展させ、企業の倫理的水準を高めて社会に貢献することで、ロータリアンに対する一般人の尊敬と信頼を得ることになり、企業の体質が改善され、その結果として収益が増加する」という良き循環を生み出す職業奉仕がロータリーの根幹であり、それ故にロータリアンの企業が信用される所以であることを認識しなければならない。

企業の倫理的水準を高め、道徳的規範を守ることが、日本人が古来より守り続けた「武士道」の精神に通じることを知って嬉しい限りである。

ロータリアンは国の屋台骨である経済、専門職務の代表者、「選ばれたる人」の集いである。1923年に採

択された決議 23-34「セントルイスの宣言」の第 1 に示されている「ロータリーは、利己と利他の調和を目的とする人生哲学である」という千鈞の重みを持つ人間としての在りようを守り通したいものである。

## あとがき

お読みいただきました皆様に心から御礼申し上げます。

以前から親しくして 있습니다 神崎パストがバナーから、第1作完成後に身に余る感想をお寄せいただきました。

“貴著書新刊「ロータリークラブに入ってよかった！素晴らしい出会い よき師、よき友は人生の宝」の出版は日本中のロータリアンにとって快挙でありました。ロータリーに関する文献著作は古今東西に亘って数多く存在しますが、今回の貴著は大変ユニークな貴重なものとして多数のロータリアンから歓迎され共感を得ています。

戸田さんと同年輩であるロータリアンに本書を差し上げまして、先日その感想をお伺いしました。一夜で読了し、その中に親しかった多くの先輩ロータリアンの名前に接して感慨深くなつかしい思いをもつことが出来て大変良かった、との話でした。膨大な国際ロータリーの組織とその活動は一言で言ってロータリアンの教育、啓発にあるのではないのでしょうか。

ロータリー綱領に示されているようにロータリー

の目的は「Ideal of Service」(奉仕の理想)(サービスの理念)を奨励し育成するところにあります。本書がその役割を果たす上で多大な貢献をされるものと信じております。

是非とも第2集の刊行を果たされますことを期待いたし、ご健勝をお祈り申し上げます」

と心温まる感想をいただきました。今回完成しました第2集が、皆様のために少しでもお役に立つことができますれば幸いです。

アリストテレスは友情について「ふたつの肉体にひとつの魂が宿ること」と言い、エマーソンは「友情について」の中で「私達は健康に留意し、雨漏りしないように屋根をなおし、衣服を準備する。それなのに私達の持ちもので一番大切なもの、友情がなくならないように注意している人は果たして何人いるだろうか」と語っていますように、「友情」という特別のさずかりものに対し、注意を怠ることが多くあるのではないのでしょうか。

この特別のきずなが、いつまでも強く、さらなる成長をつづけるよう努力したいものです。「友情」ほど大きなものは、人生にざらにないでしょう。

バーナード・ショーは「私達にとって、人生ははかないローソクの光ではない。それは、私達がしばらく

の間手に持つたいまつの明るい炎のようなものである。私は、そのたいまつを、自分が持っている間、できるだけ明るく燃やし続けたい。そして、それを順送りに次の世代に手渡していきたい」と語っているように、私達みんながもっているロータリーのたいまつをたやしてはなりません。

よりよい未来をつくるために今、燃えさかるロータリーのたいまつを次ぎの世代にしっかりと手渡していこうではありませんか!!

103年前、混乱したシカゴの街で3人の友人と語り合っってロータリークラブを創立されたポール・ハリスさんの慧眼に敬意と感謝を捧げ、ロータリーの永遠なることを祈り、素晴らしい出逢いを楽しみたいものがあります。

筆 者 拝

## 筆者プロフィール 戸田 孝 1926年1月7日生まれ

〒659—0065兵庫県芦屋市公光町9—6  
大阪大学工学部卒業  
株式会社トヤマビル取締役社長 ほか

### ロータリー暦

- 1961年 八尾ロータリークラブ入会
- 1970年 同クラブ会長
- 1982年 国際ロータリー第2660地区 ガバナー
- 1983～93年(財)米山記念奨学会 一広報委員長、  
学友委員長、財務委員、長期計画委員
- 1986年 国際協議会グループ・リーダー
- 1987年 同
- 1989年 シンガポール規定審議会 代表議員
- 1989年 ソウル国際大会 副SAA
- 1992年 RIアジア地域リーダーシップ・コーディネータ
- 1992年 RI会長情報カウンセラー
- 1992年 RI職業奉仕タスクフォース
- 1998年 (財)米山記念奨学会 監事
- 1999年 ロータリー財団恒久基金日本委員
- 2000年 RI2004年国際大会副統括委員長
- 2002年 第3ゾーン会員増強、退会防止コーディネータ
- 2004年 同上

### その他

- 戸田奨学会 会長
- 大阪大学工業会 理事

ROTARYって何ですか？

ロータリーは知、行、楽

共に生きる、生きるとは分かち合うこと

積善の余慶





## 文庫版「素晴らしい出逢い よき師、よき友は人生の宝」②について

2006年10月に発行された書籍版「素晴らしい出逢い よき師、よき友は人生の宝 ①」続き、2009年2月に発行された「素晴らしい出逢い よき師、よき友は人生の宝 ②」を著者、PG 戸田 孝氏のご許可をいただき、PC上で閲覧できるよう、A6サイズに再編集しPDF化したものです。第2巻は、原本に合わせて横書きで作成しました。

2009年2月 大阪南RC Y. 木村

